

元げん

祿ろく

女をんな

村

上

浪

六

元

祿

女

いつも男ばかりに骨ついて、あまり角の取れぬも妙ならずと、聊か滑かに肌觸りの迂やかなところ、但し女は女ながら元祿の伊達模様と、扇髪と鯉茶式部、いづれに素筆を下さうかと反古の端に書いて、掌に丸め、これを机の上に轉がして捻みあげれば元祿女を拾ひあげたり、されば前後の順に當世風の鯉茶殿を後日の事として、まづこゝに元祿風の寛活小袖を掲げ出しぬ。たゞ髪を越して前に出るか、首筋を越して後に出るかの相違なり。

## 前編

其 一

夏の夜は蚊を取逐にして五百兩といへど、古昔より定めたる春宵千金の價值まだ半額を残せるに引替へ、そも〱四里四方の江戸繁昌より僅かに町四面に一寸八分の淺草觀世音を

引去れば、土一升に金一升の謠も二束三文の田舎相場と鳴雷の門前、人は雲の如く繞るが如く日夜雜沓の市をなして、袖と袖とに苦繩一定の飛交ふ寸隙もなき脚下を見れば、いづれも浮た調子の太平樂に酔ひし素天邊は元祿の空、罪も報いも消氣もない當時流行の寛活伊達に身代を打込んで、とかく浮世は斯うしたものとの慕咄まじりに人間一切の歌舞伎めいたり。わけて江戸は次第の扇形に末よく〱廣がる其の繁華の要、この淺草の夏は猶更ら立寄る對藝なすれど、混合ふ人語に目を倣うて顔の汗は不斷の雨かと疑はれながら、さて俄の夕立に一寸の地も濡さず、照續いたる乾蒸の炎暑にさへ境内に小石一箇の焼けたところなし。加之も徳川の流れます〱深く淀まぬ五代將軍の天下泰平、槍は刷毛繪に似たる霞を縫うて大名の行列道具に振立てられ、薙刀は蒔繪の鞘に緋羅紗の袋をかけて武家の嫁入道具に飾り立てられ、甲冑の矢は軒の菖蒲と共に五月人の形の添物に見るのみ、鐵砲玉は山奥の獵師が米

の種、實も諷の皮となりゆく當世に腰の兩刀は女童の紅白粉に等しく、たゞ金銀に飽かして身の全盛を誇る化初の比類、旗差物の蟲干よりも花ふりかゝる春の袖幕を簾ひ、陣鐘太鼓の響よりも色紙の音はじめに小耳を欲て、世は夢うつゝの正體もなき腹鼓、ほんといふ花火綴香の音にさへ大の男が飛上りぬ。この華奢風流を鑑ひし元祿の伊達に紙盡され、さらぬも毛豚男に魂魄の行方いづことも知れぬ折柄、武將の上に天下を握る時、將軍家は太公方として、生きた人間を取締るよりも死だ畜生の死骸一箇を持餘しながら、その捨場の論議に嚴しき捉を定められしほどの世の中、兒戯に似たれど浮世しらすの歡樂こゝに極まりて、人間萬事たゞ十佐衛の極彩色を施せるが如し。されば淺草觀音の境内、いかに立錫の地もなく日夜の繁華雜沓すればとて、紅粉の香と佛羅の匂ひに鼻を穿たれながら互ひに振返るのみの外、額と額は絶えず突合へど眞正面に對うて日と日の睨み合ふ事さへなき中に、どれほど腹の蟲の居處を間違へし奴が立交りけん、山門の軒下より彌佛の方へ俄に人浪を打出してわつと叫ぶ聲々。やれ唯唯や、寄るな、遁出せ、ぬいたぞ、

抜刀たぞ

人斬庖丁とは名のみの事、腰の兩刀は婦女の櫛笄に等しき化粧道具の當世、わけて繁華雜沓の繞るが如き淺草觀世音の境内、その山門の軒下より俄の聲々に喧嘩々々、ぬいたく〜と叫びながら人浪を打て一時に溢れ出しぬ。その抜た喧嘩の本人、いかなるものと見れば、いづれも日圓笠を脱捨たる三十前後の面理、名月や來て見よがしの小唄に殘る當時流行の大唄、雲の懸指こゝに時めいたる奴あがりかと思はるる武士三人が蟬の羽に似たる伊達薄羽織を腰に巻て、山形染の濃帷子に車鈎の大小を門差、撚緒の草履に毛豚の徒足を上せたるまゝながら、はや柄頭を叩いての大聲、なるほど中に一人の氣早く抜いたる奴あり。

その片相手は俗も案外の大前髪、名筆の浮世繪より脱け出たるが如き自然の色香こゝに深みどりの若衆が猶更ら優なる梅花の落し翫、わざとならず今日の暑さに羽織を脱いで下郎に持たせながら、竹屋町に等しく肩透しに縋込んだる紗帷子、銀箔溜の折幅廣き扇千に細身づくりの華金大小、誰が目にも厭々の節目に生れし次男か三男か、眞白の面に薄紅を浮べて相手の三人へ小腰を打屈めし體、嵐に探まるゝ名花一輪の梢に堪へざる風情あり。さては聞かでも知れし黒白の争鬭、事の善惡は置て身も心も世り出したる三人の毛豚男に持餘したる一人の若衆姿、いづれも衰れと見ながら誰一人の割つて出るものなかつた遠巻に取巻て芝居見物の如く人垣を築きあげぬ。

「や、今更ら何と口車に押戻されても退かぬぞ、まだ二十歳に足らぬ若衆ながら今日初めて世間の往來へ出られた年輩でもなし、いかに混合ふ雜沓の中とはいへ他の足か大地か平生の踏心地、草履加減もあるべき筈を、蹂躪つた其のまゝの無言に相違うて呼べど應へぬは我等三人へ喧嘩の賣人と見た、かくまで念入に賣込まれた折角の喧嘩を買はいでは武士の一分が立ち申さぬ、あらためて出られい、三人一時にかかる」とは言はぬぞ、現在こゝに抜た一人まづ當の相手ぢや」

「やれ幾度、お謝罪致しても同じ義ながら、不意に途中の事これと申して思召に叶ふほどの分別もない當惑さ、たいく御免なりませと御勘辨を願ふより外に、さて誰も力も盡果てましたる身、この人混と人聲に氣も心も、耳まで、うかと致して無挨拶のまゝ行過ぎましたる段は平に、ひらに」

「なに、何といふ、おもはぬ不意の途中に湧た出來事、口より外にこれといふ謝罪の音物もないとは、や此奴、我等三人を白晝の物ねだりに見て取た言分もはや、猶更ら以て抜た一刀の手前このまゝ鞘に納まらぬぞ、但し眞實、腹の底より前非後悔の臍腑を絞つての義ならば、生命に代ての手輕い業、踏まれた此の足の沙汰を今こゝで貳取て貰はうか」

小町の蛙を聞かぬ蛇に等しく、いよく横に曲り出しながら不敵の鎌首を据えし勢ひ、今は會釋もなく三方より吐出す毒氣に居縮められて、まだ世に馴れぬ若衆姿の猶更ら衰れに下郎もろとも遁るゝ道もなき主従の絶體絶命、たいさ傭いて無言のまゝ其處に蹲らんとせし折しも、人垣を築きて見物の汗臭き中より得ならぬ伽羅の匂ひ、ぶんと覆りて浮世の月も花も物かは、十八九ばかりの水際立ちし美人、ぬツと畫ける如く現れ出でぬ。

を持ちし鐵面牛皮の胸毛男かと思ひの外、みれば漢緑装束中の紅一點、此のごろ世上に持囃さるる菱川師宜が屏風繪より脱出でたるが如し。

まして芳紀は自然の男殺、やうくこゝに花の苔を破りし十八九、つや々と曉鶉の濡羽色に似たる黒髪を銀箔の大元結に束ねて、なぎ袖の生絹單衣に摺込模様の帯の端きりりと高く結びあげし風情、武士の娘にもあらず町人の秘藏にもあらず、さりとて賤しき下司の家にも育たぬ體、雪の額に振りかゝる切立の前髪を軽く片手に掻き上げながら、のツしりとせし身の舉動に引替へいきくと張切りし黒目勝に鬼の筋骨も抜取るべき艶を含んで、すつと喧嘩の中間に立ちぬ。

あまりの不意に、あまりの案外に、あつと呆れて驚いて、目の球を剝直せし三人の武士、おもはず胴膽に冷水を注込まれし心地しながら、山の如き見物の手前、今更ら退くに退かれぬ勢ひ。

「や、どここの檻を脱出た狂氣やら、うろく」と你縋臭い女童の出る場合でないぞ、退たそこ退けッ」

「いかな蒲葉女とて、出ます場でもないものが、この白晝の衆中に身の艶も無う、お日觸り

に出ましたは、よくくの事、こな片相手は、ちと前方よりの心易い知人」

「知る知らぬは汝等の事、そこ退て當の相手を出せ、わるく動かば拔た人斬庖丁に男女の差別はないぞ」

「男、女子の差別は無うても、れきく」の殿達か斯う打揃うての暗業に、相手の弱いと強いは、お差別のあらう筈、わけて先刻より謝罪に盡果てた此の、この若衆お祈りなされて、どれほどの御手柄になるやら、また取るにも足らぬ端た女の血は、たぐくお刀の汚穢となるまでの事、ほゝゝゝゝ」

「しやッ面に似合はぬ此奴、や、ほざくぞ、ほざくぞ」

「似合ますやら、ませぬやら、をり惡う身たしなみの鏡臺もない途中の事、ほゝゝゝゝ、えゝ貴方様、何と遊ばされたぞ、あの方々は御酒興の基、さゝ早う、早う」

女にあるまじき言葉ばかりか、顔にも姿にも年にも似ざる不思議の不敵さ、ぐいと若衆の手を取つて我が身に押隔てながら、驚く見物の衆中へ突入れたるまゝ、またもや靜かに振返りて機關人形の如く三人に對ひし風情、どれほど性根の落着たるか、この夏の炎天に一半の汗も流

さず、この取詰められし敵手の前に日色も動かさず、さらぬも美はしき天生の美顔いよく涙流りて物返し。

「この廣い江戸中、いづれ御身分に叶うた相應の御敵手もあらうもの、あの若衆たゞ一人を取込めての御酒興とは、あまりの事、なれど今、折角の的を取退ました身に、もしや後の御用とあらば」

「随分お相手も致しかねぬ身と、そこまでは口に言はねど、心の一物ありくと面に現せし體、見物おもはず動搖めいて、感激の舌鼓を打鳴す中より、誰とは知らず猛牛の呻るが如き聲、一出来いた女、當世無類の花ぢや、女房に欲しいぞ」

そツと影身に潜うて宿でも見届けし役ならば鬼も角、この晴がましき白晝の人中に大聲あげて喚に欲しいと吐す場所しらずの無遠慮もの、いかな奴かと見返れば、ぬツと見物の頭上に一尺あまりも高く抜けいでたる大綱笠、眼前の三人に對うて日色も動かさぬ身ながら、さても女は女、どこやら女なりけり、この一言に眞白き顔の邊、ぼツと薄赤う染出しぬ。

## 其二

天下の直參といふ旗本の巢を構へて軒を並べ

し番町のうち、土手三番町に一番目の高取と数へらるゝは四千石の木田内記、その一子小一郎こゝに當年十八、他に同胞もなければ猶更ら父母の寵愛まだ前髪も取らぬ若衆姿のまゝ、加之も生來の優形に華姿風流を添て、珠玉を錦繡に包むが如く一入の祕藏に育てあげられつゝ、もしや庶々の身分でさへなくば江戸中の好奇心に身代かけて争はるべき男色の随一、今日まで相手なしの無事には済まぬ筈ぢやと、知る知らぬ聞傳へての風聞とりく。

庭苔の香を渡るまで宵の打水させながら、まだ残る雪の餘炎に設障子を開放ちつゝ燈火を遠退けて、たい奥深き華越の春日燈籠に火影ぼつと薄闇き一室のうち、白絹の蚊屋の中より絶間なき團扇の音は小一郎の寝苦しき風情、その端に這上りしは四十あまりの家に久しき下郎の藤助主従そツと聲を潜めて四邊を憚かりぬ。

一藤助、今日の浅草あのみではならぬ事、うかとしたぞよ」

一は、その邊の事藤助も心付きましたものゝ、俗、あの場合」

一あの場合とて、このまゝで済まうか、せめて心ばかりの一禮、あらためての挨拶せいで、略」

一なれど若様、どこの何女やら、名も宿も、方角さへ一  
一えゝ頼み申妻のない奴、名も宿も、知れて汝に斯うまで言はうか、知れねばこそぢや探し當てゝ来い」

一やれ御無體な、この廣い江戸中を」

一いかに廣うても、あの女ぶり、あの氣性、あれだけの目に立つ姿が知れいでか、是非に探し出せ、この小一郎あの場合で萬一の禍災あらば供いたした汝は何とする、立つまい、されば現低、汝の身に取ても思はぬ不意の恩人ぢや、是非、是が非でも探し出して来い」

一は、是非との仰せには、お言葉も返されぬ藤助奴、いかにも足に任せまして、なれど雲を撫むやうな事、連も急にはよし日毎に驅歩いても半月か、いづれ一月は」

一半月、一月とは氣の長い奴め、三日ぢや、随分と待て四日ぢや、遅くも五日六日のうちに探しあてゝ来い、そツと内々まづ住居の宿だけ、名だけ聞て来い、あらためて挨拶の工夫もある事、また今夜此のまゝでは何とやら、心が残るぞ、觀望の境内あの山門を彷徨て、人の風聞近所の取沙汰、本人の在所こゝ彼處と、その方角を知る便利にもならうぞ、行け早う行け」

もし戰國ならば家の筋目といひ必ず初陣を二三年前の男振、年こゝに十八の晩ながら、浮世を火宅の宿とも知らぬ前髪姿、まして太平の有徳全盛に育てあげられし小一郎、これといふ戀にもあらず、それといふ情にもあらず、たゞ何となう今日の我が身を救はれし女の風情ちらちらと目に見えて忘れられぬまゝの性急に、追出す如く急立てられて飛出せし下郎の藤助、おもはず肩を擧めながら呟きぬ。や、うかゝ油斷のならぬは此の道ぢや。

\* \* \*

眼前の隙に迫られて戀に心を寄すべき違なければ、戀でなし、白晝の人垣に取圍まれて情を運ぶべき道なければ、情でなし、戀でなし、情でもない上の事、さては只その身の危険を助けられたるのみの恩義かといへば、また何とやら其事ばかりでもなくて、どこの何者が娘ぞと思へば猶更の思ひ、あれほどの女いづこの誰が妻になるかと、妻なき身の空に餘所ながら花の行方を妬ましき心地ちら／＼目に見えて忘れられぬまゝの身も横へず、小一郎たゞ一人そツと蚊屋のうちに藤助を待ちわびぬ。  
はや夜半に近きころ、やう／＼歸り來りし藤助、人しれぬ内々また軒屋越の枕頭に近寄て



私語く體きては此奴に云々の縁道ありと、一日の朝、例の如く出でんとするを俄の不意に呼戻すや否、恩威の眼光に疊みかけて責問へば、藤助も實は内心その手に餘りて問はれたい折柄の事、これ傳倅と淺草山門の喧嘩沙汰より江戸市中の雲を掴み歩く委細、加之も自己が心に今は無路の奴使者と見て取りし言葉添て打明しぬ。

かくと聞きし父内記、おもはず手に持てる扇子を膝に落して、其のまゝ暫し思案の眼を閉ぢしが、やがて無言に首肯しながら奥へ入りぬ。

黄色を身の業とする君傾城の比類でなし、浮世の萬事一切を算盤珠に弾き込む町人の種には出来まじきもの。土臭き百姓の胎内よりは猶更ら以て生れまじきもの、それほどの優れし色香に太平の當時それほどの濃とせし氣性を備へたる女、よしや尾羽うち枯して世に落魄果てし素浪人の娘にせよ、いはや天晴れ親ひ損ねぬ戀の的、本田家の妻に迎へ取ても氏素性を汚すべき瑕にはならぬ筈、親の口より出来したりと立騒いで警められねど、たゞ一人の子のため内々そつと江戸中の隅々まで、その宿を探し出してくれんとの心體。

曾て重き公用も勤めし四千石取の本田内記、

時の町奉行に一人の交誼あるを幸ひ、流石に我が子の女風情に身の危きを助けられし委細は語らねど、たゞ聊か仔細ありて搜し出したき年ごろ十八九の女、容貌風俗これ〳〵と藤助より聞取りしまゝを打明けて、人しれず餘所ながら市中の詮議を頼みし上、またべつに腹心の若黨四人を絶えず日夜の町々へ差出せば、四里四方の江戸三界は手に取る如くの泥濘鼠も見過すべき筈なきに、さても不思議や、それほど人目に立ちし美人の影、いづこの隅にもなし。

\* \* \*

芳紀、風流、面貌、閑取りし言葉に合して現在それかと思ふ美女の姿、江戸市中に以上まづ四十餘人、いぢ〳〵町名も住家も親兄弟の素性まで書き加へて、人しれず奉行の手より渡されし本田内記、さては我子の戀人この中にありと、鑑定人は外になし例の藤助、四人の若黨に添ながら、さま〳〵の事を設けて一人も餘さず尋ね廻りしが、玉と瓦を取違へしほどの相違なけれど、いづれも案外の門違ひ人違ひのみ、さらに本人の影なし。

淺草の觀世音へ旅姿でもない若い女一人の参詣は、よし遠くとも四里四方の江戸市中に住むべき筈の證據、まして供をも連れぬ手輕さに

田舎方言もなき言葉の端々は、猶更ら近き邊に住馴れて重々しき有徳全盛の娘にもあらぬ筈の證據、第一あれほどの水際立ちて濃とせし無類の色香を塵埃の巷間に包めば、いよゝゝ人目に覺えて猶更ら風聞の種に持懸さるべき筈の證據を、これほど限なき内外公私の詮議に漏るゝとは、ます〳〵上天に盡果てし探しもの、いづこの隅に身を潜めて加之も如何なる業に浮世を渡るやら。もしや門内の奥深く人目の届かぬ大名高家に召使はるゝ女かと思へど、きり〳〵とせし中に遠とらしき紅粉の裝飾なくして、自然の無造作に此のまゝの艶を含みし風情、それでもない筈とすれば、もはや江戸市中に思案の及ぶところもなし。

さりとして今は父子もろもと同じ心に氣を焦り立つる生命、まして無いものを探すではなく、必定あるべき筈の女一人を四人の男が毛脛に任しての業、この上は市中を離れて江戸の近在を漁り廻らんと、どこまでも近れぬ例の藤助を先に立て、不佞藏天の仇を報ふが如く、まづ本所の奥より飛耳長目を張り初めぬ。

夏の半日を汗と塵とに塗れて、本所の町外れを歩き廻りし後吾嬬の森の此方より柳島の村里へ通ひし野路の片傍、一本松の霞簾介屋に勞

れし足を休めながら、今日は四人のうち若黨  
二人に例の藤助、冷めたお茶に甘露々と舌鼓  
を打鳴しぬ。

「やれ草臥たぞ、いかに主人のためでも身體が  
基、せめて日中の一刻だけを我が物に仕て退け  
ずば、腰は續いても魂氣が續かぬ」

「それぢや、今日で半月餘、これほど届いた日  
鼻に影も匂ひも無いとは倍、よく／＼案外の穴  
に棲む化物でがな、は、第一この鑑定人が覺  
束ない、怪しいぞ、浅草の山門と見れば人氣の  
薄い野原で、黒山の見物は生茂つた篠薄、加之  
も其の中に水際立て日の覺めるやうな凄く美女  
といへば、こりや猶更ら以ての事、ようぞ大切  
の若様へ馬義を渡上げず済だ、は、は、は、藤  
助どうぢや、ちと氣を確實に持てくれ」

人しれぬ内々の時は小一郎が我まゝ生育の性  
急に追立てられて、江戸市中の雲を掴みに馳歩  
き、いよく斯うと打明けし後は猶更ら寸暇も  
ない日毎の鑑定に馳立てられて、入らざる汝の  
口が神の基と絶ず嘲弄半分に責めかかる、藤助、  
今更ら後悔の脚も噓損ねし藩面に手持無沙汰の  
苦笑しながら、ふと何心なく茶店の奥を見れ  
ば、また別に半窓の扉に掛出せし一室ありて、  
その隔ての中庭なる物干竿にかけしは、や、や、

これぞ正しく見習の一品、あの時の女が身に  
纏ひし羅袖の生絹模様と見るや否や藤助おもは  
ず腰を外して床几の上より送り落ちぬ。

「で、出たぞ、出をッたぞ」

\* \* \*

藤助、おもはず腰うちかけし茶店の床几より  
送り落ちて、其のまゝ大地に平臥張りながら出  
た出た、出をッたと呼びし聲に二人の若黨も俄  
の呆れ顔、何事ぞと問へば、唯その中庭を指さ  
して目ばかり刺出しぬ。

此奴いよく正氣でないぞと、左右より引  
起して盥茶一碗を興へし後、靜かに聞けば藤助  
ほつと大息を漏らしながらの小聲、

「どれほど江戸市中に目鼻が届けばとて影も匂  
ひも無い筈、こぢや、案外の穴は此家ぢや、  
いよく見付出したぞ、あの中庭の横の木にか  
けた物干竿、いや、その竹竿にかけた生絹染の

單衣、あれが第一の證據、動かぬ本人あの離  
れ家の一室に居る筈、あの半窓の障子一枚が四  
千石の本田家騒動ぢや、我々が半月あまりの腰

腰を指し小木にした原因ぢや」

「やれ出来た、出来したぞ天晴れ用に立つた鑑  
定人の御手柄ぢや、借かう見届けた上は急て後  
日の事を仕損じるより、ソツと此のまゝ歸歸つ

て内々の注進するか、但し餘所ながら素性の太  
略を聞出して、まづ本尊の半面なりとも弄まう  
か」

「いはいでもの事、これほど手を盡して半月あ  
まりの汗水に見付出した一物、たゞ竹竿に乾し  
かけた證據の袖模様だけでは歸れぬぞ」

三人こゝに私語合ひし後、みれば茶店の主人  
顔は五十路を越えし婆々一人、折しも背門の方  
より枯柴を携へ歸りて釜の前に踞りしを、其  
のまゝ無言の小手に招いて奥の方へ帶りながら  
問ひかけぬ。

「婆々どの、こゝは汝の住宅か、この茶店は汝  
の家業か」

「はい」

「もう六十に近い身で、ついして手懸な霞簀  
茶屋とはいへ朝夕に見ず知らずの客扱ひ、さぞ  
氣骨の盡きる事でがな、まだ孫は無いにせい、  
浮世の手助けになる子は持たぬかの」

「はい、五年前に連添た爺々を失ひまして、後  
に只一人の娘を持ちますものゝその娘めが、  
ちと親に似ませいで」

「や、娘一人、ある筈、無うて叶はぬ筈の老輩ぢ  
や、また其の、その娘御が親に似ぬ、なるほど似  
まい、は、は、は、から見た汝に似られては少々、



「いや、あの單衣、あの女儀の召します生絹模様は」

「女の着るものにせい、ぬしは乃公、正しく我が秘藏、なれど、あの單衣模様は何とやら執心の仔細ありけな奴、や、汝は前月、淺草の山門で無體の喧嘩を仕かけられた若衆の下郎ではないか、む、その時の下郎ぢや、まづ上れ、汝よりも此方に執心の仔細、きく事がある」

\* \* \* \* \*

店前の茶を汲む婆が親に似ぬ十九の娘ありとの言葉、中庭の竹竿に乾かしたる證據の生絹單衣、もはや確乎に本尊この奥の一室と思ひの外、浪人風の顔色まツ黒なる大の髯男とは、加之も其の案外の大目玉を割出して、あの單衣の主は正しく我ぞといふのみか、淺草の山門に無體の喧嘩を仕かけられし若衆の下郎と見たぞ、まづ上れ、其方より此方に問ひたき事ありといはれて、藤助いよく夢うつゝの心地、ぼツとして四邊を見廻せば、わづか六疊の一室に女氣な假寓の獨身、たゞ片隅に浮世を忍ぶ日蘭笠と朱鞘角鐙の大小あるのみ。

ぬツと立たば天井に頭の届くべき大男、疊一枚の横に食出す大胡坐を搔て、猪毛の寸隙もない大腕を組みながら、何とやら物凄き満面

の微笑。

「や、事の大略いはずも知れたぞ、さては竹竿に乾かした、あの單衣ぢやな、實は我等も其の一人で、その女の所在いづこと詮議の最中ぢや」

藤助、ますく、采れて眉を擧めつゝ、打守れば、大男、猶更ら面にも似合ぬ愛嬌を目に浮べながら、俄に聲を潜めぬ。

「あの單衣たゞ一枚に狼狽で、こゝへ飛込むほどの體では、まだ其の後の影にも出逢はぬらしいな」

「は、江戸市中、凡そ半月あまりの日夜間斷なく、探せば必ず探し出すべき筈の手も内々そつと借受けました上、また別に日暮の届くだけは淺る暇もない筈ながら、さて不思議」

「そこまで手を盡してさへ知れぬ女を、尾狒うち枯した浪々の身たゞ一個では、や、夢にも逐はれぬ筈ぢや、はゝゝゝ」

「して御手許に、ありや正しく、あの時あの女の身に着て居た筈のもの、第一また此の、こゝの茶店婆が今年十九の娘ありとて、それこそ猶更ら以ての不審」

「や、婆が娘の事で、入、はツと急込んだな、何の由縁もないが幸ひ此の空屋を三月以前より

借住居の身、かねて委しう聞いた、いかにも當

家の婆に十九の娘、國といふ親の正直一途に不似合な淫奔女はあるぞよ、その娘めが去年の春、老後の死金を盗み出して素性も得しれぬ不司情夫と逐電したげな、はゝゝゝこりや同じ年

ごろの娘は娘ながら雲泥の相違、黒白の大間違ぢや、はゝゝゝまた我れに不審の第一あの單衣、いかにも淺草山門の喧嘩に割て出た、あの時あの女の身に纏うた絹も模様も同じ染色なれど、これまた寶物ぢや、はゝゝゝ」

「こゝの婆が娘の事は備置で、本人の移り香も通はぬ寶物を、貴方様、何と思召して」

「やれ痛いぞ、はゝゝゝその急所を突かれては、この男ちと遁足ぢや」

「御意を得ますは初割面ながら、さて御漆あればこそ、同じ女一人を探し合ふほどの事、もはや此の上に何の御留意

「あの單衣の、どこまで我れを取償ますやら、この大白癡奴、また貧乏巾着の底を叩いて入らざる苦の種を仕立てあげたぞよ、はゝゝゝ實は我等、西國筋の浪人、當時この江戸の女々し

う腐れ果てた景況に、持たが病の癪癪を押へ筆で歩く折柄、女としては無類の逸物、わけて二十歳に足らぬ花ならば蕾やうゝの身があつた

震とした不敵の振舞に、やゝまぬツた、おもはずわ  
ず我れを忘れて、見物の中より大聲あげて、  
に欲しいと叫んだほどの男、其のまゝ爪も立たざる混雑に押返されて、つい見失うた無念さ、心外さ、あまり節制が惜しさに、せめてもの思ひ出、日に見覚えたるそのまゝの生絹單衣を染上げて、はゝゝ笑はへ笑へ、戀ではないぞ、物はいはぬ心ばかりの我が女房、夜な夜な淋しい獨り寝の夢を包んで、はゝゝゝゝ」

若黨二人、まづ足を空にして本所の果の柳島より番町の屋敷へ歸りつゝ、草叢に埋まりし珠玉を見付出したる顔色、斯との注進に父の本田内記は固より横越に漏聞きし小一郎は猶更なる事、最初は然のみとも思はざりに、いつしか我身ながらの憂に沈みて連も叶はぬ戀の俄に叶ひし心地、はツと思はず顔を赤らめつゝ、人しれぬ胸を轟かしぬ。

さては出来た！大手櫓の藤助、まして後に居残りつゝ本人の心根を確めし功名面、よもや勞れし脛腰そのまゝ、引摺ては歸るまじいづれ智を飛して今日こそ憚らず玄關へ横付にすべき奴ぢやと、元來好物の酒の爛まで用意しながら待受けし其の日の夕暮、あはれや悄然と身を縮

めて臺所の片隅へ立歸りぬ。

それも倍その筈の事、思ふ本人を首尾よく見  
付出した段か、思はぬ戀の競争者、案外の柿ろし  
い奴に出喰して、加之も其奴が虎髯を喰反したた  
大目玉の素浪人、きけば白晝あの見物の中より  
女房に欲しとい吐喰散したほどの無遠慮ものつ  
うか／＼すれば本人の出ぬ前に屋敷に押寄せて  
來ようも知れぬほどの面魂、まして移り香も  
通はぬ例の單衣襟襦染出して、夜な／＼夢うつ  
つに抱寝するほどの狂氣じみた執念深い奴、も  
し此のまゝ我れ一人の胸裡に包んで押寄せば猶  
更ら後日の大禍害と、今日の手柄に生涯安樂の  
運を取り通せば藤助、半泣の海面に這出して委  
細いち／＼打明しぬ。

かくと聞きし本川内記、おもはず兩腕を組で  
眉を顰めしが、やがて靜かに首肯きぬ。

「美女も美女、それほどの女ぢやもの、いづこの里にも人目に立つべき筈、小一郎のみではあるまい、心を打込で戀に悩む男の數々、いづれ種々の相手もあらうぞ、なれど倍、その浪人め、何とやら人一倍に打込で事の面倒あげな奴、藤助よも屋敷の名は出すまいの」

「は、そこは當座の方便、押詰めて問はれま  
 したる上、小川外記、様と偽り置きまして」

「は、ハ、本田が小川で、内記が外記とは、ただ裏と表の垣一重、さて／＼人は根からの虚偽が言へぬものぢや、但し相手の名を聞たか」「こりや虚偽のあらう筈もない體、西國筋の浪人で、村田三平と」

「む、西國邊の浪人で村田三平、年輩は三十前後の一癖あるべき大男ぢやな、それは儲けて本人の所在、こゝまで手を盡して方角さへ知れぬとは、いかにも不思議、あまりの不思議さに小一郎の戀よりも、今は一入この身の好奇心と意氣地に猶更の興が乗て來た、や、面白いぞ、まだ口には見ぬが、きけば聞くほど、ゆかしげな、心憎い女、どこに居らうとも、みごと探し出してくれう」

其五

時は元祿の太平を飾る時給に等しき華奢風流、世は徳川の流に風浪も立たぬ五代目の全盛、將軍家は人間冥加の頂上を極めて政道の沙汰より奥殿の蘭學に不歸の春色、加之も戊の歳に生れし大公方として生類哀憐の法令のみ天下に行渡りぬ。

荷車にて往來の大を曳殺すものは斬首の嚴刑、犬の噬合を見物しながら引分けずして死に至らしめたるものは遠島流罪の嚴刑、もし竊に

犬を取捨つるものあれば一家追放に處せられ、  
いづこより來るとも迷ひ犬に時の食を與へざる  
ものは三日の手錠を入られ、中らずとも犬に石  
瓦を抛げしものは十日の入牢、軒下に臥せし病  
犬を介抱せざるものは入墨の刑罰、屠犬者を訴  
人せしものは其町内の組頭となり、犬の死骸  
を厚く葬りしものは白銀三枚の御褒美を賜はり  
つゝあはれ人間風情よりも天下こゝに御犬様と  
なりぬ。

また江戸市中に飼主なき犬を中野の大屋敷に  
集めて、歷々の氏素性ある武家の犬の頭  
とし、犬に召使はるゝ小役人五百餘人、駕に乗  
りて出入する大醫者三十七人、朝夕の野遊びに  
連出す犬曳の勢ひ四邊を拂うて凄じく、春秋  
の花見と月見に大案内の暇は前後左右を脱み散  
らして、わんといふ畜生の一聲は町人百姓  
が千千萬言の訴訟よりも重く尊し。

うまれて三月日の兒犬が過つて井に落込みし  
より、切腹を仰せ付けられし千二百石取の石  
田主水といへる姫本あり、八歳の小兒が吹矢の  
遊戲に誤つて犬の目を射しがため其の父の川口  
庄左衛門とて三宅島へ流されし七百石取の直  
參衆あり、飼犬の紛失せしを尋ね出しもせず其  
のまゝの無届に打過ぎしかば露顯の曉に祖先

傳來の知行を召放されし五百石取の齋藤數馬  
といへるものあり、大名高家も犬のために閉  
門謹慎の數々、まして陪臣と町人とは放火夜盜  
の強賊よりも、うかく犬に用途はぬ用心算一、  
わけて悲惨なるは霜夜の盲目按摩が犬の尾を踏  
んで向脛に噛み付かれし時、おもはず杖を振上  
げて撃ちしがため忽ち捕へられて三年の牢獄に  
投込まれぬ。

その怖ろしき犬の死骸一個、同類に噛み殺さ  
れしか、自然に病死せしか、誰が棄てしか、い  
づこに飼はれし果か、當時の江戸市中に迷ひ犬  
のあるべき筈なしとすれば猶更ら不思議に何と  
してやら、兩國橋の上に横はりぬ。

折しも夏の閑夜、空に月なく往來の人足も薄  
く、たゞ星明りに透して見れば見るばかりの事  
ながら、人間の行倒れと違うて御犬様の御亡骸、  
おもはず最初に蹟いた奴が、きやつと叫んで一  
骸に逃出世せばあとより、何氣なう來りし奴、ま  
た飛退て俄の大聲に人を呼立てぬ。

「や、犬、お犬ぢや、お犬ぢや、お犬の死骸が  
あるぞッ」

人を罵る諺の一口に、犬猫のやうな奴とい  
へど、犬公方に諷られたる當時の犬は人間以

上の待遇、猫のやうな奴は腐るほど世にあれ  
ど、犬のやうな奴、なかゝ市中の町人風情  
に無し。

その御犬様の御死骸が不意に御一個、夏の夜  
の兩國橋に横はりて、いよゝ事となりにつ  
り。

素早い奴は最初に遁出して行方も知れぬど  
うろろ彷徨て遁後れし奴七八人、其のまゝ時の  
關係人として其の場に引留められ、橋の兩方よ  
り町役人が立合の押問答、いかな物見高い江戸  
ながらも、こればかりは其の後さらに寄附くも  
のなし。

「兎も角も此のお死骸、此のまゝの夜露に捨置  
けぬぞ、御詳議は後の事として、まづ引取らね  
ばなるまい」

「よし引取るにせい、これが町内ならば其の  
町内で引取るべき筈ながら、さて橋の上ぢや」  
「なるほど、橋の上に人は住まぬが、橋の袂に  
軒を並べて住む以上、こりや雙方の町内持で  
五分々々の始末ぢや」

「雙方で五分々々といへば、其の中央で出來た  
事、目分量ながら、ちと本所の方へ近いぞ一  
「いやゝ、其方へ近いぞ、繩張の間尺を入れて

も、たしかに手前へ遠い筈證據の立つほど其方

の物ぢや」

互ひに譲らぬ弓張提燈を振照して、畜生の死骸一疋を取囲みながら、おの／＼自分が町内を預かる禿頭に背汗を流しての大談判、關係に引残されし七八人の奴は、相方圖取にして一時も早く此の災難を脱れたいと、喚くやら騒ぐやら入亂れて殺しき折しも、いづこより來りけん、淺草山門の喧嘩を割て出でし例の美人、伽羅の匂もろとも無言のまゝに立現れぬ。

提燈の火影をうけし夜目には猶更の美はしさ、もの凄きほどに際立ちて、いよ／＼牙渡る眞白の顔面は晒しぬいたる白蠟の名作に等しく、地色は確かならねど白ぬきの大模様を染出せし薄絹の袖袂、さつと川風に吹せながら切立の大前髪に小動きも打たせず、すらりと自然の作らぬ中に天生の艶を含みし風情、其のまゝ人影を除けて通るかと思ひの外、わざと橋の欄干近く寄添ひ來りて、今しも雙方よりの大談判に持餘せし犬の死骸、川中へ蹴落しぬ。

加之も女の業としては、わけて二十歳に足らざる美女の仕業としては、あらう筈なし今この天下に猶更の事、あるまじき業ながら、俗その容貌にも似ず風情にも似合ず、雪を欺く片脚に大模様の裾を開いて、一度二度三度、ごろりと

四度目に川中へ蹴落したる勢ひ、いづれも不れて無言のまゝ打守れば、靜かに振返りて微笑を浮べぬ。

「今この川へ落ちたもの、あれは何物、はて音の高い事、はゝゝゝゝ」  
悠然と其のまゝ、脇目も觸らで黒闇の方へ歩み行く後姿、星影に銀箔の大元結のみ、きらめきぬ。

\* \* \*

自己が心に斯うと思ひ込めば、忽ち我れを忘れて白晝の衆中も暫らず女房に欲しげと喚くほどの男、元は西國筋の大諸侯に千石取の身ながら、仔細ありて今は江戸の空に尾羽うち枯せし素浪人の村田三平、こゝに三十の晩、面も手足も猪毛に包まれて骨太の體量いよ／＼重けれどあはれや浮世を渡る腰巾着ます／＼輕し、されば下郎たゞ一人を召使うての浪宅も構へ得ず、固より手を鳴して盃を呼ぶ旅宿住居は猶更叶はぬ境涯、やう／＼柳島の村外れ一本松の葎簀茶屋に奥の隠れ小屋あるを徳傳無器用の土鍋飯に手入らずの焼鹽と梅干、大胡坐に小鼻を怒らして鬼とも組むべき面魂ながら、諸この男にも案外の戀といふものあり。  
おのれ戀でなしといへど、目に忘れぬ思ひ

の種、戀なればこそ、やがては肌寒き秋に身を纏ふべき給一枚の用意もなき貧乏の中より、わざわざ入らざる女の生絹單衣を染出しながら、人しれぬ夜な／＼夢うつゝの枕に引添て、寢言まじりに我が妻と呼ぶ哀れさ、たい戀に瘦衰へて枯木の如く病煩ひあけ易き夏の空に猶更此のごろ寢覺勝の早起、半窓より朝ぼらけの面を差出して中庭の葉越に店前の姿を呼びぬ。

「婆さま、この早いに近所の奴等が店前で、がやがやと何事ぢや」

「あれは前夜、兩國橋での噂」

「むゝ兩國橋が落ちたでもあるまい」

「いや、橋は落ちませぬが、此のごろの厳しい御法度も恐れず、まだ二十歳にも足らぬ女子の身で、大膽な、怖ろしい事お大様を川中へ蹴落したとやら路送たとやら、わけてその女子が畫に描いたやうな、凄いほどの美貌とやらで、現在その場の往來に引留められて、見て來たのが村の一人こゝでの談話」

きくや否、其のまゝ首を引入れし村田三平脇差ばかりを腰に差込みながら、のそ／＼と店前へ出來りぬ。

「その通り合せの關係で、その場へ引留められて現在、その女を見て來たといふ奴、どこの奴

ちや、名は何といふ。

「この柳島村で、伯樂ばかり宿にするものの子息なれど貴方また其事聞て何となさるゝぞ」「や、ちと空耳に聞流されぬ事、實は御てより内々その所在を尋ね出して用のある女に、何とやら似たらしい口氣ぢや、はゝゝゝ兎も角その見て來たといふ男に逢ひたい、む、村の入口で右側の三軒目か、よし、伯樂宿の子息ぢやな、さて、其奴、酒飲まぬか、飲めば一升だけ、やまた貧乏してくりよう」

村田三平、さらぬも近來ますゝ輕くなりし中着の底より、あはれや自己さへ咽喉を鳴しながら得飲まぬ酒一升、また覺悟の前の貧乏して、前夜の兩國橋に出逢ひしといふ、伯樂宿の子息を訪ひつゝ、きけば聞くほど正しく其女なり。

加之も兩國橋を本所の方へ渡りしと聞いて、さては川より此方に住む筈、また夏の宵とはいへ、うら若き女の身に月なき闇路を只一人、ぶらりとせし手輕さは猶更ら有徳の全盛にも暮さぬ證據、本所でなくば深川のうら、まづ方角だけは知れたり、おのれ捜し出さうで置くべきかとおもはず、心の微笑に首肯きぬ。

されど彼奴一人を的に覘うて心を運び氣を採

む男、嘘や定めて數々ある中に現在あの番町の若衆め、此奴まだ淺草の恩を返さうばかりでも無い氣の體、や、油斷大敵、なるならぬは本人に出逢ひし後の事ながら、それまでは一念の魂くらべ腕くらべ、まづ差當りての腰くらべと、思へば猶更ら急立つ心地の村田三平、明日ともいはず、その日の晝飯を掻込むや否、其のまゝ忽然として我宿を飛出しぬ。

我れより他を見れど他より我れを見られぬ日關笠、こればかり今の身に残れる角鋸朱鞘の大小を腰に横へ、茶色木綿の單衣に葛布の夏袴を高く穿ち古風に五本骨の輻廣扇子、たゞ新しきは打藁の重ね草履のみ、當時元祿の華奢風流に猶更の不似合、歩の運びまで田舎めいたり。

前夜の兩國橋といふ一言に、何とやら我れしらず心を引寄せられて、今日また其の橋に佇む筈なけれど、いづれ橋に遙からぬ住居ぞと、まづ橋の此方より淺草川の河岸傳ひ、やう／＼去年の秋こゝに架けし新大橋の扶まで來かゝりし頃は、いつしか夏の日も傾いて、町の片隅に笠越の涼風。

折しも新大橋を彼方へ渡り行く男、みれば例の若衆に召使はるゝ番町の下郎。

「や、そこへ行く奴、待て」

呼止められし藤助、面深の關笠に顔は見えぬど、はや其人と風俗に知りて南無三寶の迷惑顔。

「呼ばれまするは、いづれ様で」

「はゝゝゝいづれ様もあらうか此奴、過日不意に我が住居へ踏込んだ上、あれほどの弱い音まで吐かせながら、その後そのまゝの無挨拶とは、あまり身勝手な奴濟まぬぞ」

「は、すぐに御挨拶のため、まかり出まする筈のところ」

「害のところか、その筈よりも例の事でがな、はゝゝゝ兩國橋、あの大は」

「兩國橋で、お大とは」

「まだか、今あの兩國橋で此のごろには珍らしい大の囀合が、あるこゝろで人が走るぞ、はゝゝゝそれは僞置て今日、どの邊を捜し歩いた」

「いや、今日は別段の主用で」

「その別段の大切な主用で、どこを目的に彷徨た、せめて吹送る花の匂ひ、でも嗅付けたか」

藤助、わざと心に會得しかねし體、たゞ盛態に頭を下げて其のまゝ通行かんとするをまたもや引止めて笠越の笑ひ聲。

「僥倖のことぢや思ふ的を見付出した曉は、一の矢も二の矢もない其の場の圖取として、ま

づそれまでの間は互ひに同じ方角の共働き、  
交際よう力を併しての共謀議、こりや後日の面  
倒なうて面白いで、はゝゝゝ

生きた人間を簀簀にして海へ投込みし謀議は  
寛くとも、犬の死骸を川中へ蹴落せし罪科の重  
き當時ながら、もはや流れて證據なきを僥倖、  
兩國橋を夾みし町内は五に日を見合すの  
み、まして往來の關係に引止められし奴等は、  
後日の難に蜘蛛の子を散すが如く遁伸びし後の  
事、猶更ら誰一人の訴へ出るものなし。

されど其のお大様を蹴落せしは二十歳に足ら  
ぬ女も女、もの凄く人目に立ちし美女との  
風聞、いつしか耳より耳へ口より口に洩れて、  
内々の話柄となりぬ。

その内々の風聞を種に第一の手がかりとして  
探し歩く村田三平、かの藤助に出逢ひし新大橋  
より河流に沿うて歩み行きしが、はや夕暮の海  
面近き河下に俄かの人立入聲、何事ぞと立寄り  
て見れば、荷船の船頭らしき男が町廻りの小役  
人に召捕られし體、加之も最初より見物せしもの  
の言葉を聞けばあの波禦の亂杭に引懸りし犬  
の死骸を棒もて突流せし罪人との事に、三平、  
思はず編笠越の目を割出しぬ。

俗は事の面白なりと人助けに突流せしを、生  
憎く見付けられし不運の奴でがな、されど其の  
不運を避ければ此の犬の死骸、いづこより流れ  
來りしとの嚴しき謀議あるべき筈、あれは正し  
く前後の兩國橋、同じ流れの川上と川下の事、  
や、いづれ探し出さるゝは嬉しけれど、そつと  
人しれぬ情の我が手に探し出してこそ、珠玉を  
打砕く獄卒の手に探し出されては、あたら待氣  
ねし春に逢ひながら何の色も香もあるべき。

まして現任その戀人のために今この男の災  
難、いよく餘所ならぬ窮れの奴、もし救ふ道  
あらば救うて得きせんと、なほも人混に立交り  
つゝ、引かるゝまゝの影を逐行けば、その濱邊  
の町内に入りて五人組の家に一夜の宿預けと  
なりぬ。

やれ金ぢや、殺した本人でなし投込んだ證據  
はなし只その死骸を棒先に突流したのみの事、  
金で助かるぞ、明朝あらためて引出しに來る時  
が地獄極樂、そつと袖の下へ物が通へば助かる  
ぞ、もし助からぬ罪ならば町内の宿預けにせら  
れぬ筈其のまゝ牢屋へ引擧行かるゝ筈ぢやと、  
見物の私語き合ふ聲に耳を欲てし村田三平、む  
む金で済むかと首肯しが、儲その金いづこに  
ある、此ごろの巾着いよく軽く、木葉と共に

吹けば飛びさうなり。

金、金、金と幾度か思案の首を捻りしが、俄  
に立ちながらの小脉を打て、つか／＼と五人組  
の家に入りぬ。

「や笠越ながら今そこへ預けられた男、いかに  
も哀憫ぢや、みれば荷主に雇はれて其の日の舟  
人らしい體、さのみの用意もあるまい、身が助  
け遣はずぞ、なれと途中の事今夜か夜明か、い  
づれにせい、金で済まば済むだけの金子を整へ  
てくれるぞ」

本人は固り呆れて只うち守れど、預りの宿  
主が何をか言はんとするを見向もせず、ふいと  
其のまゝ飛出しぬ。

#### 其六

土手三番町の本田内記が屋敷の玄關へ、ま  
だ更けねど其の日の夜に入りし後無提燈のま  
ま大聲の案内を乞ひしは村田三平。

「こりや本所の果の葎簀茶屋に假寓いたす浪々  
村田三平といふもの、御當家には始めての推參  
ながら、ちと御依頼の義で罷り出まして、主従  
いづれの方なりとも是非に御意を得たい一  
かくと聞きし主人の内記、子息の小一郎わけ  
て、藤助は顔色を變ての驚愕、儲こそ來たぞ、  
いよく、抵寄せて來をッたぞ、まして昨日あの

新大塚にて何とやら薄氣味の悪い事を吐した折柄、また小川外記と僞り置たを迷ひもせず門違ひもせず、わざ／＼夜に入りて玄關の眞正面より襲ひ来るほどの奴、いづれ心に一物なうて叶はぬ筈と、俄の反身に狼狽出しぬ。

されど本内記は兼てより開及ぶ相手、我が子のため固り覺悟の相手、随分と庵末なきやう通せとの一言に、みづから客室へ立出でて見ればなるほど虎捲を喰反して大目玉の輝く骨太の面魂、いかにも一癖あり氣なり。

「當家の主人、本内記、始めて逢ひまする」

村田三平、案外の殷懃に禮を正しながら、言葉

葉を改めての挨拶振。

「こりや主人の殿、我等こと只今お取次に申入れしもの、御覽せらるゝ浪々の見苦しき體、ひらに御免なりませ」

「いやそれには及ばぬ事、但し何の、いかな御用で來せられた」

「主人の殿へは聊か、憚りの義あるかは存せねど、先月九日、淺草の山門にて御迷惑を蒙られし、あの美はし、お若衆は御子息でがな、實は内々その御子息へ御依頼の仔細で、はゝゝゝ宵から只今まで小川外記様と尋ね廻りて、はゝゝゝは、自己が御主人の名を忘れた、あの下郎どの

いづれに居りまする、はゝゝゝなれど、かやうかやうの美なる御若衆あらるゝ邸宅と聞て、やうやうの事」

わざと言葉を丸めて角を立てねど、そろりと舌端の釘を出せし體に、主人の内記、また空とぼけての高笑。

「はゝゝゝをり／＼得て入らざる滑稽をいふ奴、川と田と内と外とを綴りをツたな、はゝゝゝ

それは儲置て、手輕ながら子息は近來ちと病體に引籠る折柄、何事に致せ、父子の間、この身が承はらう、隱意なく申されたい」

「萬事、かやうな武骨も、猶更お言葉に従うて」

「御念に及ばぬ事、萬事うちあけての懇談されたい」

「實は御當家へ賣拂ひたき一品持参のもの」

「むゝ其の品は」

「身に不似合の品ながら、うら若き女若生の絹單衣一枚」

「はて、異な賣物を持たれたぞ」

「いや、外々へは何の艶も曲もない品なれど、當家の御子息へは必ず御意に入る筈の品是非に欲しいと仰せらるゝ筈の品、只今お言葉に御病中とやら、されば猶更の事、名醫の薬石より

も却て效驗のあらうと存ずる一品、はゝゝゝ御家柄に取ては至極の賤いもの」

その生絹單衣は此奴が戀の夜な／＼、せめての心やりに染出して夢うつゝに御寢の品とは、兼て藤助より開及びし本内記、儲はと思へど顔色にも出さず打笑ひぬ。

「何の御用かと存じたに、いかな事、うら若き女の單衣を賣物に來られたとは、はゝゝゝゝゝゝ」

「や、その生絹單衣、今も申す通り外々へは正氣じみた笑ひ草ながら、當家の御子息には、是非とも入用の品」

「もし是非に入用とあらば、單衣は儲置て、小身ながら随分、綾に錦に厚重ねの幾枚も仕立てて遣はす親心、それも女、いづれの女にせい、女その本人、その身よりの依頼とあらば、また格別、見受けたところ、今この太平に用なしとて甲冑の賣物が相應の御人體で、さる案外の賣物とは、あまりの不似合、はゝゝゝ」

「その不似合の賣物なればこそ、わざと御當家へ推参いたしたもので、まづ御子息へ問合して戴きたい」

「いや／＼、子息に聞かずとも事、但し折角、それほどまでに言はるゝ品、不用ながら御便利

とあらば買受けも致さうが、じたい誰が品で、いかなる女の身に着けた品やら、着ぬしの本人、また不似合に所持せらるゝ仔細、具さに打明けて承はりたい」

「はゝゝゝもはや打割たぞ、恥かしながら買は我等、この年輩まで無妻獨身の折柄、ふと思ひ込んだ戀女が、いや、その戀女、當家の御子息も御存じあらう筈、なうて叶はぬ筈、はゝゝゝこゝまで申さば主人の殿、よもや御會得のないでは御座るまい父子の間、なれど我等は常祿のある身とは違ひ、かく尾羽うち枯らした浪々の空、神以て放し難い品なれど持續けられぬ浮世の苦しさに、第一が今夜に差迫る金子入用の義で、幸ひ外ならぬ御當家への賣物と心得て推参いたした、よし本人その女の身に着けた品でなくとも、同じ方角へ自然の縁を引合ふ縁の端と思召して、近ごろ御無心ながら小判三枚、高い廉いは取つて退けての事」

「そこまで割ての御依頼ぢや、子息に關はず、この父が買受け申さう、小判三枚五枚、いや十枚も易い事ながら、偕その單衣を買取る以上、貴方その戀まで添て渡さるゝか」

「戀まで添て渡せとは」

「目に見ぬ事、かうと言へば、さうかといふ外

に、確とした證據なければ、その單衣もろとも、貴方その戀女を、あきらめて、思ひ切つて渡さるゝか」

「むゝ戀を捨て、仕舞へと、仰せらるゝ義でがな」

「いかにも、他の戀を好んで妨害の關を構へるではないが、實は當家も其女に、ちと用のある折柄、なるべく通る筋道に事の擲まぬやう致したいが希望ぢや」

流石に無遠慮の村田三平も、この一言に聊か押詰められし體、たゞ無言のまゝ目を見張つて唾を呑み込みぬ。

### 其七

川上と川下と同じ流れの厳しき證談沙汰より、おもふ戀女を罪人に引出さじとて、幸ひの生絹單衣を戀の片敵手と睨みし本田家に賣附けんとせしが、その戀衣へ我が心の戀まで添て買はんとの一言に、流石の村田三平、グツと押詰められし苦しさの果、實は金子入用の仔細かくと打明すや否、や、それならば折角の品を放されずとも當家の金と力で濟む事と共、手柄を奪はれて酒を出されしが、あまりの腹立まぎれに盃も取らず飛出しぬ。

世の諺にいふ貧は諸道の妨害とやらさても

浮世は金ぢやなれど金で買へぬは戀と情と人の生命、よし此の上は金の外に出て來るだけの事、天晴れ敵手に後れず仕て退けんと一念、番町より丸の内を横ざりて、兩國橋まで來りし頃は、いつしか次第に夜も更けたり。

この橋の上こそ前夜の戀女の通ひし跡、目にも見えず匂ひもせねど、何とやら懐かし、ゆかしく嬉しく、さては勇ましく、また爽々しき風情、大の男も恐れて近寄りぬを斯く蹴込みしか、厳しき天下の法度を花の露に弾いて斯く踏込みしか、その時ひかに袖袂を夜の川風に吹かせけん、大東に結立し銀箔の元結ゆらりと響いて闇にも雪を欺く眞白の脚首、いかに華奢なる楓模様を打開きしかと、あはれや其のまゝ俄に去りも得やらず、幾度か往きつ戻りつ星影に流るゝ川面を見渡せし後、淺草寺の夜半の鐘の音に驚かされて、やうく自しが家路の方へ歩み出しぬ。

本所の町外れ、さらぬも滑しき柳島の利里に夜は更渡りて、一本松の片蔭に漏るゝ燈火の影もなし。

さては婆々め、もはや寝込みしかと、門口の戸も叩かず、背門の方より低き竹籬を大跨に乗り越て、我が一室へ還込みつゝ、其のまゝの闇まぎれ

に蚊屋のみ引摺出して手探りに吊りし中へ、ご  
ろりと丸寝の氣樂さ、たれ笑ふものもなし。

あたらし折角の手柄は、おめ／＼他に奪られし  
が、猶それがため思ふ女の詮議に待出されずば  
重疊、また賣飛さんとせし戀衣の自然に我手  
へ残りしも、今更ら思へば却て幸ひの吉兆、よく  
よくの縁あればこそと、我みづから我を慰めな  
がら、うと／＼と睡りし夢うつ／＼の枕頭に、すつ  
と音もなく立ちし臨るげの姿を見れば、や、正  
しく其女なり、戀の面影。

はッと思はず跳起きて、眼を据ゑつゝ見直せ  
ば、固より何の影もあるべき筈なし我れた  
だ一人、壁と障子の隔てさへ見えざる黒闇に、三  
平そのまゝ、兩腕を組で總身の大息を漏しぬ。  
「弓矢八幡、戀は仕かけても、戀には仕てやら  
れぬ男と思ひの外、南無三寶、いつしか魂魄を  
喰取られたぞ、曲もの、曲もの、おのれやれ」

わづか小判二三枚に窮して身にもの放さぬ戀  
衣を賣らんとまで、尾羽うち枯らせし浪人の  
加之一癖あるべき奴が、腹立まされに盃も取  
らで其のまゝ飛出せし前夜の面魂、わけて他  
の事とは違ひ世間を憚る子息に就ての事、この  
上の面倒なきうちと、子を思ふ心弱さに本田内

記、日録の一封そつと藤助に贈らしめぬ。

自己の主人が名を取違へた下郎どこに居ると  
吐した奴、猶更ら事の叶はぬ不平面に歸りし今  
日、重ね／＼薄氣味悪けれど、主命こゝに於方  
なく、その日録を携へて柳島の一本松、霞寶  
茶屋の店前より奥の方を差覗きながら、幸ひの  
婆々に手渡すや否、一散に遁出しぬ、貧乏浪人  
の儂み根性、や、人を見透す無禮もの奴と、あ  
とより追驅け来ようも知れぬ奴と思へば、わざ  
と道を外れて本所の割下水へ出でぬ。

本所の割下水は御家人の軒並び、屋敷町なが  
し手薄き小身の門構へ、櫛の齒の如く打續いて、  
白晝さへ淋しき片影を歩み行く折しも、背後の  
迂より俄に高き蹄の音、おもはず折返れば鞭を  
あげたる馬上の武士、はや間近く駈り出しぬ。  
藤助はッと思ひて右に飛退けば、飛退く方  
へ驅寄る勢ひ、またもや驚いて左へ飛退くや  
否、つるりと踏違つて割下水の大溝へ眞逆倒、  
馬は其のまゝ見向きもやらず砂煙を立て、驅行  
きぬ。

おのれと叫べど雲霞、藻掻けば藻掻くほど底  
深き大溝に落込で、身動きも取れぬ泥に埋もれ  
つゝ、黒森より引摺出せし蛸の如くやう／＼這  
上りし眞黒の目ばかり白き體をその門前に立出

でし五十あまりの半白の主人顔。

「どこの者ぢや、何とした、は／＼、今この馬  
に驅落されたか、やれ笑止、まづ手前の門内へ、  
白晝その體では、井水があるぞ」

一番町の、さる屋敷奉公いたしますもの、あ  
の馬上奴が一

「は／＼、今更ら、致方はないぞ、早く這入れ、  
兎も角も水を浴びい」

せめての幸ひ夏の單衣、ぐる／＼と脱で片手  
に掴みあげながら、丸裸の小腰を打屈めつゝ門  
内に引入られ、藁所口より裏口の井戸端に立  
出でて、瀧の如く頭上に水を浴びし後、ふと何  
心なく竹垣の彼方を見れば、奥座敷の軒端に吊  
れる小鳥の籠へ今しも餌を差入れんとする若き  
女、例の大き銀箔元結に大束ねの黒髪、夏の繁  
茂の青葉に冴返りて一入の色艶、すつと晝ける  
如くに際立ちし風情は、や、や。

藤助、思はず丸裸の身を屈めて、そつと垣根  
に這寄りつゝ、差覗けば、馴れし小鳥に微笑を  
浮べながら首肯く體、晝でなし、幻でなし、  
まざれもない其の女。

自己の戀ならねど、あまりの不意に胸は轟い  
て五體の居縮む心地、たゞ何となく兩手を合し  
て伏拜みぬ。

折しも下女に洗ひ直しの單衣一枚を持たせて、またもや主人の笑ひ顔。

「は、は、は、泥を取れば倍、よい下郎ぶりの男ぢや、美當つての事、着古しながら、これを纏うて歸れ」

「いづれ、あらためて御禮に罷り出まする、下郎奴、土手三番町、本田内記に召使はれまするもの」

「や、お日にかゝらぬが、本田殿か、御大身ぢや」

「恐れながら、御當家様は」

「いや、我等は見る通りの小身のぢや、わざ／＼来るに及ばぬぞ」

「なれど、身勝手の手用事とは違ひ、主人の使者にまゐりました途中の出来ごと、わけて御衣類まで借用の折柄、委細、申さいでは」

「は、／＼手堅い男ぢや、木原庄左衛門といふもので」

「木原様、は、木原様で、は、は」

借着の腰を屈めて臺所の猫にまで會釋しながら、門を立出るや否、飛ぶが如き勢ひ、またもや辻の角石を踏んで下水に落込みしが、藤助、もはや夢中の一生懸命、そのまゝ躍り上つて宙を驅出しぬ。

## 其八

本所の割下水に軒を並べし御家人町、わけて中にも古びたる堀越より往來へ惟の太木の差出たる小橋、板屋根の門さへ幾歳の雨風に力なく傾いて、見れば名ばかりの玄關口、白晝さへ何とやら薄闇き木原庄左衛門が方へ、日立たぬ體ながら兩若黨に草履取を従へし本田内記、例の藤助を案内に立て、訪來りぬ。

高が下郎一人の事、溝中へ落込みし泥を井戸水に洗はせばとて、わざ／＼四千石の主人この早朝に一禮のため來べき筈なしと、庄左衛門、おもはず眉を顰めながら、一室に迎へて手厚く待遇せば、本田内記また直參と御家人との格式を打破りての慇懃さ、互ひに初對面の挨拶も済みし後、靜かに語り出しぬ。

「もし御用とあらば、お召に依て罷り出まする筈の身分へ、わざ／＼」

「いや、さやうの義は萬事うち捨て、きのふ下郎に御介抱の一禮まづ演べた上の事、こりや我等一存の内々にて、申さば多年お馴染めいた御懇談に承る事ながら、さて貴方、傳來これに住はれまするかな」

「は、公邊に近う在らせらるゝ屋々衆へは、ちと憚りの次第ながら、實は、八年ばかり以前當

家先代の木原庄左衛門が株を求めまして」

「さも御座らう、此の邊の親譲りに住はるゝ御人體でないといふ受けた、元は、いづれの御生國で、何と仰せられた」

「うちあけましたる段が、越後もの、あのころ世上に取囃されし越後驍勁の御爲方、萩田主馬の家老を勤めましたる身で本名は高橋庄左衛門、姓こそ違へ、ふしぎに當家と同名」

「やれ越後家の、わけて萩田殿は北國に聞えた名門であられたが、さて是非もない御家の不運で、お察し申す、當時まだ八丈島に存命との事、をり／＼内分の御音信せらるゝかな」

「は、越後家お取潰しの節、多年苦患の甲斐もなう主人は遠島流罪、その家來の身として、おのれが本名そのまゝの浪々にも世を得ず、かく縁なき他人の名跡を金錢に買求めて、わづかの手薄き知行取に浮世を過しまするには、さて聊か仔細ある義で」

「いづれ、さる事でがな、但し當時の御家族は、幾人あらるゝ」

「妻は、本國退轉の砌、病死いたしましたして、一子は、主人の兒小性に付け置きましたるがため、お上へ願ひ濟の上、島に居りまするが本年十九歳、せめて此奴が父の名代として、主の先

途を見届け居ります義で

「それれ格、天晴れ、お手柄な事、出来された御子息ぢや、我等また今年十八の一子を持ち申すが、いやはや、頼と埒も無うて面目なき次第、はゝゝゝその他に御縁類の衆でも」

「たゞ下女下男、二人を召使ひまして、一家ここに主従三人の外」

「はて、貴方お一人か」

「じろりと思はず四邊を見廻せば、主人の庄左衛門、また思はず其の顔を打守りぬ。」

さては音に聞えし越後騒動の餘波、加之も君家を奪はんとせし小栗美作の奸黨に對して其のころ御爲方といはれたる忠臣の頭領萩田主馬が家老を勤めし身の果かと、本田内記、おもはず小膝を打ちながら、きけば猶更ら當年十九歳の一子を十一歳の曉より八丈島へ流罪の主につけ置きつゝ、自己は別に仔細ありて御家人の株を求めしといふ、人品風體、いかにも一人の床しき思ひを増せど、これ專一に訪來りしものなくて、一家獨身たゞ男女の召使ひ二人の外に何の縁類もなしとは。

されど確手に藤助が垣根越より見届けしといふ、その奥座敷は此の壁一重の隙室、あの小島

の啼音は正しく其の時の本人が評を差入れしとやら、はて不思議と耳を欬つれば、折しも座を起ちし疊、榻觸りの氣配、靜かに縁端に歩み行く女の足音。

「首尾もなう、不意に異な事を承るが島へ遣られし御子息の外に、もし娘御、お持ちなされぬか」

主人の木原庄左衛門おもはず眉うち鬱めながら、何となく日色を掂るぬ。

「娘、いや、島に居ります子息の外、子として、娘は」

「實、うちあけて申さば、今日これへ推参したも、それがため、若し娘御でないに致せ、十八九ばかりのすぐれて日立つ美女、あらるゝ筈」

「や、いづれにて御覽なされたやら、ある等と仰せられては、儲、ないとも申されぬ身で」

「あらるゝ筈ぢや」

「さして世間、憚るほどの事もない身ながら、なるべく外出いたさぬやう、年來かく、淺間の住居なれど、奥の一室に居らせます女が一人」

「それ、それ、その女の事、委細は諸置、まづ我等その女へ御禮かたゝ参つたもの、こりや萬一の御掛念ないやう前以て申し置くが、

元來いづれの種、何人の娘御でがな」

「お言葉、あまり御簡略で、ちと前後の合點まゐり兼ねます事ながら、御身分柄に對し、包むも却つて、實は先刻も申し上げましたる體、越後家没落いたして主人流罪の後に、これ萩田家の記念と見るべきものは女子たゞ一人、やうやう其の時は十歳の曉を、十一歳の子息と取替て我が手に申し受け、互ひに八重の汐路は隔つとも、つきぬ主従の縁に今日まで育てあげましたる女、子息のためには一人の父、こゝに、また彼女のためには世の中に一人の父御あの島に、これが浮世とは申せ、をりゝ語り出して袖を絞りまする境涯」

「やれ痛はしや、きけば涙の種ながら、さてこそ自然の名物、さもあらう筈、氏素性は爭はれぬものぞ、越後家にも別に一城の主となられた萩田殿の娘女ぢや、儲、さう承る上は猶更の事、本田内記あらためて是非お違ひ申したい、これへお連れ下さるまいか、但し、お座敷へ参らうか」

### 其九

門内も玄關も名ばかりの御家人住居、供待の設備なければ、加之も夏とはいへ朝まだ早き涼風の折柄、二人の若黨もろとも草履取も藤助も

往來の塀際に立出でて、幸ひの胸寄石に腰うち  
かけながらの物語、

「怒の緒道、やう／＼こゝに手繰り當てた今日  
の結び目、偕どうなるやら。お話が案外、な  
がながしいぞ」

「どうも斯うもあらうか、泥臭い刺下水に尾を  
垂れて住む御家人と、槍を立て、歩く天下の直  
參衆、この椎の木根元に生た玉蟲一疋が這出  
して、主手三番町の角を引廻した屋敷の奥様に  
なるといふこれも慙なればこそぢや、はゝゝゝ  
戦國は男、太平には女の事、百人を相手に其  
の場を退かぬ武藝者の太刀先よりも、花の色香  
の娘一人を持てば千人力ぐいと手許へ引寄せ  
て出世の的の射ぬき次第ぢや」

「それに就て芽の吹き出したは藤助、どれほど  
忠義に働いても大地に縁の切れぬ奴が、いよい  
よ疊の上で踵を指り始めるぞ、さしづめ奥向  
の用人格、若黨の口で呼捨にするも今日明日の  
うちぢや、こりや藤助、下に居れ藤助、藤助、  
何とした藤助」

藤助、おもはず苦笑しながら、ふと振り返りし  
辻の角より、ぬツと立現れしは例の編笠村田三  
平。

「や、幸ひ此奴、出逢うたぞ、前夜、宿へ歸れ

ば其の朝、店前の婆々に投込んだやら、ありや  
何者から誰への目録ぢや、この男、浪々こそす

れ自己一身の浮世を渡りかねて他の扶助は乞は  
ぬぞ、合力は貰はぬぞ、其のまゝの一封これに  
持参した、確と抱返した上の一文句を吐きに行  
かう折柄ぢや、見れば若黨に草履取まできては  
此の、門内へ本田家の主人が客來の體、や、  
面白、此のよし申込め、但し門前で待た  
うか」

四千石の主人より贈られた目録一封、みすみ  
す知れし素浪人の分際として何の恥辱にかなる  
べき、さるを入らざる一文句が拾りたいとて、わ  
ざわざ懷中へ飛込た福の神を押し戻しに來るほど  
の奴、もし此家を戀女の宿と知らば南無三寶、  
主の身に取ての一大事、我が身に取ては猶更ら  
生涯の運を踏潰す奴と、通場もない藤助俄に  
顔色を變て狼狽出しぬ。

「そりや貴方様の思召し違ひ、何事かは存せず  
屋敷へ御入來の節、一獻の間も無う其のまゝ出  
られまし御挨拶までの事金子の高も詰さぬ上  
の目録一封、いづれ様へも憚らぬが江戸の習慣、  
また今朝こゝへの主人は私用でなく、實は公邊  
の御用かたゝ」

に、飲まぬがための挨拶、うける筈はないぞ、  
また公邊の祿を食む人、公邊の御用で來られる  
が當然、何の不思議ぢや、加之も今、かたゝ  
とは私用のある證據、さらば公邊の御用相濟む  
まで差控へて、私用に取かゝらるゝ時、是非に  
御意を得よう、それも出来ずば私用の濟で後、  
お歸郎の途中に待受けて逢ひ申さう、もはや汝  
と問答は無用ぢや、當の相手は本田内記殿、ま  
して幸ひの折柄、但し下郎、まだ例の宿は捜し  
當らぬか、はゝゝゝ」

折しも主人の木原庄左衛門、本田内記を玄關  
へ送り出して門外に向ひながら、お歸りとの一  
聲に、すはこそと待受けし村田三平かくと見る  
や否 藤助、あツと驚いて飛込みぬ。

\* \* \*

あツと驚いて飛込みし藤助より、かくと聞き  
し本田内記、おもはず舌鼓を打て眉を擡めしが、  
この穴を知られては猶更の面倒と其のまゝ立出  
でし門外に村田三平、流石に編笠を脱て片手に  
提げながら、會釋の目禮もるとも、づいと歩み  
寄りぬ。

「こりや一昨夜、何ひましたる柳島の村田三平  
と申すもの、あの事は、あの夜、あのまゝにて相  
濟だ筈のところ、翌朝、我等への下され物、じ

たい如何な思召でがな、見る影も無う尾羽うち枯した素浪人、もし哀れとの御芳志ならば、生涯お救助に預かりたい、さもなくて只これ一時の御合力は、神社佛閣へ参詣の路傍で投銭せらるゝも同じ事、まだ路頭に立たぬ身の面目、ちと男が潰れ申した」

「やれ他の門外に待受けての事、何かと存じたに、はゝゝ不承とあらば返さるゝまでの事、返せば此方、うけとるまでの事ぢや」

「いはれずとも、返さうために罷り向うた男、但し確に請取たといふ御自筆の一札、賜はりた

い」  
「や、難題を持掛けらるゝか、元は何人か知らず今、浪々の身として直參の我が面前へ加之途中の難題、持掛けるか」

「難題、難題とは出来ぬ事と存する、直參案にせ、我等また浪人にもせ、出さるべき筈の請取一札、物の返しに出されぬとか」

「くだいッ」  
「何、何といはるゝ」  
玄關へ送り出して、まだ内にも入らざりし木原庄左衛門、かくと見るや否、其のまゝ門外へ走出でて相方の中間に身を附てぬ。

「我が方へ客來の御人に對うて門前の大聲、主

人の身として聞捨にはなり申さぬお屋敷も御姓名も匿々それと知れたる方ぢや、聲高に喚かずとも済む筈ぢや、や御家來衆、其のまゝお供せられい、あとは引受けましたぞ」  
「いやゝゝ、その男これへ殘しては猶更の御迷惑」

「はゝゝ、殘るとは言はぬぞ、殘してくれとも頼まぬぞ、時の挨拶人は扱て置いて、常の相手は貴方ぢや、本内記殿ぢや」

「其方づれに常の相手と呼はるゝ身でない、もし達ての用とあらば屋敷へ來い」  
「周り此の門前で逢はうとは思はぬ、その屋敷へこそと、出かけた男」

「いざ來よ」  
「行かうぞ」

「おのれ來れば其の分に差置かね奴、たゞ一時も早く此の門邊を追拂はんとの心體、おのれ行かば其のまゝの權威に恐れて歸らぬぞ、幸ひ日録の一封に事よせて近來の腹癢を仕てくれんと

の心體、互ひに睨み合ふ中間に主人の庄左衛門、猶更ら言葉盡して我が門前に起りし相方の角を揉潰さんとする折しも、あまりの騒がしさに間近き玄關の障子、そつと細目に開けな

がら花一輪の漏るゝ匂ひか雲間に現れし名月の

片影か、それとも知らで何心なく見返りし村田三平はッと思はず踵を大地に踏込みしが如く立ち停りぬ。

立ち停りて見られし障子はたと閉づれば、ぼつと夢うつゝの幻影に拋出されし心地、もはや相手を遡うて屋敷へ押掛け行く勢ひもなく、たゞ門前に立てる木原庄左衛門へ今更ら聲懸の會

釋を殘しながら、無言のまゝ差俯いて自己が來し方へ歩み去りぬ。

### 其十

家の目標になるべき椎の大木、半は堀を打越して往來へ差出でつゝ、半は庭を蔽うて白晝さへ薄闇き樹蔭に、まして本所の夕暮は名物の蚊

や火、餘煙は軒を傳うて白く空に立昇りぬ。  
はや黄昏の夕餐も済みて、さらぬも天生の珠玉を磨きし治後のまゝ庭に對ひし縁の端近く

わざと燈火を遠退けし柱の此方、解かば身の丈にも餘る黒髪を、小枕の岡き龜島田に俵たる大東ねの五味麴に梳立て、今日ばかりは例の銀

箔よりも浮世に祝し元結の匂ひ一入の床しき、風に吹込まれつゝ身に這寄る蚊やりの餘煙を、そつと音なき范の葉の團扇に煽き返しながら、

紫糸の組紐さへ何氣なき風情の背後より主人の庄左衛門が聲。

「露さま、露さま」

呼ばるゝ聲に振返りし風情、今更ながら倍いかなる名筆の筆ぞ及ぶべき、萬人の男殺しに生れたる自然の美はしき、加之も凛々しく凄く、いき／＼と張切る目元に鬼も蛇も消入るかと思はれぬ。

庄左衛門、靜かに坐しながら、わざと微笑を浮べし小聲のまゝ。

「あの浅草觀世音へ、参詣せられましたは、たしか先月の九日、その節、山門の邊で、不意の喧嘩沙汰ありしとやら、御見物ばしなされぬか」

はツと思はず顔を反けし體に、庄左衛門、なほも膝を進めて摺寄りぬ。

「また今月十一日の夜、つい其處まで人日にかからぬ涼風とて、用られました時の事、もしや兩國橋の上まで、加之も其の橋の上にて何事も御覽なされぬか」

遠退けし燈火の餘光、猶更ら柱の小盾に闇けれど、眞白に際立ちて涙渡る横顔、ぼつと薄赤う染出せし風情を見るや否、庄左衛門、いよいよ小膝を詰寄せぬ。

「確とした應答、お返事のないは、お身に覚えあればこそ、わけて年齢も召さぬに猶更ら女儀のあられない事、また平生の御氣性を出され

ましたな、常々あれほど申入れた甲斐もなう、さる不似合の荒々しき御身持は、この庄左衛門に此の上の、この上の苦勞を重ねよとの思召でがな、さもなくば、島に御座らう父上に對しても、さやうの運葉なる義はあるまじき筈」

名花一輪、風なきに其のまゝ花薙を垂れて何とやら差俯さぬ。

「露さま、この庄左衛門は元來お家に養はれし身、夢さらくお叱り申さうではない、たゞ父上、あの八重の沙汰を隔て、水や空なる謠、鳥も通はぬ鳥籠に在す事、何と思召すぞ、さるを女性の身として時世の謹慎も無う、わけて人日に立つべき天生の御容色で、いかに自然の御氣風とは申せ、繁華雜沓の巷に他の喧嘩を割て出るとは、また大の男さへ身の程を思へば厄病神の祟とも見るべきものを、何事ぞ足にかけて川中へ蹴落さるゝとは、さて無益の頂上や、沙汰のかぎり、あまり不用意、もし萬一それがため、お身に珍事出来の節は庄左衛門とこの淵漸に立ちまするぞ」

柳髪はね元結か三日の月、それにけあらねど自然の氣風、びんと強ねたる身にも心にも、おのが名の露おもげに厭されては返す力もなく、たゞ無言のまゝ差俯さしを、やう／＼而脱氣に

振上げて、そつと今更ら忍び吾の小聲。

「いづこの誰が耳へ入れたやら、ゆるしてたまや、この後は、この後は」

氏を忘れて身の程も思はれぬ蓮葉の振舞、わけて女性にあられない事、うまれし容色にも芳紀にも倒さる荒々しき御氣風ぞ、さて／＼無益の頂上、沙汰のかぎり、あまりの不用意と、

たゞみかけて庄左衛門に老の膝を進められし露女の風情、今更の辛き恥かしさに消え入りたき心地やする、雪の襟首に沁りし鴈髻を打震はしながら、首垂れし伽羅どめの大前髪に火塔口の額際まで、さつと薄赤う染出せし無言のまゝ

を見れば、流石に今年やう／＼十八まだ浮世の山も知らで、そよとの風にも堪へぬ優しさ、ふしきや白晝の雜沓に三人の毛腰男を驚かして夜陰の橋の上より天下の禁物を川中へ蹴落せし狂勢、どこにあるやら。

「この庄左衛門、せめて身も心も思ふがまゝの世に馳出さるゝ四十前後か、其のお身また行末の武運に辿らるゝ男子ならば、さらぬも北國の名物に唄はれし家の一粒種、天晴、それほどの御氣風なうて何とする、あれば倍あるが上にも猶更の奨勵、至極の満足ながら、露さま、女

も猶更の奨勵、至極の満足ながら、露さま、女

性は女性の守らで叶はぬ謹慎事一、まして父上  
あの島への砌、この庄左衛門へ内々そつと申し  
置かれた義もある事、たとひ今後いかやうの退  
かれぬ場合に逢はるゝとも、さる荒々しい、  
世間の耳に際立つべき振舞は

「住ませぬぞや、源文、神かけて」

「お心に沁みて今後、せぬとの御言葉ならば、  
宿、はゝゝ餘所々しい、源文にも及ばぬ事  
なれど實は今朝、それがため、思ひもよらぬ人よ  
り、わざ／＼不意に來られての内談、勿論、お  
身に取つては幸ひの吉事ながら、もし其の人に  
何の希望も無うて、たゞ曲けたる目角の奴なら  
ば、取返しもならざる不吉の基と思へばこそ、  
如斯、くどう今後の事を」

「あれ、今朝あの門前で、何とやら、騒がしい  
聲高に、あの人が」

「否、ありや別段、あの時また門前で出来事、  
その一方の客來に來られたが、番町で四千石取  
の直參衆、本田内記と申さるゝ人、内談の結局  
は、是非に一子のため、お身を、迎へたいとの  
義、あれが淺草の山門にて無體の喧嘩を仕かけ  
られた、その若衆の父御で」

「きくや否、ゆかた帷子の裾に青海波の大模様、  
さらりと動いて座を揺りし音のみ、返答もせぬ

其のまゝの身を捻りて、はや容果てし庭の方に  
對ひながら、何氣なき風情の舞端越に空を見上  
げし折しも、椎の木の繁茂の中より大石を抛出  
すが如く、どつと庭の中央に落込んでうんと叫  
びし眞黒の動きもやらぬ人聲

流石の露女、はつと驚いて起ちし此方に主人  
の庄左衛門、や、おのれ曲者と脇差もろとも飛  
下りて見れば、その眞黒なる奴、苦しげの聲を  
絞り出しぬ。

「くせもの、曲者は其處、そこに居らるゝぞ、  
こりや其の曲者に仕てやられた戀の奴ぢや」

\* \* \* \* \*

人しれぬ浮世の内證に火の雨の降る謠はあ  
れど、夏の夜露より宿らぬ管の椎の木の繁茂よ  
り、どつと地響うつて正しく人間の落來りし奴、  
さては曲者そこにありと叫びしは村田三平

さらぬも人並に勝れし器量の大男、庭石に腰  
骨を打付けて、動きも得ざる苦痛の中より猶更  
ら首を差伸しつゝ、はつと驚きながら逃げも  
入らざる露女の美はしさと健氣さに、いよく  
眼光を放たぬ戀の一念、おのれと走寄りし主人  
の庄左衛門に對うて、もはや絶體絶命の胸臆を  
握ゑたる小聲。

「この面は今朝この御門前にて見られた筈、元

は西國に相應の氏素性を備へし武士の成果、今  
は柳島の一本松に尾羽うち枯せし素浪人村田  
三平といふものなれど現在かく他の襟に身を忍  
んで庭中へ落込みし奴、もし夜盜の曲者と思召  
さば、夜盜にもなり申す、曲者の成敗も受け申  
さうが、たゞ一言、恥辱も面目も身も世も丸潰  
しに抛出しての上、只こゝに一言、あれあれ

に居らるゝ女に、たとひ手は取らずとも、せめ  
て袖袂の端近う、とめ木の匂ひ身にうけて、申  
し入りたい一言あるまでの事、この市瓶を喰  
した三十男奴、無念、心外ながら戀に仕てや  
られた」

主人の庄左衛門、あまりの案外に與れて其  
のまゝ其處に立ちつゝ、打守れば、かくと聞くも  
辛し恥かし罪深し、わけて目に見るは猶更の露  
女、さりとて何れも切切し天生の氣性、顔  
色を失うて逃げ隠れもせず、たゞ縁端の柱を  
身の小盾に取りながら、そつと差覗きし風情、  
聞き庭よりは入さらに燈火をうけて際立ちし  
面影に、村田三平またもや眼前に猶殺せらるゝ  
苦しげの聲を渾めぬ。

「今朝、この御門前で出逢うた本田内記の一子  
が、淺草の山門にて喧嘩を仕かけられし時、そ  
の場へ對つて出られた花の風姿に、たゞ夢うつ

つ、わけも無う本性を奪られて以来、せめての思ひ出と、目に残る生絹單衣の大模様を染出して、夜な／＼人しれぬ枕頭に添寝するほどの大自疑、まして本田父子も同じ戀慕に堪へ兼ねて江戸市中を捜し歩くとは知つての上の我等、加之も不思議に兩國橋の事を聞いての後は、猶更の魂魄脱殻、縁なくば倍々それまで、いづれ嫌はるゝとは知れど、さて嫌はるゝまでは、村田三平でない戀の奴、ちらと障子の細目に見たばかりの今朝それで済まうか、さりとて歴々の本田家が玄關の眞正面より全盛振に言込だ管の其の、その後へ、この見苦しき體の素浪人この擧面を出して何となる、浮世は運命の秤量日、自然の輕重、もはや妬むでもない恨むでもないが、薛絡の前の捨草履、あるにもあらぬ前夜忘却いたして、幸ひの椎の木を心ゆくまで見るだけの見終焉に許された月下氷神と念じ、宵闇の堀越に身を忍んで、梢の葉越に、開放したる夏の縁端、あり／＼と、あまりの風情に、足踏にらした人間の捨たりもの一疋、繚路に落散る塵ぢや、芥ぢや嘸や日觸り、いづれへなりとも掃除けられ、たい願くば其の、その戀女の手に掃除けられたいぞ――

あはれや殊更と身に兩刀も帯びず、梢の夜

露に猶更ら打凋れたる生平の帷子、せめて昔日の名残に穿古したる高宮の袴もある事か、身動きもならぬ毛脛を庭石に抛出したるまゝの體、骨太の首を力なげに首垂れながら男泣の涙を流しぬ。

### 其十一

天下取の將軍家よりは陪臣といふ舌長の言葉あれど、越後家の内にも北國に名を得し三萬石の城持、その萩田主馬が一人娘、家の武運に盡きて苦患の中憂もなく、現在の父は八重の汐路を隨てし遠島流罪の身ながら、四千石の本田家に懇望せらるゝ事、さのみの榮とも出世とも、さては固り玉の輿とも思はぬのみか、いかに桂の匂ひ床しき全盛の美男とはいへ、武士の種として仕かけられし白晝の喧嘩相手に戦き恐れ、見苦しや其の場に居縮むやうなる當世振の伽羅若衆、いやな事ぞ、變らぬ末の友白髮まで生涯を連添ふ良人に持ちて、越路の雪より清き先祖への申譯どこに立つ、誰に向うて何の女冥利がある。

もし同じ我が身への戀ならば、もしや其の戀に引寄せらるゝ我が身ならば、見ず知らずの女一人に生命の瀬戸を救ひ出さるゝ鶴龜髭の華奢風流なる若衆よりも、尾羽うち枯せし紙子の末

の浪々ながら、運にさへ叶はゞ自己の五體を衆中に持て開いて其處を退けとぞ言ひたげなる虎髭の大男こと。

まして若黨草履取まで召連れたる父を繚路の使者に立つる人と、あはれや日に残りし我が衣の模様を染出して夜な／＼思ひの枕頭に添寝する夢うつゝの人と、この身への情いづれの心ぞ深き。

わけて朝まだきの玄關口より家屋敷を名乗かけて来る時がましき繚路と、人知れぬ宵闇の梢に身を忍ばせて足踏外すまでの痛ましき懸踏と、同じ戀せらるゝ身に取りての思情、いかなるべき。

百年の苦樂を他人に依るといふ果敢なき女さへ、美目よりも心といふに、猶更ら世を我が物として立つべき男の身が、どれほど儼に容儀を整へ端に風流を作ればとて、淺黄紐の玉縁笠に髭髪の色深く、ぬき鮫の大小を粧飾ばかりに差添へたる若衆形、いたづらの歌舞伎に見る日はありとも、それを生涯の男として誰が振返るべき。

たとひ見る影もなう落魄れても、いかに怖ろしげの虎髭を喚反せし身なりとも、あるべき事か三十男が我を忘れて、夜露に打たれ蚊に責め

られながら庭の梢に忍びし心の優しき、ゆかしき、嬉しき、狂へば狂ふほど厚き情のしをらしや。

されど其人も嫌忌、かくまで深き戀の情は身に沁みて忘れねど、萩田主馬が娘の露に朝夕そつと映る面影は、あの鳥の父が影身に附添ふ男こそ。

別れしは十歳と九歳の春、互ひに幼な顔を知り合ふのみながら、數ふれば今ぞ十九と十八、よしや其のまゝ、鳥に朽果てなば朽果てよ、この身も此のまゝの生涯を浮世の塵に朽果てるまでの事、もしまた運を開いて立歸るゝ曉もあらば、たとひ片月片輪の漁夫にならうとも、心に誓ひし良人ぞ妻ぞ、いづこの誰にか頼るべき友白髪、せめて寢覺の夢に通へかし、浪枕いかに磯邊の松風や傳ふらん、なつかしの人よ、逢ひたき君よ、さて何とせう水や空なる沖の果。

\* \* \*

川端に衣を洗へる女の白き腰を雲間より差覗いて下界へ路落ちしは久米の仙人、縁端に立出てし戀女の風情を椎の樹間より見恍れて庭前へ落込みしは村田三平、いづれも平生の通を失ひながら、さて仙人は尋常の人間となりて済めど、そもくたゞの人間その後に何となる、もはや

浮世に魂魄脱殻の五體、いづこの隅にも果にも捨處なく拾ひ手なし。

わけて男一代、さても見苦しや、庭石に腰骨うち付けて動きもならぬ體を、面目なや主人の庄左衛門に抱起され恥かしや勿體なや、珠玉を展べたる戀女の手、手を引かれながら、息水を與へられ、駕に扶け乗せられ、やうく柳鳥の浪宅へ送り込まれし後の村田三平。

もはや世にある甲斐なし、おめく生きて再び幕面を曝し歩かるゝ我れでなし、叶はねば叶はぬ戀の亡骸なりとも、八十氏川の流の末、せめて武士らしき身の終焉を取らんとて、こればかりは流石に失はざりし家傳の一刀、夏なほ寒き水の如く拔放てど、惜からぬ生命に何とやら惜しきものありて無念、心外、死たくなし。

されど死すは生きて煩惱に苦しむ身、いかに苦しめばとて念願の叶ふ身か、逆も叶はぬ戀の淵瀬に悩まさるゝ身、やれ死たし、さりとて死るは幸し嫌なり、これぞ生死の境に心の底を弄ばれて、皮肉の間に惡魔の宿りし我が身ぞ、戀か、おのれ戀と思へど、かくあるべき筈の戀に狂ふ我が身をこそ罪あり、かくとも知らで戀せらるゝ女に何の罪である。

たゞ頼むは去るもの日々疎しとの謔、こ

の上は此の身この江戸を去るより外になし、いづこの宿とも知らざりし今までは猪臘月夜に散行く花の匂ひを慕ふばかりの我にて済めど、もはや遠くもあらぬ本所の割下水、あの木原庄左衛門といふ御家人、あの堀越に差出たる椎の木蔭にありと思へば日鼻の間に手の届くべき心地、いかでか餘所に過さるべき、何として身に守らるべき、まして番町に全盛の片相手あれば猶更の凡夫煩惱、いづれ他の妻になるべき筈のものながら、これほどの戀を現在それと知る奴の手に迎へ取らるゝは牛膽を絞り抜かるゝよりも苦しき業ぞ、あまりの苦しさに堪へ兼ねて我れもし此の上に狂はゞ、人斬庖丁を身に添へたる武者種の大狂亂、いかなる情ろしき振舞に血迷ふやら。

人は心の器、やれ危ふし、やれ恐ろし、かくと思ふ今こそ我れまだ五體の端くれに本性の残りし證據、せめて其の性根の失切らぬうち、この江戸を立退て海山を隔てし遠國の空へ遁れ出るより外なし。

あたり五體をす障なく戀の白刃に斬刻まれながら、流石に蟲の息を残せし村田三平、終夜ら睡りも得せず明行く空を待兼ねて、鶏の聲もろとも旅の用意、さりとて用意するほどの品もなく、

編笠一介、腰の兩刀、巾着の底は輕し、たい人しれぬ心に重きは例の大模様を染出せし生絹單衣、此のまゝ捨て、行かうか、いづこの里までも身に添て行かうか、捨てゝ去るは惜し、添て行くは辛し、はて何としてくれうぞ。

## 其十二

衆中に身を持って開いて其の場を退かぬ猛々しき業は得ざれど、うちつづく太平の餘得世の中を火宅の宿とも知らぬ歴々の生育、當世振の華奢風流には自然の容色を備へし本田内記の二子小一郎。

春の落花を惜む親の心か、秋の風雨を悼む其の身の心か、ことし十八ながら袖の脇も塞がず額の角も入れず、みどりの大前髪に露も滴るばかりの風情、鶴鶴に二つ折の若衆鬘を水引元結に巻立て、遠く見れば無地なれど近く透せば縞縞模様の浅黄帷子に縫分縞の畦帯、ぬき鯉の細身大小、高時結の小印籠、ねり絹の夏足袋に三筋打の紺紐を纏ひ、くりかけ丹前の鼻緒草履、さらぬも女にせまほしき天生の美男を猶更驚揚なる當時の全盛に盡して、靜かに豊かに妖艶として忍び梅花の匂ひ四邊を薫する體、ゆかりの色に誘ふ若紫の野郎帽子も如何でか及ぶべき、往來の人目おはず歩を停めて振り返りぬ。

加之も例の藤助まで今日を晴と自己の身分相應に男を作りて、音物を入れたる石燈の袋に玉縁笠を持添へ、草履取の奴また鉦面を磨いて従ひつゝ、主従これ見よがしに出来りしは本所の割下水。

椎の太木を目標に歩を停めて、藤助まづ木原の玄關口より案内を乞へば、取次もなき主人の庄左衛門、みづから手輕に立出でての挨拶、それと聞いて猶更ら慇懃に小一郎を迎へ入れぬ。見たし、見られたし、もし叶はずば、せめて通へかし、とめ木の伽羅の匂ひ、忍び梅花の肌匂ひ、この壁一重ぞと座に着きし小一郎、流石に今更ら恥かしく目元を染出せば、いと際立つ容色に風情を添へて、まことや畫ける龍陽の如し。

されど花は霞に隔てられて匂はず、月は雲間に深く隠れて影も漏らさぬ本意なき。たゞ主人の庄左衛門が色香なき禿頭のみ小一郎の面前に目立ちぬ。  
「昨朝、父御様これへの御挨拶にも、まだ伺ひ得ませぬ今日また御自身で、わざ／＼の御入來、重ね／＼の事、わけて潔好なる下され物」  
「萬事は父よりの指圖、たゞ此の身は、浅草山門での御禮、かた／＼」

「是非とも、近日のうち、あらためて、まかり出ましたる上」

さらに何の興もなく曲もなく、可憎ら思情を盡して來りし甲斐もなく風情もなく、それかと思ふ、疊ざりの氣振もなくて、只これだけの事、あまりの手持無沙汰に堪兼ねし小一郎、わざと急ぎの用ありげに座を起てば、主人の庄左衛門、いよく慇懃に門前まで送り出しぬ。  
さりとは全盛生育の華奢振、見る日も覺むるばかりの若衆ぞと、庄左衛門、おもはず門前に立ちながら、その後姿を見送りしが、ふと何心なく振向きし此方の堀際に倚添うて、古編笠を被りし旅草鞋の武士二人悄然として蹲まりぬ。

「椎の木より轉げ落ちましたる大白癡、江戸出立の暇乞に今一度、貴方様まで御意を伺たい」  
\* \* \*  
名所の月に花を添へたるかと思はるゝ華奢風流の若衆振、その本田小一郎が色香も深き袖の匂ひを残して立去りし門前の此方には、身を忍ぶが如く堀際に倚添うて、ものゝ哀れの古編笠に行方もしれぬ旅草鞋の村田三平、姿も心も打調れたるまゝ、悄然として蹲躍りぬ。  
加之も大の男が四邊を憚りながらの小聲に、

椎の木より轉け落ちましたる戀の奴、江戸出立の暇乞と聞いて、木原庄左衛門 何とやら胸に涙のせぐり来る心地、そつと立寄るや否、手を取て引入れぬ。

「いや、情あるほど猶更身に取て辛い折柄、これにてこの御門内にて此のまゝ暇乞、それさへ來るゝ管の身でなければ、たゞ一品、お渡し申したい一品を持参いたした」

「兎も角も、こゝでの立談は、せめて入口の一室まで」

「御芳志、なれど、もはや再び、わけて白晝に見られたくない面ぞ編笠は此のまゝ御免なりませ」

「はて、何の、それが、はゝゝゝ」

「幸ひ狼狽た目鼻も見えぬ笠越なればこそ、おめおめ此奴また今日、これへ斯く來られたものの、さて今更何と申さう言葉も面目もない次第、もし兩刀の手前を思はば、さらぬも世に在て用なき當世不向の男、まして尾羽うち枯した果に、何事ぞ、叶はぬ戀に木の空より迂り落ちて他人の庭石に腰骨を打抜かすほどの大白癡、せめて手の動く間に腐りし臍腹を掻切るべき筈ながら、惜からぬ生命を今暫時、入らぬ生命を今暫時、蓮の葉の縁目に繋ぎ止めて、これより他國

へ出立いたす心體、ついで持參の生絹單衣、こりや自己の心で入しれず染出したのみの事、さらゝ此方の、あの女に何の、ゆかりも縁もなければ、これあるがために首途の歩も進まず、やれ苦しみ申すぞ、きりとて此のまゝ捨てゝも得ゆかぬ男、また身に添ては猶更得ゆかぬ男、願はくは御手許へ返したい、否、そつと差置て旅立いたしたい」

懸垂れて肩口まで蔽へる編笠もろとも差附きながら、幾重に疊み込で懷中へ入れたる戀衣を差出せば、主人の庄左衛門、まづ押止めて手にも受けず、其のまゝ家内に走入りしが、やがて出來りて身を捐寄せつゝ聲を潜めぬ。

「實は只今、貴方も門前にて後姿を見られた筈、あの番町の本町家より子息が、わざゝゝ來られてさへ、影も見せず奥深く潛まれし女ながら、貴方へは、お逢ひ申したいとやら、編笠そのまゝとならば其のまゝにて、もしまた、座敷へ入らぬとの事ならば、庭口より縁端へゝきくや否、村田三平、編笠を震はしたが身は立木の如く動きもやらず、兩手に持てる戀衣を袖と胸邊に抱きぬ。

おもふ戀女の手に觸れし情の移り香もなく

て、たゞ自己が心の迷ひを染出せし生絹單衣一枚さへ、今ぞ行方も知れぬ旅の首途に踏出したがら、さて勇きも得せず捨てゝも得ゆかぬ村田三平。

まして華奢風流の全盛を盡せし當世振、男の目にも見惚るゝばかりの若衆にさへ、奥深く花の姿を隠して匂ひも漏さざりし其の戀女が、現在の今この身に逢はんとの言葉を聞きし村田三平。

たゞ夢うつゝの體、主人の庄左衛門に導かれて、細谷川の丸木橋を首日の身に連る心地、庭の柴折戸より飛石傳ひの欄間を歩みつゝ、こぞと思ふ縁端に腰うちかけしまゝの無言、ちらと編笠越に見れば流石の面取氣に隔たりながら、正しく戀女は同じ縁端の彼方、柱の間に畫ける如く坐して、あの椎の木より轉け落ちし大白癡とも思はぬか、この見苦しき魂の脱殻を今たほ引摺歩く愚鈍者とも思はぬか、さて何とやら我に自然の情らしき風情、しめやかに匂ひ渡るゝ感動の會釋振、三平、おもはず總身を打震はしぬ。

主人の庄左衛門、わざと一室へ入りて、障子越より釜の湯加減よろしきとの聲に、露女、すらりと座を起ちつゝ、心を込めし抹茶一服の

手前、やがて静かに持出でて、襖紗のまゝ三平の前に差置きぬ。

「何處へやら、お旅立なさるゝとの事、せめて祝盃の代用に、無調法ながら」

三平、いよく面深に細筆を打られるまゝ頭を垂れて、珠玉を捧ぐる如く手に取上げつゝ、おし戴きぬ。

「もはや、これへ來られぬ筈の此奴が、かくまでの俊しい芳志に、あづからうとは、思ひもよらぬ事、この一服の御手前幾久しう、うけまするぞ、忘れませぬぞ」

「あれ、その御言葉は聞かぬ事、たゞ前途の朝夕、山川の旅路、道中お支障のないやう、また日出たう、わけて勇ましういづこの里にても、晴々しう御出世なされまするやう、かげながら」

「かゝる奴へ、ようこそ、日出たうは俯置て、晴々しう、勇ましう世に出よとは身に取て何よりの御賤別」

「ほゝゝゝ事々しい仰せ、それよりも只今、主人の言葉に、貴方様こそ、この身へ、何やら一品」

「や、うけて下さるゝか」

「うけませいでか、數ならぬ身をさほどまで、憎うも思召さず、下されうとの品、うけませい

でか、時めく全盛の人に贈られる綾錦、摺箔、唐織、よりも厚う、輝しう」

三平、もはや身にも心にも堪へざる體、ほろりと一竿、細笠の中より履うちかけし膝に落して、懷中より疊みしまゝの細衣、さても今更ら恥かし氣に差出せば、そつと兩の手にうけし露女、いきくと張切りし日元を繰曳く如くに閉ぢて、その生絹單衣を雪の顔に押當てぬ。

「行末、何とならう浮世の果まで、こればかりは、他人の手にも觸れさせず、身に添まして」

「は、は、村田三平といふ男、この後の生涯に、女といふもの、あつて濟まうか、無い事、もはや無い事」

### 第十三

「藤助、これへ來い藤助、ずつと出い」

「は、召しませる御用は」

「あの本所の割下水へ、わざと今朝、この身を何のため、連れて参つた」

「こりや若様、今更ら異な事を仰せられます、何のためとは、御無體な事、はゝゝゝ」

「や、此奴、笑うて済むか、行けば行くだけの事、あると申したでないか」

「ある筈、なうて叶ひませぬ筈、なれど藤助は室外に供侍の身、若様こそ、それだけの事、御

自身に」

「いや、さらに面白くないぞ、あの主人振の角張て艶もない事、第一その、花も月も見ずに歸つたぞ」

「それ生命、そこが浮世の眞只中、さうあるべきが人情の水の上、で、はゝゝゝ花は日の清明なるよりも、藤を隔て、何とやらの謠、また月の風情も冴て照るよりは、かすむ朦朧に如くものなしとか、聞及びまする事」

「えゝ藤でない、壁ぢや、臆ろの段か、影も漏さぬ眞黒闇ぢや」

「それこそ一入、それならば猶更ら以ての風情、あまり若様の、まばゆう出来過ぎました容色と、華奢な風流振に思はず照返されて、花も月も奥深く、ざりとては女性、あの淺草の山門で、あれほどの寛活な氣風にも似合ず、こりや若様、お連れ申した藤助に、まづ御褒美を下されいでは」

「はゝゝゝ物いへば褒美々々と、聞苦しい奴、何それが、褒美にならうぞ」

「これ御褒美にならうでは、もはや藤助お暇を願ひまする、大の男さへ見物の山ばかりで、たれ一人の割て出るものもない其の中へ、ぬつと花の姿を惜氣もなう地込むほどの女が、今更ら

其人と知りながら、三歳児のやうに通隠れ致さるゝ事はない筈。なれど、ない筈を現在、ある筈が若様、古今の一轍この道の習慣、傳へ聞く巴も板額も、良人の前では、馬にも乗らず門も破らず、わけて面恥氣な尋常の女と申す諺は、ハハハ」

「さらば藤助、まづ當座の褒美に、何が欲しいぞ」

さらぬも白き齒を盡打の楊枝に磨いて、香枕に厚髪を梳髪を匂はせつゝ、紅絹裏の大振袖も似合ふばかりの當世風、その全盛に仕立てられて我がまゝの浮世しらずに育ちし小一郎妖艶たる目尻に藤助を見遣りながら、おもはず微笑を含んでの、小聲

「望み次第の欲しいもの、取らさうぞ、さる代り藤助、それほど確實に思ふならば今一度、あの本所の割下水へ、汝ばかり出直して、あの女に逢うて、この身へ運ぶ心の證據、身に着けた、肌に着けたもの一品、ならば手柄に何なりとも貰うて来い、受けて来い」

藤助、はッと思ひしが、江戸中の雲さへ掴みに捜し歩いた男、まして今は現在それと知れたる御家人風情の宿へ、わざ／＼四千石の主人父子が歩を選びし上の事化粧道具の一箇ぐらゐ

は掌中にありと心得て、はや大存達の胸を軽く叩きぬ。

「若様手柄は同じ手柄、重いも軽いもない筈、その品に、これといふ恩召あられませぬか、はハハハ」

\* \* \*

もし戰國亂世ならば、掲うた敵の生首を攝取て来いとこの事、やれ怖ろしや生命を的の活動なれど、今この太平の有難さは浮世の月と花とに御用の外、おもふ女の身に添うた色品一箇で出世の緒、いよくこれより拙者も世の中へ罷り出まするぞと、藤助番町の屋敷を飛出して本所の割下水へ一文字に駆けきぬ。

この辻が馬の用心、この溝が泥の用心、偕あの椎の木が我が爲に開運の目標と走り行く折しも、門内より立出でしは古細笠に旅草鞋の村田三平、つゞいて主人の庄左衛門、や、その後より壁一重の匂ひさへ漏らさざりしといふ本陣の御姿、あり／＼と現れ玉うて、加之も乞食めいたる素浪人の三平奴に何とやら優しい風情、また名残惜氣に私語しながら會釋せし體を見るや否、藤助、あつと呆れ返りぬ。

かくとも知らぬ三平、編笠の縁に片手をかけつゝ、片手は宙に翹ぐが如く、腰を折屈めて怒

熱の體。

「等の先でがな追拂はるゝ奴が、かうも手厚う送り出さるゝとは」

主人の庄左衛門も差俯きながら、今更の哀れに打たれし體。

一重わたの御縁あらば、偕また御目にもかゝる、まづ浮世それまでは、お身大切に、行末の御繁昌を祈りまするぞ」

露女は入の辛らき心地、我が身よりの懸ならねど、逆も叶はぬ我が身への懸に堪へ兼ねて、これほどの男一人が行方も知れぬ旅の空に彷徨ひ出るかと思へば、情の外に情に胸ぞ迫りて涙の目元、忍びながらの小聲、

「おさらば」

御免なりませとの一聲、胸膈の底より苦しげに絞り出して、鐵縛の中より脱出すが如き満身の力足いち／＼大地に吸込まるゝ重き草鞋をあげながら、あはれ男一代の戀も情も振捨て、前後の雲霞わざと見返りも得せず歩み行く後姿、その心根を思へば鬼神も泣くべし。

見送り果てて後、庄左衛門も露女も其のまゝ門内に入れば、此方の物影に不思議の腕を組んで窺ひし藤助、幾度か自己が目を拭うて立ちながら、なほ胸膈に咄れぬ心地、ばつとして四邊

を見廻しぬ。

時節到来、いよ／＼拙者も世の中へ罷り出ます。出世どころか、珍事出来、うか／＼すれば此のまゝ屋敷を叩き出さるゝやら知れぬ雲行、さア事ぢや。

第一あの虎狼奴、いつの間に拔擢して現在あれほどの功名手柄を仕て退けたか、いかな破鍋に閉蓋はあらうとも、そも／＼彼奴に女氣は立寄りぬ筈の世の中に、女も女、また一人とあるまじき天下無類の名花に門前へ送り出されて、何とやら嫌でもない氣の風情に扱はれ、さも情あり氣に後姿まで見送られながら、勿體なや、振返りもせず其のまゝに立去るとは、いよいよ以て言語道斷の奴。

もし本尊の肌身に添うた色品一箇、今日こゝへの證據に貰うて歸れずば、さてこそ彼奴の業、おのれ其のまゝでは置けぬ奴と、藤助、結局は自己の禍福吉凶、ぐる／＼と白眼を刺出しぬ。

「こりや番町様の御家來、いかな御用で來られた、まづこれへ、そこは借、あまりの端近ぢや」  
「いや、下郎の身分で、なれど御當家へは、あの泥海の御恩以來お見知のある奴、また屋敷で

は外々の用に立たずとも、此事だけには最初より何としてやら通れませぬ奴、はゝゝゝ」  
「まめ／＼しう氣輕に出来たればこそ、御主人に重寶がらるゝ、其の身の幸福ぢやさて木原庄左衛門への御用は」

「實は内々、そつと思召のほどを、伺ひましたい義で」  
「その内用といはるゝは」  
「今更ら、忝細に申上げずとも、はや既に過日、主人より御懇談いたされ、また今朝、若主人も、まゐられましての事、それに就て」

「や、それに就ては手前こそ、あらためて御返事と、申すほどの事々し義でなくとも、せめて一應の御挨拶かた／＼、伺はいでは済まぬ筈の折柄」

「は、但し、それは別段の事と致して、只今これ／＼下郎の伺ひましたは、その以前、まづ御息女の」

「はゝゝゝあれは娘でない、ちと仔細ある他の、あづかり女で、勿論この義は御主人へも大略、申上げて置いた筈、なれど汝は知らぬ筈ぢや、はゝゝ、偕あの預かり女の身に就て、いかやうな御内談に來られたぞ」

「さう仰せられましては、萬事不案内の身分で、

は、よし、いづれ様の御息女に致せ、御當家へ對して主人、お願ひ申上げました事の外、また別に内々、實は一日千秋とやらの謔、片時も待兼ねましての若主人、ならば前以て、御本人の思召を、何うて來いとの義で」

「やれ勿體ない、冥加至極、何が借、當時に聞えられた歷々の御大家、加之一粒種の御息息、わけて今朝、御意を得まして、もはや艶なる浮世沙汰に用のない老爺の目にさへ、我を忘れて見惚るゝほどの御容色さ、もし庄左衛門が生産の娘ならば、否、いづこの誰、何者の娘にせい凡そ世の中の女といふ女として幸福の頂上、これが俗に申す夢かとばかり、飛立つべき筈の事ながら、偕あの預り女は、さる心願の筋あるとやらで、いかなる義理、柳、戀に迫られても情に包まれても生涯の獨身、男といふものは一切、その身に持たぬ覺悟これまた案外の磐石で、實は過分の御縁談を下された以來、さまざまに勧める段か、説きも致した、論しも致した、また竟には立腹も致して見たれどいやはや、お返事の端にもならぬ事、それがため庄左衛門、内々は進退こゝに立往生いたして一應の御挨拶にさへ出兼ねた折柄、幸ひの汝ぢや、いづれ其のうち改めて御玄關へ罷り出る前、まづ御

本人の御耳まで、そつと御意に觸らぬやう、何卒この段を餘所ながら、それとなく入置て下されたい、さて女の是も非も無う、たゞ石のやうな片意地に出来たは、致方のないもの、轉ばしもならず、掘出しもならず、たゞ埋めたまふに可憎ら見通すも身のため、あはれと思へど、俗また思ふやうにはならず、や、あの預かり女には慈愛でた

#### 其十四

おもふ懸は身に叶はずとも、おもはぬ情は心に叶ひし村田三平、もはや男一代に浮世の月も花も見捨て、迷ひの種に染用せし生絹單衣は本田家に賣損ねたれど、これぞ却て幸ひの手に渡して我が一念の届くべきところへ届いたり、あるにもあらぬ前後を離れて椎の木より下り落ちたれど、落ちて後の我が生命を拾うて執着の雲霧は胸に晴れたり、いざや此の上の懷中に残るものは等物の一封、只これのみ。

行方も知れぬ旅の空の首途、いづこを的とも定めなき江戸出立の草鞋がけ、土手三番町の本田内記が玄關の眞正面へ、編笠も脱がず立ちながらの大聲

「こりや一度これへ罷り出た事のある村田三平と申すもの、その砌、はて何の思召やら、受け

やう覺もない我が浪宅へ抛込まれた金子一封、すぐに返さう筈のところ、わざ／＼面倒と心得て今日只今歩ついでに確と返戻いたす、一旦は主人殿御自筆の請取一札、是非に入用と存じた事もあれど、もはや其事に及ばぬ折柄ぢや、封じ目を改めて納められい

取次に出でたる男の面前へ抛出せしま、颯然として立去りぬ。

ふしぎや三平と藤助は走馬燈の如く、けふ一日のうちに三度の出入もろとも互ひの後姿を前後に追廻りぬ、そも／＼小一郎が全盛の若衆振を纏うて木原の門より立出でし時は、折しも來合せし三平、その堀際に倚添うて竊に見送りつゝ、三平また古銅笠に旅草鞋のまゝ、木原の門を立出でし時は、折しも取返して來合せし藤助、また同じ堀際の物影より竊に見送りつゝ、加之も今こゝに走歸れば三平また今しも立去りし後と聞て、藤助おもはず腕を組みながら、いよいよ癪癪の眉を逆立てぬ。

さらぬも藤助、みす／＼自己が掌中に握りし出世の緒を、思へば思ふほど不思議の案外、あの虎髯に踏切られた心地、

まして我等主従には奥深く閉籠りて花の匂ひの影さへ見せぬ本尊が、彼奴ばかりに何とやら

情あり氣の風情、わざ／＼門前まで送り出せしとは。

加之も化粧道具の一箇ぐらゐは今日の手柄の何の苦もなしと思ひの外、五味藤の貝殻一箇も手に入らぬ眞正面より、ずばりと主人の庄左衛門に根こきの破談を申込まれし藤助、はや絶體絶命、此のまゝ屋敷を叩き出される覺悟の泣面に遣出でて、委細を主の父子に打明しぬ。

かくと聞きし本田内記、たゞさへ素浪人の村田三平に吾物の一封を冷飯草履の如く抛返されたる折柄、わけて四千石の主人が御家人づれを訪うて慇懃を極めし甲斐もなく天下の直參が生涯一度の面上を逆撫にせられたる心地、猶更戀の一念に前後の差別もなく浮世を我がまゝ、生育の小一郎は、月も花も物かはと萬人に羨まると、自己が華奢風流を割下水の泥に塗汚された心地、父子もろとも目眈を釣上げて本所の方角を睨みぬ。

\* \* \* \* \*

どれほど天下無類の美女にもせよ、さもあるべき女の美はしきは花の自然に艶なるが如く、そも／＼男として萬人に羨まるゝ我が一子の面前へ、どれほどの過ぎたる色香やある、たと

ひ元は北國に一城の主たりとも江戸よりは陪臣の萩田主馬、まして今は家も亡び躬も落果て、八重の汐路を隔てし島蔭へ流人の娘、やう／＼其の日を御家人づれの手許に養はれながら、天下の直参として四千石の家門に迎へらるゝが何の不足ぞ、女に似氣なき蓮葉の振舞なれど我が子に取つて一時の恩と思へばこそ、一月あまりの日夜この四里四方を探しもすれ、もし聚らんとならば選取に聚るべき筈なれど、我が子のために餘所を得しらく態と思へばこそ、わざ／＼慇懃を極めて数々の心を運びもすれ、さるを今日まで唯一應の挨拶もなく、自己そのまゝ居坐りながら此方よりの下郎使者を幸ひ、下世話にいふ木で鼻を括りし無禮の破談とは。

まして片相手に人らしき奴のある事か、浮世の浪に鹽垂れて心に結ぶ磯邊の小屋もない素浪人、いづこの馬の骨とも牛の皮とも知れぬ奴へ、きけば不思議に何とやら情あり氣の風情を寄せながら、かくまで家格を破りて取入る我等父子へ思ひの影さへ見せず、加之も振分髪の頭より定まる條ありとか、今更ら脱れぬ義理の柵ありとか、せめて相應らしき言葉のあるべきに、たゞ生涯の獨身、世の中の男一切この身に持たぬとは、あまり見透て紙一枚の内外を欺くに

等しい業、人にも依りけり本田内記の手前おのれ其事で済まうか。

一藤助、もはや再び、いかな事ありとも八幡梵天、あの割下水へ腰腹を運ぶ事ならぬぞ、もし萬一、あらば汝まづ其分に差置かぬぞ、たとひ小一郎が何と言ふにせい、その小一郎を産だ父の内記が不承知ぢや、花は年々の春に咲出るもの、美女が欲しくば日本晴、あれよりも立勝る美女この廣い世の中に無うてか、當時いづこの誰に劣らぬ本田家の嫡子として生れた身が、わざわざ流人の残し種を拾はずとも、父が捨置かぬと申せ、我にも藤助、なまなか無益の忠義立して入らざる拔足に忍び出るな、汝は最初より此の事に就て人一倍、小一郎の氣に合うた奴、わざと言置くぞ、確と申聞たぞッ

折しも取次のもの出来りて、お玄關へ本所の木原庄左衛門と聞くと否、本田内記、猶更ら眼を光らしぬ。

「や、追歸せ、用はない筈、もはや今更ら逢うて語るに及ばぬ奴ぢや、なれど逢ひたくば前以て用事の次第を委しき書面に差出した上、當方よりの召に應じて來いと申せ」

## 其十五

のあるまじき世の中に、さて何とせん現在こゝに元祿の空、あるが猶更ら以て開闢以來の珍事出来、かの生類憐愍といふ天下法令の下に、戌年の五代將軍家ます／＼繁昌の勢ひ、時を得たりと大畜生いよ／＼江戸市中を我が物顔に曳歩いて、あはれや顔色を失ひつゝ、遁逃／＼人間風情、うか／＼歩の停場もなし。

加之も人間には飢て路頭に倒るゝ奴あり、病で軒下に蠢めく奴あり、家を失うて野に臥す無宿もあれど、四里四方いづこの隅にも藪にも一定の迷ひ犬なく、いち／＼犬の戸籍を作りて毛色と生年月を奉行所に差出さしめ、いよいよ持主なきものと定まれば公儀飼立といふ名の下に大久保の御用屋敷へ養はるゝもの十七萬疋の餘、さらに中野へ十五町四面の犬小屋を建て、聯ねて、これに養はるゝもの三十餘萬疋、一日一定に白米三合と味噌汁四合と干鰯五合／＼の膳料とは、あるべき筈の事ならぬと正しく元祿八年の五月七日、犬の頭の判を大奉書の帳面に据て時の老中より將軍家の手許に差出せし御犬様の取調書なり。

お犬様の餘徳を蒙りて山里の田舎には猪狼鹿狼の類まで、のそ／＼と傍若無人に這出でて、田畑を荒し人を傷くる事あれども是れまた

鳴物を打鳴らして追拂ふ外、かりそめにも鐵砲弓矢竹槍にて殺すべからずとの嚴命、まして犬公方の御膝下には、下城の途中おもはず向腰を審み付かれながら、其の犬に一禮厚く演べて行過ぎし振舞神妙なりとて百石の加増を得たる旗本あり、また犬の喧嘩には水をかけて引分くべしとの布令あるに、足をもて蹴り分けしのため三宅島へ流されし淺草の町人あり、天下の政道たゞこれ大沙汰、日本一の大江戸は只これ犬寄生の持物となりぬ。

折しも誰いふとなく、兩國橋の上より犬の死骸を川中へ蹴落せしものありとの風聞、今までは然ほどにも立たざりしが、俄かに近來、ばつと世上に廣まりぬ。犬の死骸を竊かに取捨つるものあらば、本人は固り脱れぬ重罪、その町内一同は軒を並べて曲事たるべしと、衆てより嚴しき法令を頭上に戴ける折柄、この風聞に兩國橋の相方、あつと今更一時に狼狽へ騒いでおの／＼五人組の家に夜明しの内談密議、もはや逆も叶はぬところと觀念しながら、せめて本人の召捕られぬ以前に哀訴敷願の外なしと、先月その夜の始末いぢい具さに町奉行へ訴へ出でぬ。

現在その場に立會ながら、今日まで祓し立の

罪科、主人分いづれも入牢申付くべき筈なれど、本人露現の前に出訴いたせしがため、町内一同三日間商賣差止めの上、許し遣はすぞと言渡されて、橋の相方おもはず胸を撫下しぬ。されど俄の風聞に嘩し立てられ町奉行に睨まれ相方の町内より訴へ出られし其の夜の本人、あはれ何となる、恨みの風、好み雨、それとも知らで浮世の籠に色香を深く包みし名花一輪。

同じ將軍家の臣下ながら、直參とは違つて御家人といへば、生涯に一度の拜顔も叶はず、猫の額に等しい知行所でもある事か、時めく大名の乗馬一頭にも劣りし塵を取、たゞ兩刀の手前に其の目を送りて、粗末なれど門構の家に住みぬ。

わけて木原庄左衛門、これを踏臺として世に出る心もなく、また人と交はりて當世振に押歩く氣もなく、もはや五十の坂を五歳の上まで越して今更流れ渡りの浪人するよりは、たゞ浮世の氣樂さに株を求めての江戸住居、一つには流罪の赦免も其のうちに吉報あらんとの心待、一つは主の形見を無事に育てんがための業。

されば固り傳來の御家人風情でなく、人しれ

ぬ古葛籠の底に用意の黄金もあれど、わざと世間體は目立たぬ老後の境涯、加之も萬事の手輕さ、ものの葉蔭に堀を作る小鳥の如し。

今朝も今朝、みづから簪を手に取りつゝ、流石に忘れぬ昔の餘波、奥よりの座を小諸の一節に玄關口まで掃出せし折しも、門前に三人の同心を待せながら、ぬつと入來りしは町方の與力風。

「木原庄左衛門殿、御當家の筈、只今居られまするか」

「庄左衛門これに、何の御用で」

「ちと、お尋ね申したい義で、實は、町奉行の手より」

「はて、異な事、奉行所よりとは、兎も角も、まづ一室へ」

「通らいでもの事ながら、お身柄を辨へて一應」

おもはず小首を傾けて、眉を蹙めし主人の背後より、ザツと無聲響に打通りし體、加之も座に着いて軽く目禮しながら、四邊を見廻す眼、きろりと光りぬ。

「是非もない役向の事、利用の世間體は俯置て、お尋ね申さうは、娘御か、但しは寄食人か存ぜず、當家お手許に十八九の女性あらるゝ筈」

「居りまするが、その女に就て、いかやうの  
お尋ねで」

「名は何といはれまする」

「露と申すもの、十八歳、まづ養女分と致し  
て」

「や、それにて、その他は一切、申開かるゝと  
ころへ申開かるべき事、その露といはるゝ養女  
分の女、只今これより、奉行所へ」

庄左衛門、何とやら身の急所に針を刺されし  
心地、わざと打静めて、一入さらに聲を潜めな  
がらの額越。

「數ならねど、御家人の端に連りまするもの、ま  
して見らるゝ通りの老體、お役向に對うて入ら  
ざる無用の念を押さうではない、たゞ心得のた  
め、いかなる義にて、養女分の女、かく案外の向  
へ曳かれまするぞ、憚りながら、お支障のない  
まで、そと御内分の芳志に預かりたい」

「これにては、聊か迷惑ながら、實は先月十二  
日の夜、兩國橋の上にて、これほどの年ごろ、  
かやうく風の體せし女、大膽にも當時御禁令  
の、お大を川中へ蹴落せしとの事、俄に橋の相  
方より町内一同の訴、それがため」

きくや否、庄左衛門はッとはッ、一時に死を  
紙めし顔色、たゞ老の兩眼を閉ぢて、膝に置

ける手と手を堅く握り合しぬ。

「一切、門口への外出も致させぬ身に、さやう  
の義、あらうとは存ぜぬ事ながら一應、まづ本  
人へ尋ねましての上」

「や、入らぬ事、今更ら無用、門違ひ人違ひで  
は來ませぬぞ」

\* \* \*

花は花、同じ色香の花ながら、比類あるまじ  
き名花一輪、加之も今日まで人しれぬ籬の下に  
可憐な匂ひを深く包んで、まだ浮世の春にも逢  
はぬ其のまゝの曉を、おもはぬ怨恨の雨に妬  
まれ風に猜まれつゝ、あはれ葉末の露も雫も消  
果んとは、

華奢全盛の風流を極めし若衆振には、壁一重  
を隔て、情の影さへ漏さねど、今しも主人  
の庄左衛門が老の身に堪えねし一期の苦痛、  
ほッと吐出し溜息を障子越に聞かや否、露女  
曇れる雨雲の闇里を破りし嫦娥の如く、その興  
力の前に無言のまゝ現れ出でぬ。

わけて天生の容色、一入こゝに晴々しう恐る  
る顔色もなく際立ちて、加之も我が身にかゝる  
生涯の浮沈と思へば、いとゞ凜々しげに物凄き  
まで涙渡りぬ。  
はッと驚く庄左衛門の膝、そッと輕う片手

に押へて、座に進み出ながら、とめ木の伽羅を  
含みし火塔口の大前髪に會釋せし風情水の滴  
るが如し。

「木原庄左衛門方に養女分のもの、御用とあれ  
ば、いづれへなりとも」

與力おもはず俄の目を見張て、今更に居坐を  
改めぬ。

「さてく、うら若い女性の身としては猶更  
の神妙さ、もし主人殿に申置かれたい義もあ  
らば」

露女、我が身よりも流石に庄左衛門へ涙の  
目元、うち濕ましぬ。

「何處、いかな、ところに由うとも、曳かれ  
うとく、さらへ見苦しい氣は持ちませぬ露、  
また兩國橋とやら、おもへば夕暮の急き歩、つ  
い物に躓いて、なれど今、障子越に聞た、そ  
の事は神かけて覺のない身、ほゝゝわけも無  
う済む筈、お心易う」

また與力の方に對うて、さも優し氣に身を謹  
みながら慇懃の風情。  
「人前を憚りまする女子の常、わけて確と、知  
れぬところへ參る身の事、せめて御目觸りの無  
いやう、髪かたち、肌膚の修容、それまでの  
間」

自然の優なる静けさ、あまりの落着いた體か  
きに、與力も思はず感に堪へて目禮すれば、す  
らりと其のまゝ奥の一室に入りしが手早く筆と  
りて主人の庄左衛門へ書殘せし一封、そつと文  
函の底に藏めて床の間に差置きながら、さて  
十八年の春や秋、花も月も空しく過せし浮世、こ  
れぞ我が身に我が顔の最後となるやら、あはれ  
鏡臺に對うて、袖の端に拭ひつゝ人しれぬ心  
の憂悟みれば斯くても女、いつしか宿りし目と  
目の雫、チツと打守りぬ。

### 第十六

貞享二年七月、生類憐愍の嚴令以來、こと  
し元祿九年八月まで、かけて十二年の間、大  
寄生のために人間は塵芥の如く取扱はれて、  
獄門首にせられしもの十六人、たゞの死罪四百  
二十八人、遠島流罪三百十餘人、箇々の身分あ  
りて、切腹を仰せ付けられしもの三十七人、先  
祖傳來の知行を召放されて追放せられしもの二  
百六人、その他の閉門謹慎は諸置で、いかに厄  
病神の如く遊廻れど、うかと吹付かれしが禍  
の基に捕へられつゝ、桑町人の獄屋に繋がれし  
もの凡そ幾人、怖ろしや大一定の生死は天下  
の大事よりも重し。  
されど流石に女の當、猶更此のごろの怖ろし

さに身を縮めて、醜漢の刃物三昧よりも四足の  
影に奥深く遁入れば、この十二年間の厄病神に  
取付かれしもの僅に四百二十餘人、まして思  
はぬ不意の祟、いづれも夢うつゝの心地に引か  
れしのみ、わざ／＼大の毛一本を抜取るほどの  
罪人あるまじき筈の折柄、その女も女、やう  
やう今年こゝに十八の身を持ちながら、六尺の  
毛腰男さへ顔色を失うて飛退くべき嚴科重罪  
の一物に、通行途上の足をあげて橋の上より崖  
中へ蹴落せし女、いかなるものかと見れば、花  
の露女、惡魔波旬も居縮むべき奉行所へ胸目  
も觸らず入來りぬ。

まして平常は生れしまゝの風情、天の成せる  
容色を誇るにあらねど、絶て紅粉脂黛を施さざ  
りし身が、あはれや今日を我が身の大事の女の  
終容、さらぬも蓋ける如き面上に白粉の匂ひを  
重ねて、丹花の唇端に奥紅を含みつゝ、火塔口  
の額際に餘りし大前髪吹簪の鴈髻に毛卷の小  
杭を絞付けたる籠島田、銀箔の平元結を覆結び  
に跳返して、とめ木の帯りに四邊を薫しながら、  
どこまでも儼然と跳なる風俗、さうりと靜かに打  
沈みたる自然の容態、雪を欺く素足に紙緒の草  
履そろりと運ぶ歩み振、男ならば正しく胴骨の  
押据りし大膽不敵、こゝを何處の里と言ひたげ

に引かれて、加之も身に纏ひしは村田三平が殘  
せし生絹單衣の大模様、さりとては女一代の浮  
沈みに人しれぬ心の優しさ、ゆかしさ、しをら  
しさ、もし一日がくと見れば、あの虎髯を噴反  
して唸るが如き大聲に泣叫ぶべし。  
當の奉行を始めとして、白洲の上に屋並ぶ一  
列いづれも呆れし體、おもはず眼を注いで暫時  
の無言。

やがて一聲、帛を裂くが如し。

「面を上げい」

露女、さらに怖るゝ顔色なく、加之も慙とら  
しき風情なく、たゞ物靜かに差俯きし花の顔、  
そつと半まで擦げぬ。

「本所割下水の仕居、これにて身分柄は入らぬ  
ぞ、たゞ木原庄左衛門の養女露とやら、こと  
し十八、確と、それか、本人あらためて申上げ  
い」

半まで擦げしまゝ、伏目勝に身を謹みて、  
流石に何となう含みながら、底に根ありて冴た  
る聲。

「仰せの露、十八になりまする」

「養女と申せば、生産の親ある筈、いづこのも  
のぢや」  
きくや否、すつと顔を振上げぬ。

「お上へ對しまして、ちと憚りある者の娘、その事ばかりは、たゞ仰の木原 庄左衛門の養女、それも子に貰はれましての養女で無う、世間體の養女分、厄介者の御扱を願はしう存じまする」

\* \* \*

江戸の奉行所ありし以來、こゝに始めて見る日も覺むるばかりの容色、生類憐愍の法令ありし以來、こゝに始めて女のあるまじき大膽の重罪人、加之も二十歳に足らぬ身の不思議に落着たる自然の體、おけて優しき中に凛々しく牙渡りし風情。

當の奉行、おもはず座を乗出しながら、その面體、ちつと見下しぬ。

「只今の一言、お上へ對して憚りあるものの娘とは、猶更ら聞捨にならぬぞ、役向に依て尋ぬる次第ぢや、ありのまゝ、神妙に申立てい」  
露女、さらぬも水際の立ちし天生の美に紅粉を粧ひし面、靜かに振上げぬ。

「木原庄左衛門が養女とあらば、生産の親ある筈、その者の名を言へ、との仰せに、致方もなう、恐れ多い事ながら、申上げます、父は先年、お取潰しになりました越後家の本國城代、荻田主馬、只今は八丈島の流人、その節、お

上、お帳面に同人娘、露、九歳と書止められまししたる筈、とやら、それが、さる縁で、木原庄左衛門に養はれまする身、落ちても流れても氏素性、さては父の子なり、まだ十八の女ながら、越路の雪と共に北國の名物、越後騷動お爲方の頭領、荻田が娘ぞと、奉行その他の一列、おもはず互ひに顔を見合せつつ、今更ら一入の花に匂ひの馨しき心地。

「その義を、お上へ對して恐れ多い者の娘と存じた心得方、いかにも殊勝に思ふぞ、但し今日、あらためて尋ぬる次第ぢや、先月十二日の夜、兩國橋を通行いたしたか」

「はい、通りかゝりまして」  
「その仰、天下御法度の、お犬を川中へ蹴落したとの事、覺あるか」

「さら／＼、さやうの事は」  
「ないか、否、ないと申しても、確とした證據はあるぞ、下司の種でもあるまい身ぢや、今更ら無用の陳じ立いたすは、却て、ためにならぬぞ」

「いかやうに、仰せられましても、さやうな、大それた事は、わけて只今も申上げました、お上へ對して恐れ多いものの娘、何として」  
「證據人の出ぬうち、出ぬうちが身に取つての、

事ぢやぞ」  
「その、證據人とやら、出ましての上、申上げまするほどならば、お手数も無う今のうち、なれど、身に覺のない事、存じませぬ事」

「やれ、聞分のない女、身のため哀憫に存じて、かくまで申聞けるに、さて知らぬとか、いよいよ存ぜぬとか、その夜、兩國橋に何事もなう、たゞ通行したと申しさるか」

露女、いさ／＼と咄渡る目を見開いて、雪の額越に奉行の面、そつと見上げぬ。

「何事もなう、たゞ通行したかと、仰せられましては」  
「むゝ覺があるか、申し直しを差許すぞあらためて聞取らずぞ」

「暮果てましての事、橋の上に何とやら人立、そつと身を避けて、通らう途端、おもはず足に踏いたもの」

「其の、その踏いたもの、いかなものぢや」  
「存じませぬ、女子のあられもない、不用意、夜の事ながら、ものに踏いて、それを人中に見返る事は、たゞ心愧で、前後の差別もなう足早に」

「その身が現在、足に踏いたもの、知らぬ筈はないぞ、そこぢや、申立てい」

「存じませぬ事」

「知らぬで済まぬぞ」

「存じませぬ事」

「や、そこまで、白狀しながら、知らぬとは、猶更の重罪になるぞ」

「存じませぬ事」

「もはや、存ぜぬで通らぬ場合ぢや」

「存じませぬ事」

「露、確と面を上げい」

露女、すらりと振上げし面、どこに一點の打たれし顔色もなく、さりとは不思議の天生、睡むる如く静肅に艶なり。

### 其十七

やうく十歳になりしばかりの一子を入間の拾物に等しく、八重の汐路を隔てゝ鳥も通はぬ水や空なる島陰へ遣りながら、生きて甲斐なき老の我が身を浮世の塵に取残しつゝ、御家人風情の根を求めて人しれぬ心の憂年月を送りしは何のため、たゞ主の形見を無事に育てあげし後、せめて女子は女子だけの世に出さんがため、また其のうちに赦免の一陽來復、主従父子が互ひの春に巡り逢はんとての事。

されば今こゝに自然の命數、醫藥の介抱にも佛神の加護にも盡果てし上の病死さへ、あきら

め難き凡夫の腸を裂かるゝに、まして何事ぞ、犬畜生一疋に可憐ら生涯を過まらせんとは、加之も其の畜生の死骸たゞ一箇の業にて、ことし十八の花の色香を現世からなる生地獄の底に落さんとは。

汐風の磯馴松に夢を破らるゝ曉も、酈所の月に悲情の浪に碎け寄る夕暮も、さては小夜の千鳥に枕を訪はるゝ寢覺勝にも、嘸や父心、いとゞ猶更ら忘れ玉はぬ息女の身を、この庄左衛門が譜代恩顧の家來として預かりながら、わけて九歳の春より十八の今まで幸ひに事なく育てあげながら、何と申譯の立つべきぞ、おのれ

が一子を入質にせしたため我が子を粗末にせしかと、いはれても思はれても、どこに一言それにはあらずといふ詭辨の立つべきぞ。

あれほど手強く老の膝を請寄せて諫めしかど、諫めし時は南無三寶、はや既に其の事ありし後、たゞ此の上は世上へ漏れざるやう、朝夕の神かけて念ぜし甲斐もなく、今更ら思はぬ不意に現れんとは。

されと現れし今更ら、現れぬ以前の事いかに悔やめばとて繰返せばとて、そもゝ何の業にかなるべき、さればとて他の事とは違ひ、固り天下の道理にあるまじき古今無類の今日、この

老の一命さし出すとも、取替のならざる悲しさは、たゞ徒らに手を束ねて其の成行を見るより外なし、とは思へども今こゝに手を束ねて此のまゝ見過しのならざる我、せめて鐵股より流れ出づる血汐の下に扶け出す道もがな。

扱その場は力にも及ばず涙にも及ばず、加之も慙か手足を動かして立騒ぐよりはと、おめおめ與力の手に渡して奉行所まで曳かせしが、もし今日の一夜たりとも獄屋の中に其のままならば、東天に啼渡る鶯の聲もろとも、一命にかけて、するだけの事せずには立たぬ庄左衛門。

あまりの堪難さ、あるにもあらぬ苦しき五臓六腑を絞らるゝ心地、思案の腕を組みつゝ、同じ家の内を歩みなから、其の一室の床の上、ふと何心なく見れば、そこになき筈の文胸をそこにありぬ。

もしやと開けば、果して延紙の端に露の色さへ急ぎしまゝの走り書。

罪なうて流人となるほどの父が子に生れし露の身の置どころ、いづれ浮世の葉蔭に消ゆべきものと思ひあきらめ候に、一日、みるや否、庄左衛門、おもはず座に抱付けて老の涙もろとも、咳さぬ。

「入らぬ事、さて」女性には入らぬ事何として斯まで世に未練氣なう、無益の涙々し氣に出来されたやら」

\* \* \*

はや日は暮果て、宵闇の空に星影さへなき折しも、土手三番町の本田内記が小門より立出でし人ありと見るや否、そつと背後に聲を潜めて呼ぶものあり。

「それへ行かれまするは、本田様の御家來で」

「や、誰ぢや」

「こりや幸ひ、その聲は、藤助殿でがな、本所割下水の木原、實は汝に内々、ちと依頼の義で、先刻より、これに」

「は、うゝゝもし御用とあらば白晝お玄關へ來られませ、この夜中、下郎の藤助つれに何の御用もない筈ぢや」

「さて其の、白晝お玄關へ出られぬ庄左衛門、今更後働いたして、汝まで、お謝罪、かたがた」

「六日の菖蒲、ちと遅いやうちやが、はて折角の事、あの一件は済だとして、その他に何の御用」

庄左衛門、薄闇ながら差寄て懷中より掴み出せし金子一包、かゝる下司への浮世この外

になしとや、づしりと重く藤助の袂へ落し込みぬ。

「氣にばし觸れな、こりや世間の常義理の通用と申して、頼むべきものより頼まるゝ方へ

の事ぢや、は、うゝゝさて藤助殿、其の後は御主人、いかう御立腹あらせられた筈、いづれ御機嫌を損じた中にも、この庄左衛門を何と仰せられた、今更ら面目も無う、厚顔な事ながら、もしや萬一あらためての申出やうで、お氣色を取戻す工夫、あるまいか」

藤助、おもはぬ袂の重量に五體の足場を取られて、いつしか心も口も輕う、庄左衛門の袖を曳きながら、本田家の屋敷を放れし辻の角まで誘ひ行きぬ。

「あらためての、申出やうとは、じたい何とせられます義で、いかにも主人は取別けて大の立腹、もはや、あの事に就ては、まづ返り咲の匂ひも無いげに見えますれど、そこは父子、まして若様は内心また格別の思召、は、うゝ幸ひ御意に叶うた藤助、随分、出直しの筋道次第で西へ向た御顔を束への工夫、分別、あるに仕てからが格、専一の御本人、まだ無事のまゝ御手許に居られまするか」

「や、實は、それに就て、猶更の内々」

「はて、其後いづれへか行かれました義で」

「まことに何と、申さうやうもない次第で、俄かの不意に、案外なところへ、なれど、當時、本田様の御全盛、もし呼戻して遣はさうと思召さば、さて強ち、出来ぬ事でもあるまいかと存じて、勿論、それ御恩に預かる以上、本人は固より、勿論、その庄左衛門、一命にかけて、お召使ひの下婢にさへ、差上げようの心體、ならば是非に、内々そつと」

藤助、暫時そのまゝの無言、いかに宵闇の小首を傾けしが、やがて一人の聲を潜めて庄左衛門の耳に口、何をか私語けば、もしや萬一それかと聞て來りし身ながら、現在こゝに正しく聞て今更の心地、はつと打驚きし體。

おのれ儲こそ、いよくそれかと、無念の悲憤に打震ふ細身を、ちつと兩の脚に踏躰へて血走

る眼も見えぬ宵闇を幸ひ、わざと四邊を憚る小聲。

「それならば、猶更の事、花の散らぬうち何卒、藤助、様ぢや、様ぢや」

其十八

いかに太平無事の新節道具に出来たる當世振の旗本とはいへ、もとは血の雨を兜の眉廂に凌ぎし三河武士の流れ、まして歴々衆と呼べる

る四千石取りの身、それかと思ふ我が身こそ世に連れて落果して老の心の浅ましさと取替たりしに、思ひきや口善悪なき下司は却て正直なる藤助の唇端より此の耳へ一言、正しく聞取りし現在の業をせし奴それならんとは。

言語通断、家にも名にも身分にも儲あるまじき卑劣の振舞、見下果たる小人の素根性おのれ其のまゝに置くべきかと思へど、さて暫時そのまゝに置かではならぬ無念さ、加之も其の怨敵の端くれ奴にまで宵闇の手を招り腰を屈めて、伏拜まんばかりに頼まずば立たぬ浮世の庄左衛門、もはや末なり武運さゝに盡果てたり。

されど我が一命さへ此の事に就ての用に立たばと、老の眼を皿にして死場所を探すほどの折柄、何の身の末も武運の果もあるべき、救出すべき本人さへ救出さば庄左衛門それで心に満足す折柄、我がための血を絞られし鬼にせよ蛇にせよ、拜までならぬ折柄、あとは浮世の萬事この鐵腕一箇で済むべき筈の折柄。

終夜そのまゝ寝もやらず、燈火の下に腕を組で總身を火水に責めかかるゝよりも堪へ難き苦しき、いかに男儼りの凛々しき健気に生れながらも、やう／＼今年こゝに十八の花よりも艶なる女の身として、夢にも得しならぬ獄卒の手に扱は

れ囚屋の中に嘔やと思へば、思ふほど猶更ら座にも堪りかねて、闇の夜深の庭に立出でつゝ、越路の空の氏神を専念に祈り明せし東天の頃、そつと門を叩く音。

さては我よりも金に約束の藤助め、前夜のうちに仕終せたかと、下女にさへ憚る忍び足の庭傳ひ、其のまゝ近く倚添うて門内よりの小聲。

「やれ待兼ねた、番町よりか」

門外には暫しの無言、そつと隙間より差覗けば、ほの／＼と明行く夏の空に見覺えの古編笠。

「や、村田殿か、三平殿か」

村田三平、夜露のまゝか朝露か、濕り勝なる笠越に門の扉を隔て、四邊を見廻しながら、息を吹き込むが如き聲。

「あの日、あのまゝ、行方も知れぬ他國の空へ立退た筈の奴が、うろ／＼と今日まで、まだこの江戸に彷徨うた仔細、そりや別に委しう、申さうが倍、ちらと聞及んで身の恥辱も面目も見返る違なう、馳付けて來た三平、露どの無事に居られまするか、幸ひ人の風聞に聞たが諺となれ鶴龜、居らるれば此のまゝ立去る男、もし、もしや萬々一、お手許に居られずば是非、是が非でも此の門あけて、この男を入れたらたい、

せめての御恩案相手にならうとて」

庄左衛門、そのまゝ門の扉を開いて、涙の片手に引入れぬ。

「かゝる折柄の事」

村田三平、古編笠に小動を打たせて、おもはず武者振ひの力足。

「もし眞實、それならば、たとひ鐵壁の底にありとも、救出す男は此奴、此奴ぢや、此奴ぢや」

\* \* \* \*

前後の今朝、まだ東天の露に門を叩くもの、番町よりの藤助と思ひの外、いづこを身の果か行方も知れぬ旅の空へ立出でし筈の村田三平とは、あまりの案外に木原庄左衛門、あつと驚きながら、はや委細を知つて來りし體に、いよいよ不審の眉もろも其のまゝ引入れぬ。

一室へ引入られし三平、今日こそ例の古編笠を脱でさらぬも虎狼の態大面に猶更ら難く大目玉。

「もはや再び來べき筈でなし、いかな事ありとも男一代、あの見苦しき醜態を曝け出して、あの俊しい情に見送られし以上、八幡、來たる筈でない男がおのれの恥辱も面目も顧みず、かく走付けたは前夜、ちらと小耳に聞た露どの

の事、いよ／＼其事、眞實ならば三平、生命ぢや、生命にかけて救ひ出さう」

「ようこそ、さて／＼芳志、さぞや本人も、但し貴方、まだ江戸に居られたとは存ぜぬ事じたい前後、いづこの、誰に聞かれて」

「實は其の後、あの日、あのまゝの足にて江戸出立の筈ながら、こゝは御推量に預りたい、さらぬも前々より尾羽うち枯して腰巾着は縫日の底まで秋風に吹抜かれし折柄、道中の古草鞋を拾うて其の日の御食にならば兎も角、まだ旅の乞食業にも馴れぬ身が、俄に的もなう踏出して他國の空の野倒死するよりはと、聊か武道の心得あるを俟俸、内々そつと歩を停めて江戸市中の端々、町道場を日毎に覗き歩いて不意の勝負を申込み、こゝに二日、彼處に三日、我れには未熟の藝ながら、さて太平の世には時に取ての業を賣物として、はゝゝ飯喰種に流れ渡りの代積古を頼まれ歩いた前夜、ある道場での噂、加之も其奴は奉行所の下役を勤むる奴とやら、はツと思はず耳を敬て、聞けば聞くほど正しく露どの」

「いかにも、それがため、きのふ一日、ゆうべ一夜、わけて我娘でもある事か、貴方には始てながら、實は大切の預り女を、加之も今日ま

で無事に育てあげし十八の花の曉、犬畜生の死骸一箇で」

「や、その事も其奴が我を忘れて、流石に氏素性は争はれぬものとの取沙汰、きけば北國の名物、越後の萩田家の息女でがな、猶更ら以て今は叶はぬ戀を仕遂げようでない村田三平、たゞ御見舞のみに参らぬ男ぢや」

「さりとして、餘の事とは違ひ」

「いや、外に助くる道あらば知らず、もし無くば此、この男に任せたい、いつまで推の木より送り落ちた三平ではない筈、腰うち抜した生涯、あの時ばかりの事」

木原庄左衛門、兩眼を閉ぢて差俯きながら腕を組みしが、やがて三平の耳に口、ソツと何とか私語けば、大の眼くわツと刮出して鐵拳に自己が膝を叩きぬ。

「やツ、あの木田奴が、むゝ諸は、あの判飾人形一」

庄左衛門、また更に聲を潜めて拵寄りぬ。

「こりや今こゝで、いはずともこの事ながら、きのふ、奉行所へ曳かるゝ時、わざと着替て、身に纏うたは、女の身に取つて浮沈の大瀬戸、いかな暗衣裳と思はるゝ、貴方が残された、あの生絹單衣の大模様ぢや」

きくや否、村田三平、骨太の首を締め鼻を鍛め齒を喰殺りつゝ、男泣の胸に迫りて堪へ兼ねし眼中より霞の如き粒涙、ぼろ／＼と虎髯に振落しぬ。

十八年の浮世を人に知られず吹出でし花の露、おもはぬ不意の嵐に逢うて、不祥ながら女生涯の大切なる晴着、また再び歸るやら歸らぬやら散際の色香、あはれ覺悟の心に曳れ行く時、わざ／＼着替て其の身に纏ひしは、この髯男が迷ひの種に染出して獨寐の夜な／＼夢うつゝの枕頭に添へし例の生絹單衣と聞くや否、さらぬも残る情の絲に纏まれし村田三平、もはや何の理由もなく、仔細もなく、たゞ腕を揺るがし、心地、見苦しくも六尺の大男が小兒の如く聲をあげて、おい／＼と泣出しぬ。

「さて／＼生れながら、自然と男の生命取に出来たる女、何たる優しい芳志ぞ、いかに其處まで借、しをらしう、や、却て惜いぞ、惜いぞ、あまりの惜さに猶更らの事、此のまゝでは濟まぬ三平ぢや、たとひ身の一大事は置ても、これ其のまゝには見過されぬ三平、わけて古今無類の白癡を盡した當時の禁令法度に何の恐れも憚りもあらうか、神も佛も入らぬぞ、みごと凡夫の

力で活地獄の底より掴み出して見ようわ、ついでに番町の方角へもおのれ一度は踏込で父子の奴等へ」

あとは唸るが如き聲もろとも、青筋の類越に天井の片隅を覗みあげながら、元來の微、もはや火水も鐵石も選ばぬ幕地に飛込まんばかりの猛勢、あまり薬の利き過ぎたる體に驚いて主人の庄左衛門また今更の心地おもはず摺寄つて聲を潛めぬ。

「かゝる折柄わけて、老の身の氣ばかり急て力に及ばぬ事、さるを幸ひ、貴方なればこそ、時に取つての千人力ぢや、なれど貴方の來られぬ前夜、無念ながら詮方もない浮世の方便に實は内々、そつと番町へ忍び行き、あの藤助といふ萬事それ心得顔の下郎へ本人を囑の密談、聊か喰はせ置いた義もあれば、兎も角も其の吉凶の定まるまで、うらみの敵と思へば猶更ら其奴の手より救出してこそ少しは小腹の癒もするかと、なれど萬一もし叶はずば、その時こそ千萬、たのみ入るは貴方一人」

三平、いよゝ大の眼を刮出しぬ。

「入らぬ事、それ入らぬ事、前夜は前夜そりや時に取つて浮世の方便とはいはいいへ、今朝は今朝、この男こゝへ斯く來合した以上に何の其

もはや入らざる小面倒ぢや、わけて下司下郎は口ほどに業のないもの、また囑は得て其まゝ敵に仕てやらるゝ恐れあり、かたゞ以て無用の沙汰、只この男の腕に任せたい、重ねて囑づるやうなれど、椎の木より迂り落ちた村田三平、あの時ばかりぢや、明日ともいはぬ現在、今夜のうちに救ひ出さう、や、掴み出さうでか鐵壁の底にありとも、但し救ひ出した上の隠れ場所これ專一、どこにせらるゝ、それさへ定まらば必ず今夜、よし定まらずとも、この男このまゝ今夜は過ぎぬ覺悟ぢや」

折しも人の門内へ入來りし足音、やがて女關の片傍より小聲に案内を乞ひしは例の藤助、それと聞くや否、庄左衛門、三平の耳に口を寄せながら、憤怒の満面いよゝ日鼻を割出して墨綽の連襟に似たる體を、壁一重隣席の彼方へ押遣りぬ。

\* \* \*

門内への足音、やがて聞えし藤助の聲に、壁一重隣室に押遣られし村田三平、いよゝ面白からぬ日鼻を割出しながら、みれば其の一室こそ、正しく彼女の居室に續いて折しも隔ての障子を開放したる夏の小座敷そつと差覗けば、あはれ主なき鏡臺の片隅へ押寄せたる淋しき、と

め木の匂を殘せし此方の吊衣桁には、引かれ行く時まで玉の肌を包みしか、檜扇の散し形を染ぬいたる大袖の帷子ばかりぞ掛け捨てられて、その下には生來まだ月下水神さへ手にも觸れざる朝夕の腰を我が物顔に纏ひ付きし紫絲の紐帯、つるりと音もなく、伏籠の影に迂り落ちたるまゝの風情、床の小傍に讀みかけし物の本を重ねて、蒔繪の手文庫に敷かれし和歌文字の反古紙ちらと見ゆる床しき懐かしき、今にも其の面影の現れ出づる心地、ありゝ目に浮べば、三平、おもはず居坐を正して、何とやら我が心に我が身を取づるが如く差解きぬ。

折しも壁一重を隔てし主人と藤助との聲に、はつと氣を取直して其の壁際に倚添ひつゝおのれ下郎奴、いかな返答するやら、その返答の次第に依つては其のまゝ歸せぬ奴、茲の主人の迷惑にならざるやう、かけぬけて途中に待受け、生死の境目まで引絞めて後の一工夫ありと、眼を閉ぢながら唇端を結び耳を欲て聞けば、互ひの小聲なれど手に取るが如し。

「勝手ながら一禮は後の事、終夜ら寝もせいで待明した身ぢや、首尾よう仕遂げて下されたか、但し萬一」

「いや、前夜お約束を申した手前、首尾が悪う

ては今朝、來られませぬ筈の藤助まつ十のもの  
七八まで」

「やれ満足、それは皆お手柄、いづれ重ねて御  
禮物いたさうが、委細いかやうの體でがな」  
「御存じの通り今日の場合、もはや主人は萬事  
を背にして横顔さへ向けられぬ大の立腹、連も  
の事ながら父子の情愛、わけて外に御兄弟も  
ない大切の一粒種また格別と心得、加之も本  
人の若様が人しれぬ内々の思召、實は兼てより  
承知の藤助、そつと此屋越の御枕頭へ這寄て、  
何となき世間談話の緒より手繰込で根のある  
ところを窺へば、さて戀は曲者、や、かうも容易  
う出来よう筈のない事が、出来ましたぞ、出来ま  
したぞ、おのれ家門にも恥ぢざる未練者との御  
叱咤を覺悟の身で、父上を動かして見ようとの  
御言葉、こりや正しく出来ましたぞ、まして當  
の御奉行は主人と年來入魂の間柄、その邊は申  
さいでもの事、地獄の底へも浮世の風が吹て通  
ふとやら、はゝゝゝ但し第一は藤助、そもゝ  
事の最初より最終まで引出されまする奴、もし  
萬一、首尾よう出来て後の間違あつては」  
「や、何として、あるにもあらぬ老の身が、  
わざ／＼お屋敷の門前を宵闇に彷徨て、内々お  
願ひ申したほどの事、本人さへ無事に出来ますれ

ば、是までの縁談は皆置、たとひ侍婢に召使は  
るゝと」

「確と、其事ならば返うて三日のうち、實は今  
日中に出来ずとも、明日中には必ず將あけて見  
るとの御言葉まで、承つて來た藤助」  
「やれ千萬お骨折、かたじけない、猶この上の  
事が専一、くれ／＼も頼み入りますぞ」  
壁一重の此方には村田三平、おもはず満面を  
鍛めて舌鼓を打鳴しぬ。

### 其十九

同じ地獄の底とはいへ、死して其のまゝ行く  
べき地獄の果でなく、生きて現世からなる地獄  
の沙汰、金の外にも浮世の通路ありて、さて  
も思はぬ隙間より引けば引かるゝ内々の操り  
録。

まして天下の嚴禁お大様を傷けたでなく殺し  
たでなく、たゞ通行に橋の上の死骸を川中へ  
蹴落したのみ事、加之も本人を見れば兼中に  
足をあげて路傍の小石一箇さへ蹴飛す段か、荒  
き風に堪へざる古今無類の美女が、今年やう  
やう十八の花の露、こぼるゝばかりの風情に差  
俯きながら、それとは知らず踵いて遁出せしと  
いふの外、あくまで何事も覺えず存じませぬの  
一點張を幸ひ、猶更ら奉行の手加減に三日目

の朝、あらためて呼出されぬ。

たとひ一夜たりとも汚らはしき牢獄の内に夢  
も結ばで待明せし身、どれほど男優りの凛々し  
き天生なりとも、女一代の生涯を浮沈の瀬戸  
際に抛込まれし身、いかに打悶れて花の色香も  
なく、もの哀れ氣に兩の目臉を泣腫せしかと思  
へば、引出されし露女、さて不思議や、鵲橋  
の標首にこそ二筋三筋の後れ毛はあれ、雪の額  
に塵も置かざる大前髪艶やかさ、いき／＼と  
張切りし黒目勝に臍も觸らず、わざとならぬ  
自然の態度、しつとりとして睡れる如く靜かに  
豊かに加之も猶更ら優に差控へし體、今更なが  
ら正しく名花一輪どこに元來それほどの膽魂  
あるかと疑はれぬ。

あつと思はず感に堪へし白洲の正面より、當  
の町奉行が一入の威儀を正せし聲、耳の根に響  
き渡りぬ。

「あらためて今日、調べ直すではないぞ引續い  
ての事ながら、格別の義を以て再度の白洲ぢや、  
露女をあげて其の夜の委細、この上お手数を  
煩はさぬやう、具さに確と申立てい」  
「あの夜の事、いかに仰せられませうとも、か  
ねて、申上げましただけの事、たゞ橋の上を暮  
果ましての人立、それを避けて通らう 途端、何

やら足に蹟いたものの外、女子のあられもない、大それた厳しい御法度と知りながら、さやうな恐れ多い事は――

「いよ／＼天下御禁制の物とも知らず、存ぜず只その脚下に蹟いたまゝ、狼狽て遁出すやうに去つたと申すか――」

「はい」

「但し露、それでない證據の現れた以上は、猶更ら以て罪が重いぞ」

「はい」

「その證據人の申立に依ては、拷問にかけろぞ」

「はい」

「大の毛腰男さへ悲鳴の聲もろとも白狀さすべきやうに出来た拷問道具ぢや、さるを其の方、その纖弱い身で、その拷問にかけられても、これまで申立てた義に確と相違ないか――」

「いかやうな、怖ろしい目に逢ひませうとも、その外に、申上げよう事のない露、この上は只、たゞ／＼身に取りましての、運命とやら、不東なれど、腹からの下司にも生れませぬもの、女子とて、父への手前、生命が惜しさに正體も無う取亂して、さら／＼其事でない事の、お受は致しかねまする」

優しけれど凛とした言葉の端々、半まで靜かに面をあけて、そつと奉行を額越の目元、四邊に人なきが如く、まじろぎもせず眞生面へ涙渡りぬ。

\* \* \*

いかに其の事を掌中に握れる町奉行の身なればとて、また多年入魂の本田家が内々そつと自己より事を發いた今更いかにけび内密の手を盡せばとて、みす／＼法を枉げし黑白轉倒の沙汰は力に及ばねど、幸ひ本人が顔にも姿にも似合はぬ不敵さに始終の言葉を変へず、たゞ暮果てし脚下に何やら蹟きしまゝ若き女の身空に慌てゝ立去りしといふの外、さらに一言も吐かざる折柄の手加減、いよ／＼天下の御禁制とも心附かず通行の急ぎ脚に過つて蹟き落せしといふ、それだけの事に定まりぬ。

されど息の音の通ひし人間の生命よりも、捨て處のない大畜生の死骸たゞ一箇が重く大切な不思議の世の中、いかで其のまゝの無事に済むべき。

たとひ通行の暮合に何物とも辨へざる前後忘却の過失にも致せ、斯まで厳し御布令物を女の身として脚下にかけし段、不屈の至極、本人の露は今後三年間市中往來差止の事、主人の

木原庄左衛門また油斷の罪輕からず今後一年間御家人の御扶持米取上の事、併して其の間の謹愼を申付くるぞと言渡されぬ。

俄に呼出されし庄左衛門、其の後また藤助より手柄顔に重ねて二度目の内通ありしかば、そつと町駕二挺を此方の辻に待たせ置きつゝ、露女を引渡されて奉行所の門前を立去るや否や物も得いはず眞一文字に宙を飛して走歸りぬ。

加之も其の町駕をまた我が家の此方なる辻に乗捨て、手を取らんばかりに半町あまりを急がせながら、今しも門内へ入らんとすれば、留守を頼みし村田三平、側の古編笠を面深に打被りての會釋振、さては人目を憚かりし出迎ひかと思ひの外、其のまゝに立去らんとする體、庄左衛門、慌てゝ引止めぬ。

「や、どれ／＼行かれる」

「もはや御暇いたす、かく無事に日出たう、歸られた上は用のない男、此方には兎も角この二日三日、せめて御心勞の月相手にもなりましたれど、さて露どのには再び晴れて面の合せぬ三平ぢや、御免なりませ」

庄左衛門、身の疲勞も忘れて訝かしげに眉を顰めし露女を振返りつゝ、これには仔細ある事まつ奥へと口早に促しながら、あとに残りて立

去らんとする三平の袖を放さず確と捉へぬ。

「それでは済まぬ、無事に歸ればとて、まだ御方に預かりたい事の山々、男と見込んでや」

「その男と、見込まれては猶更ら居るに居られず、立去るべき筈の三平、等越ながら、いかにも女生涯浮沈の境に、あの單衣を、身に纏はれた今その姿を現在、これにて見受けた三平、もはや此の上に浮世の希望はない、一代の得心、このまゝ後を濁さず立つ鳥のやうに御暇いたしたい、凡夫ぢや、わけての大白癡ぢや、この邊で此奴の分相應に出来たところ、また見苦しい愚に返らぬうち放されたい」

## 其二十

もし大の死敵と知て橋の上より川中へ蹴落せしといはゞ、それこそ忽ち一家身命にも及ぶべき筈の重罪ながら、たゞ暮果てし通行の脚下に何やら躓きし身の慌て、立去りしといふ、それだけの事に定まりて加之も當の奉行の手加減に案外の輕く扱はれし段が、怖ろしや本人に三年間の市中往來を差止められ、主人の木原庄左衛門また一年間の扶持米を取上げられて謹慎を申付けられしとは、さて、當時の天下政道、お大様の世の中なり。

されど固り人しれぬ仔細あつての江戸住居、

實は御家人の扶持米に露命を送る身ならねば、さして何の苦痛もなく、また三年の市中往來を差止められても、元來が晴がましう世間へ色香を誇る身でなく、ましてや往來の人に見返られて思はぬ玉の興を願ふ身でもなく、いはゞ却て折柄の傀儡、さらぬも第一は面留き番町の本田家に對して此の上もない當座の小盾ながら、ただ十八年の今日まで浮世の塵にさへ染まらず守育てし名花一輪を、わづかに三日なれど汚らはしき牢獄の内に繋がせし無念さ、心外さ、あはれ庄左衛門の胸裡には多年秘藏の珠玉を碎かれたる心地。

わけて本人の露女、かくと聞くや否、おもはず柳眉を逆立て、いかな惡漢無頼の徒輩さへ居縮むべき奉行所にも不出議や一滴の雫を浮べざりし目元、今更に涙を含んでの口惜しさ、洗ひ立の大前髪に恨みの漣を打たせて、それかと思ふ番町の方角、きつと物凄く振返りぬ。

女の身にあるまじき蓮葉の振舞なれど、男の身にあるまじき見苦しの場合を救はれながら、おのが戀路の叶はぬとて恩を仇なる卑怯の嫉妬に、鬼畜も悲慘と見るべき女一代の生涯を潰して退けんとは、いかに何と言葉にも外れて見下げ果てたる奴ぞ、まして一旦その地獄の底ま

で突落せし此の身をまた今更に引上げて動けぬ間の捕獲物にせんとは、八十氏川の流こゝに渦るゝとも、せめて弓矢神への恐れを思へかし、北國に名を得し萩田家の娘を賤しき賣色の遊女に等しう、おのれやれ身受證文とやらに巻込みしか、さても憎くや、あまりに物の冥加を知らぬ奴。

わづか四千石の家屋敷を太平の世の得意顔なる鼻頭に打かけて、歌舞伎の踊り子めいたる華客風流これ見よがしの體、その心根の見透て淺ましき父子のために引かるゝ我が身ならば、あの虎髯を喰反した素浪人の妻となりて、みごと生涯の貞女に則はるべき女とは知らざるか、我がために足を踏外して柵の木より下り落ちたるほどの哀れに優しき男、この露が思はぬ不意の災難と聞くと否、もはや再び來られぬ筈の五體を宙に飛ばして來るほどの哀れに優しき男、きけば獄屋に火をかけて炎焔の中より此の露を背負出さんとしほどの哀れに優しき男、それさへ八重の汐路の島陰を思へば、辛や良人にて持たぬ我が心の底とも知らで、何事ぞ、かくまでの戀と情を手鞠のやうに自己が掌中に掴み行かんとは。

いざや狼狽へて掴みに來よかし、ならば呵し

や何となる、女も女この露が一念の業、摘み行かれたし。

\* \* \*

花の色香の露、消えもやうで其のまゝ無事に立歸りし筈の後、わざと思はせぶりの二日を隔て、三日日の朝、例の藤助、もはや本所の割下水を我が物顔の體、空飛ぶ鳥は得落さねど、たしかに此處の本尊を片手の自由自在に持運ぶべき勢ひ、加ふも何は倍置まづ祝ひの盃に金封の一包は必ず添へらるゝ筈ぢやと、満面の笑もろとも鼻を竈めかして門内へ入れば、不思議や、今日こそと思ひし玄關口の戸は閉ぢたり。

眉を擧めて舌鼓を打鳴らしながら、案所口へ立ち入れば、生憎く飯炊の半婆々さへ居らで、この夏に納戸へ取合の障子まで閉切りぬ。

「や、居られまするか、番町より藤助、藤助、藤助で」

二三度の大聲に、やう／＼奥より出来りし庄左衛門、それと見るや否、わけて平常よりは俄の慍動さ。

「や、誰かと存じに、こりや外ならぬ人ぢや、何としても此のまゝには歸されぬ人ぢや、兎も角も一室へ」

周り外ならぬ筈、此のまゝ歸されてなるものと、藤助、はや自己が平生の分際を忘れし上風の奴、得意顔に打通りて四邊を見廻しながら、何を誘ひ出すやら俄に輕薄の空笑。

「はゝゝゝゝさて人の住家は自然に吉凶の器とやら、院に閉ぢられると、陽に開き直るとは格別の相違、はゝゝゝゝ」

「院が陽か、吉凶は倍置て御禮は御禮、あらためて早速、まかり出ます筈ながら、實は其事も叶はぬ今日の庄左衛門、幸ひの折柄、何卒御主人へ宜しく傳へて下されたい」

「いや勿論、她才なう傳へも致しますが、是非とも一應、御當來より來られませいで、折角の念が居かぬやうで、第一この藤助が根插みの立往生、はゝゝゝゝ」

「なれど、それが出来ぬ庄左衛門とは御主人、既に御存じあらせらるゝ筈ぢや、幸ひ本人は其のまゝ無事に出来ましたれど今後三年間は市中の往來を差止められて一室へ引籠りの身、また我等は一年間の御扶持米を召上げられて、加之も其の間は謹慎を申渡された身、つまり庄左衛門は心ならずも一年間の御無沙汰、これ何と致方のない事、まして本人は今年が十八歳、すれば二十一の晩まで九三年の間、いかな事ある

にせいで門前一步も叶はぬ哀れの身となりました以上、心外ながら、例の内談、お約束の義は當分まつ」

藤助、あつと驚きながら、いよく手柄の上盛こゝぞと思ふ顔色、俄に膝を進めて膝を潛めぬ。

「藤助、それ承るは今こゝに始めて、また若様も今朝まで、この藤助へ何とも仰せられぬ事ながら、いかにも御言葉、主人が存じられいならぬ筈とあれば、や、さほど御心配に及びませぬぞ、一應は御公儀の表面、それにも致せ、いづれ其のうち、また重ねて寛悠な御沙汰のあらう事ついては近日、こりや却て御當家のため、餘所ながら内々そつと若様の御供いたして何となく、伺ひましたい、すれば翁更ら一時も早く根を固めて、お互ひに御安堵のなる道理」

「や、さりとて、今かゝる折柄、さやうの義は第一お上への恐れ、何事にも遠慮いたさいで

は」

「お言葉なれど、浮世の萬事こゝが世間體の表と人情の裏道、はゝゝゝゝまして御謹慎中の身が出らゝでなし、外より不意に立寄る客來の事、お茶一服の手前に暫時の雑談が何の、はゝゝゝゝ」

## 後 編

## 其 一

露女は三年の市中往來を差止められ、庄左衛門は一年間の謹慎を申渡されし折柄、身に取ては生涯の無念ながら、幸ひ時に取ては番町へは小唐の上なしと思ひの外、その小唐を押倒して一日の書過、内々そつと訪ひ來りしは本田小一郎。

わけて今日は、一入の華客全盛に當世様の風流を盡せし衆衆、はや人しれぬ我が總路に通ふ心地、加之も浮世の裏道傳ひに結句これが面白う興ありげの體、まして蕪事を自己一人が心得顔の藤助に案内させて、閉切りし玄關の此方、わざと臺所の入口に得ならぬ隠し梅花の肌着を匂はせつゝ、府の世帯道具を差覗いて物めづらし氣に立てる風情、猶更ら際立ちて優なれど、あたは妖艶たる好意こゝには却て色を賣る若葉の野郎隋子にも劣れり。

主人の目左衛門、それと見て今更の當惑、おもはず満面を鐵めながら、さて「當世振の我がまゝ、生育は毛腰の下司根性よりも無作法千萬、容姿にも風情にも似合ぬ厚顔な奴ぞと思へど、此のまゝ門外へ押出しなれば、まづ藤

助に入室へ案内させつゝ、その身は奥に入りて露女の耳に口、かくと私語さぬ。

露女、さらぬも口惜しく腹立しき今日この頃、その番町の本田家より恩を仇なる押掛け戀の飾り人形奴が、びらり、しやらり、歌舞伎めいて來りしと聞かぬや否、いと猶更ら胸の張裂く心地、讀かけし物の本を、ばたりと音すばかりに閉ぢて、凜々しき目元に庄左衛門への小聲。

「いづれ此の身を、この身に、何やら用ありげの人、今日、逢はいでは、また來よう筈の人、なまなか隠れて、いつまで好かぬ思ひに惱まされうよりは、晴々しう逢うて、いふだけの事いはせも仕、いふだけの事、言ひも仕たい氣」

「や、それに仕てからが儲、うかとせられぬ相手、わけて斯る事に世間しらずの我がまゝ、三昧に出来たらしい奴、もし萬一、おもはぬ言葉質を取られて、この上に後日の迷惑を重ねては」

「もし言葉質とやら、取て用に立つならば、此方よりこそ、何の、男らしうもない心根の見透た人、うか／＼仕てやられうぞ」  
「なれど元來お氣性、また餘り過ぎては却て、只逢ひなされた上、それとなく其の場に當らず

觸らず」

「ほゝゝ、同じうは、あの三平殿、こゝに居らせたい事、ほゝゝゝ」

「いかにも、見た目は黒白の相違、美醜の一對ながら、うまれついて人の氣心は倍々格別なもの、あのまゝ袖を振切て門前より立去たまゝ、どこに居らるゝやら、今日これへ押掛けての人、に比べて猶更の哀れぢや、この邊で此奴の分相應に出来たところ、また見苦しい愚に返らぬうち放してくれとて、あの古編笠を脱ぎも得せで其のまゝ遁出した體」

「あれ、もう言はぬ事、それよりは、今日これへの人、この身に何といふやら、聞きたい」

## 其 二

固り太平の夢に育ちて浮世を火宅の俗とも知らぬ全盛の祇園生育、華奢風流の當世振の上にあるまじき物の雲加を盡して、かくし梅花の肌着に四邊を濡じながら、鶴籠袴に二つ折の大髷を小枕高く巻立て、縁の角前髪に向はせたる本田小一郎、藤助を背後に従へ主人の庄左衛門に案内されつゝ、すつと奥の小座敷に入來りし風情、此のごろの世上に三國無雙の美男と唄はるゝ芳澤あやめ水木辰之丞が歌舞伎姿の一枚給にも立勝りぬ。

てもく、淺草の山門にて其の時もありわ  
 けて我れよりの戀には猶更ら脆き習慣、加之も  
 現在これほどの花を姫始の風に散らさんとせし  
 心の咎め、はツと思はず狼狽ながら、此方より見  
 遣りて赤らむ顔々横にきすすべき筈の身が、彼方  
 より見られて我れしらず羞俯きし小一郎、其の  
 まゝ、無言の體に主人の庄左衛門、さてこそと日  
 を欲つればさらぬも萬事この場の藤助、たまら  
 ず膝を進めて露女の方へ追従の輕薄笑聲。  
 「お目にかゝりまするは、これで二度目ながら、  
 さてく何かの御縁あればこそ今日また、かや  
 うに主人の供いたして、これへ出まするほどの  
 事、はゝゝ以後は猶更ら以て一入お心易う、

おのれが身みの分ぶん際さいも顧かへみず、たゞ一人この場  
を取持と顔かほに饒舌なりづ立つる藤助とうすけの顔かほ、じろりと横目  
に引近ひきぢかりし露女ろにょ、坐ましたるまゝの小膝こひざも動かさ  
ず、もの靜かなる聲こゑを含みつゝ打笑うちわらひぬ。

「どこで御修行なされましたや、水車のやうに軽<sup>おろ</sup>く御口が廻る事、もしあの淺草の山門で、それほどお手が廻れば、女子のあられもない、蓮葉に出ませいでも濟んだもの、ほゝゝゝゝ」

出過ぎた眞向を一本、まゐられし藤助、あつと采れし頭上より、また隙間もない重ね打ちの二本目。

「折角の併せなれど、女子の出まじい場所へ男  
めいて出ますほどの片輪もの、女子の身に知  
らいでならぬ諸事お茶の道には却て此の上も  
ない不訓法もの、あの道具は當世様の膳様が御  
腰の紐飾りと同じ事、たい人目ばかりで、ほゝ  
ほゝ」

「儲かう見受けたところ、お年は互ひに同じ十八と十八、手前主人の事を申すやうなれど、まづ物の比喩が世間の風聞、水の滴るかと思はれる美男で、貴嬢様は勿論、いはずとも比類とあらう筈のない花の露、今にも滾れるかと存じまする御美質、や、古今あるまじい一對の存じでござる、内裡縁が出来たぞ、は、は、は、あまり出来過ぎた情縁の神業、こりや逆も浮世の人間業でなからぬ事、いづれ斯うなるべき筈の御縁でがな、は、は、は、」

きくや否、今まで風なき花の如く、身動きも  
せざりし露女、おもはず小膝を主従の間に向け  
直して、きりくんと柳眉を釣上げながら、さも  
口惜しげに物凄う、輝くばかりの黒目勝、いと  
どや渡りぬ。

「そんな奴衆、何といはれましたやら、もし聞  
違うては濟まぬ事、今一度その口で」

「は、いづれか、只今の言葉お氣に觸りまし  
て」

「さのみ氣には、觸りませいで、女子一代、  
生涯の身に觸りましたぞ、これに居られます

御人、どれほど麻々の御大身を父御様に持た  
れた御子息なら存せねど、それをいへば、この

露も、今こそ流人ながら北國の越後家に唄はれ  
ました三萬石の萩田主馬が一人娘、武門に恥ぢ

ぬだけの事を仕て退けて配所の月に伴はるゝ父  
を持ちました身、また縁あれば、あるべき筈の

縁さへあれば、否、氣心にさへ合へば、いづ  
れ男に連添ふべき女子の行末、たとひ片日月輪

の人でも、いかに落魄れて、草葉の口陰に住ま  
ふ人でも男は男、まして當世様の華氣風流に

見れば見るほど猶更らの御全盛へ、何の勿體な  
い、なれど今この露が身に取りますてはその御

全盛、いやな事、その當世様の華氣振、すかぬ  
事、それを似合うた夫婦雛とは、きくも忌はし

い事、その用のみで來られました御主従なれば、  
片時は偕置て、ちらとも逢ひませぬ等、第一は

御存じあるか、ないかは知らねど、ふとした事  
の起因で、三年の間、市中へ差止められました

引籠りの身、この主人も連れて一年の間は  
謹慎中の身、なればこそ、奴衆、汝、無事に

歸られまするぞや、まだ二十歳に足らぬ女子と  
思つて、世の中うかとなされては危い事、危い

事、ほゝ、身のほど知らぬ人の情も大膽さ、  
ほゝゝゝ」

すつと座を起ちて、かど島田を繋結びに懸け  
たる跳元結の鳴髻、やゝ打仰いで後を見向きも

やらず其のまゝの風情、彼方の一室へ明月の雲  
に入るが如し。

### 其 三

川一重を隔て、江戸と奥州街道の境目、橋を  
渡ると波らぬが都の空と旅の空、その千住の宿

外れに履古せし草鞋を捨てても得やらで這込む  
どの奴、いづれ浮世の落武者を掻集めし一夜の

宿、どここの馬の骨やら牛の骨やら一連託生の木  
枕を並べて、はや夏の名は過ぎながら残る暑さ

に夜は猶更ら寝られぬまゝの語り草、おのゝ  
身上談話を聞けば偕、あはれ今の境涯より劣れ

る昔は一人もなし。

「かう見えても千兩の角屋敷を物の見事に潰し  
て來たもの、春は花、秋は月、それに色戀とい

ふ味を取添て、我も昔は男山ぢや」

「や、これでも野原でない、あたり近所の小耳

に觸るぞ、くわツと仕て來た昔の男が汝、一  
人か」

「さうとも、どこに腹からの木枕で首骨の馴れ  
た奴がある、いかにも其奴、ちと口の幅が廣過

ぎるぞ」

「落つれば同じ谷川の水ぢや、雪でも霜でも水  
でも、今更いて返らぬ昔の喧嘩まづ偕置いて、

固うなるより和かう、解けて流したく」

「それこそ話せる奴、といて流せとは、面白い  
ぞ、おもしろいぞ」

「いや、あまり流し過ぎて一竿の水氣もないほ  
ど川底の乾いた男一疋、これに罷り在る、さう

とては現在に生きて居る以上、少しの用意は入  
るぞよ」

「はゝゝゝその用意も偕、その身の運次第ぢや、  
どれほど踏占めて用心堅固に住てからが、この

木枕宿へ落込む奴は落込む奴、たゞ早いか遅い  
かの事、して見れば浮世、ある時あるだけに仕

てやるが却て心残りもあるまい」

「身代水の餘滴を流す流さぬは偕置て、いかに  
も人間その運次第ぢや、みすゝ手に取つたや

うな出世の運も、わづかの隙間から此奴、つる  
りと通足早の早いには驚くぞ、はゝゝゝ加之も聞  
けば今夜の同行一列、いづれも斯うなるだけ

折しも火影さへ届かぬ片隅より、むく／＼と  
起直りし大男  
「や、藤助、異なところで落合うたぞ、例の古  
綱笠ぢや」  
村田三平、ぬツと虎髯の盤大面に大眼玉を剥  
出せば、藤助、アツと驚いて、蝗の如く飛上  
りぬ。

川一重と橋一條ながら、江戸の繁華を離れて

「や、藤助、あの番町で手柄顔する奴ならば、  
幸ひの落合場處ちや、その分では善置かぬが、  
餘所ながら聞た今の愁歎談話で許す段か、は、  
は、ちと物の哀れを催したぞ、兎も角こゝまで  
轉げて來い、木枕を立てて夜と共に語り明さ  
う、また汝の改心次第、事と品に依ては随分こ  
の三平の家来に召使つてやらぬものでもない、  
戀を取持掛うた代りに生命を取るやうな男でな  
いだ、は、は、は、」

け、おれ、  
 家來に召使うてやるとの一言に、おもはず吹き  
 出したが、もはや番町を立去りし上は何の恐  
 るゝ事もなしと、其のまゝ、自己が木枕を提げて  
 火影も届かぬ片隅へ還ひ行けば、三平、さても  
 今は心に一物の蟬りもない男、からくと  
 高く笑ひぬ。  
 「いよく叩き出されたな、はゝゝ、面白い、  
 おもしろい」

「もし首尾よく取持てば下郎で居らぬ奴そりや  
 自業自得ぢや、なれど番町の父子奴また餘り  
 に無慈悲な奴ぢや、出来ぬ事は誰が手に何とし  
 て出来ぬ筈、せめて破れかぶれの刃物三味を  
 當の相手にでもする事か、それを門達ひに散々  
 追使うた自己の家来へ斬るの、突くのと、今  
 時の知行取それほどの價值ぢや、はゝゝゝ」

「如斯なりましての今、申すやうなれど思へば貴方へも、第一あの割下水へも、済まぬ事を致しました」

「もはや過ぎた事、そりや儲けて、あの割下水  
その後いよ／＼無事の體か、何の變りも無う暮  
して居らるゝか」  
「居られます」  
實は今日より十四日以前、

内々そつと若主人を誘ひ出してあの本尊へ逢はせました節」

「何、逢はしたとは」

「はゝゝゝたゞ顔と顔だけの事、加之も其の顔と顔だけが一つ桶に水と油を注混ぜたやうで、あまりの事に見兼ねた藤助め、ついたりに過

ぎました口が禍の基となり、あの本尊、あの美しい、あの優しげな、あの畫に描いても及ばぬ花の顔が猶更ら俄に物凄う、さらぬも氣位に取押がれた若主人へ對うて、ようも、あれほどに淀まず、さわやかに手厳しう、わけて大膽に、いはれました事、それが藤助の行届かぬ落度となり、大切な子息を自己の身勝手に誘ひ出して生涯の恥辱を與へたとの言下に二尺八寸の業物、びかりと目の前へ、や、生命からんで、今年の給金も半分そのまゝ置去に」

三平、むくりと起直つて、腕を組みながら大額を振立てぬ。

「むゝ出来されたな、今年まだ十八の女でこそあれ、いよくこゝぞと思ふ場合には、それほど事、あらう筈の氣性ぢや、ようぞ藤助、癖の脚で目の玉を突かれなんだ、はゝゝゝゝゝゝ」

## 其四

鶏の聲もろとも東天の空、街道馬の鈴の音に夜は明放れて、千住の朝ぼらけに木枕宿の門口、ぶらりと立出でしは古編笠の村田三平と無一文の藤助。

「や、世に落ちても腹は空いてもかうした朝景色の心持、得も言はれぬぞ、ふしぎの縁で異なるところへ宿り合したるが、藤助、諸これから何處へ行く」

「どことて、丸裸一貫の身空、兎も角も今日までは、持合せの鳥目で露命を繋ぎましたもの、前夜が當分まづ屋根の下の寝終焉かと心得ます、番町界隈の屋敷町には從來の友達申度もあるぞ、諸あの方角は一切禁物」

「はゝゝゝ哀れな音を吹く奴ぢや、さらば三平、助けて取らさうか」

「それ叶ひますればなれど貴方とて、前々より存じます御境涯、わけて今日このごろは」

「や、おのれ下郎の叩き出されとは違ふぞ、破れても枯れても元は千石取の侍浪人ぢや、天井の節穴を數へて居ればこそ、腰巾着の底の縫目まで人に差覗かるゝが、いざ歩いて動いて五體を世上へ運び出せば、みごと腕一本で氣樂に世を渡る男、はゝゝゝもし今この身に其の業ありと見て藤助何と思ふぞ、無遠慮に中て、見い」

「はゝゝゝ差當り只今 見受けましたところ、勿論、お主持でなし、また餘り窺ひ過ぎますれど、お金持でなし、家はなし、身に御衆族はなし、算帳の道には固り不似合の第一、萬事の優しき風流沙汰の業には御不得手のやうなり、六尺に近い骨太の御體格、自然の武者振に

出来ました御顔色、もし萬一これが人なき山中ででも不意の宵闇に御出逢ひ申せば、それこそ、はゝゝゝゝゝゝ」

「や、此奴、胴巻の用心でも、せずばならぬと吐すか」

「なかゝゝ以て、さやうの義では、なれど白晝この江戸市中では、はて何が、お手馴れて在らせられますやら、藤助風情いかやうに考へましても、厭さへ取れませぬ事」

「なるほど武家とはいへ太平の餘徳で、夢のやうに其の目を送る屋敷へ奉公した奴ぢや、この三平を其處まで數へ立てながら、さて心付かぬとは案外、目の届かぬ奴、まづ兎も角も今日の一日だけ供を仕て来い、身一個ならば身一個だけの移ぎ鹽梅、また二人分となれば二人分の働きの合、はゝゝゝゝゝゝ」

「何かは存じませず、それほど御重寶な御便利な業お持ちなされて、勿體ない、何として、あの千住の木枕宿へ、あらためて藤助、御家來分となりまして上、いづれへか相應の御屋敷を」

「はゝゝゝ古編笠一介を身代として三平の御屋敷に、戀を取持損ねて叩き出された裸下郎の藤助が御家來それ面白からうはゝゝゝゝゝゝいや随分、持つまいものでもない、まづ今日の稼ぎ工

合あひを見みせてからの相談さうだんぢや、はゝゝゝゝゝ」

其五

戀の道には脆く正體を失うて、宵闇の椎の  
木より泣き落ちるほどの男、また自己の心  
迷ひに染出せし生絹單衣を女一代の晴着にせら  
れしとて、おい／＼聲をあげて泣くほどの男な  
れど、さて武道の業には天下泰平の當時、いづ  
この敵にも劣らぬ一流の村田三平、江戸市中の  
町道場を旗り歩いて、木太刀の習するところに  
さへ腕一本を差出せば、六尺の五體そのまゝ飢  
ず凍えぬ自然の男に出来たり。

虎豹を喰反して大日玉の色まッ黒なる面がまへ、尾をうち枯して古羅笠一介の身空、のそりとして相手かまはずに勝負を申込む體最初のうちは轉取強盜も仕兼ねまじき妙と見られしが、さて腕は兎事に冴たり、氣心は正直一途なり、元來が無慾なり、また萬事無愛嬌の中に物の根本を辨へて、いづこの道場にも持主の師匠と門下第一の高弟とを破らず、加之も門外より不意に飛込來る他流の敵に出逢はゞ、自己その道場の盾となりて一歩も退かぬ猛勢に、果は諸方より珍客の如く日を争つて招かれつゝ、到るところ渡り先生と呼ばれて其の日々の代藉方を頼まれぬ。

わけて利慾の念に薄き男、かくまでも重寶が  
られて諸方に持囃されながら、自己その日の食  
さへあれば其の日の事こゝに足りし體、頗に  
引止められても夕暮の燈火を見れば一夜の宿  
錢を乞ひしまゝ、飄然と立出て更に歩を停め  
ぬ體、あまり編笠の古びたればといふものあれ  
ど、破るゝまでは我がために雨露の恩これを今  
更捨つるに忍びずとて放さず、それとなく着類  
を新調せんとといふものあれど、いや秋風に格入  
用の節こそ芳志に預らんとて其のまゝ垢染み  
たる單衣一枚、たゞ酒のみは元來の好物いつ  
にても辭退せず、さりとて飲むだけ飲めば陶然  
として其の場を立くる體、清淨潔白、天眞爛  
漫、げに青竹を割りしが如き男振に、いよゝ  
諸方より珍重されつゝ、漢り先生の名ますゝ  
高くなりぬ。

かほどの男とも思ふ筈なき例の藤助、おもは  
ず流れ込で落ち合ひし千佳の木枕宿より、今は  
此奴こゝに丸裸一貫の立寄る影もなければこ  
そ、すご／＼三平の背後に従うて其の日まづ本  
郷神田の町道場七八軒を廻りしが、いたるところ  
の待遇振、いづれも先生々々立たられて、  
加之も木太刀一本を手に持てば、のつそりと脉  
の病めるが如き男、忽ち飛鳥の如き活動を見る

や否、藤助、あつと呆れて横手を拍ち、はつと驚いて恐れ入りぬ。

三平、また藤助を見返りて、いたるところの道場に此奴これ拙者が昔の家來、ふと出逢うて斯の落魄の身に附纏はれますと笑へば、やれ主従よくの深い御縁ぢやとて、飯も酒もあり、二人分、その夜の宿錢まで二人分、別に藤助の袂へ内々の心付を投込む者さへあれば、さらさらぬも家外の舌を巻たる藤助、まして外に倚る邊もない今日この頃の藤助、自己が額を平手に受けて高く叩いて雀躍したが、いよく大先生お屋敷なうては差つめ此奴このまゝ改めて御家來と叫び出しぬ。

其六

まつち山夕こえくれば麓のすみだ川原にひ  
とりかもねん、その待乳山の麓、その隈田川の  
邊、水を隔てて麓の景色を竹の志越といへば、  
どれほど優しき風流の住家かと思ふと、實は街  
道の馬竈に匂ふ千住道と泥舟を繋ぐ橋場道との  
落合ふ境目、西は日本堤の非人小屋に近く、北  
は今戸つゞきの××町に近く、山の宿に鄰りて  
浅草田町の東、この江戸繁昌の市中ながら、名  
さへ聞かぬいて遠分といふ。

この追分の加<sup>おひかり</sup>之<sup>しか</sup>も裏屋住居<sup>うらやすまひ</sup>、出<sup>で</sup>るにも入<sup>い</sup>るに

も一方口の箸函に等しく、その底の行止りに脂は破れ柱は傾いて、雨漏る板屋根の小借屋こそ、近ごろ浮世に構へし村田三平の御屋敷、例の藤助いよく返忠の御家来となりて、主従ここに二人の男世帯、土鍋飯に朝夕の腹を膨らせつゝ、焼鹽を掴んで舌鼓を打鳴しぬ。

今日も下谷の町道場を三四軒の渡り先生、はや夕暮の點燈頃、ぶらりと歸り來りて、三尺の片戸口に六尺の大兵を横へつゝ入るや否、四逆かまはぬ破鏡の大聲。

「藤助、今夜の米は何うちや、炊置の冷飯でもあるか」

家老用人若黨下郎に女房役まで兼ねての藤助、はつと出迎ふべき玄關も奥の室も其の身そのまゝ、そこに居坐りて前後に首さへ捻れば埒のあく氣樂さ。

「や、御歸宅なされませ、米は生憎、なれど炊置は飯櫃に半分以上、幸ひ茶も熱し、召ししまするか」

「いや、今日は或道場主の誕生日とやらで、おもふまゝ祝ひ酒の振舞に逢うて來た腹この上に入らぬぞ、たゞ汝の喰ふ飯あるかといふのぢや」

「こりや過分の思召、藤助一人ならば、たしか

に明日の晝まで」

「まづ天下泰平ぢや、はゝゝゝ明日になれば明日また三四日の兵糧代を持つて歸るぞ、や、渡れば渡る世の中、この分で行けば當分二人の生命に別條はあるまい、さして用のある生命でなうても、面白い捨場所のない以上、自然の壽命を待たうか藤助、はゝゝゝ」

まだ捨てても得やらぬ古編笠を柱に懸けて、こればかりは尾羽うち相せど流石に男、柄縁の端も毛立たぬ大小そつと片隅に立寄せつゝ、藤助の汲出す蘆茶を一口、其のまゝ身を横へて荒土の喰出でし竹簀子の天井を打仰ぎながら、さも心地よげに手足の筋骨を差伸しぬ。

「はゝゝゝ人が住めばこそ、家ぢや、犬が棲めば大小屋、いや、此のごろの大畜生め、ふしぎの世中に逢うて我等よりは遙の全盛を極め居るぞ、犬といへば藤助、あの割下水、その後どう暮して居らるゝやら、もはや戀でも情でもない、そりや捨てた、思ひ切つた、みごとに捨てて退けた男ながら、たゞ何となう、さて氣にかかる人々、辛いぞよ藤助、これ語るは幸ひ汝ばかりや、近う寄れ」

追分の裏屋住居に反古張の行燈、ぼつと薄闇き火影に、村田三平、他の誕生に出逢ひし振舞

酒の酔心地、臥枕の身を横たへながら、藤助に對うて辛いぞ諦めても忘れても凡夫煩惱、これ語るは汝の外なし、せめてもの思ひやりに聞けとの言葉。

「もはや戀でなし情でなし、また元來の思もなし義理もなし、猶更ら以て固より由緒もなし縁もなし、第一は今後さらに一切いかなことあらうとも再び訪はぬ覺悟、それで不思議や大切な品を他に預けたかのやう、絶えず朝夕の氣にかゝり心にも忘れぬは、藤助、こりや何といふものぢや」

やうく炊き置きの冷飯に焼鹽の茶漬腹、まだ片手に箸も放さぬ藤助、おもはず満面を皺めながらの苦笑。

「はゝゝゝ白癡が不意に禪宗の難題を懸けられましたが同じ事、わけて御本人の貴方様、それほど萬事、あきらかに御得心の上で解せぬ事が何として、範圍外の藤助に」

「いや、この事はかりは範圍外の藤助と云はさぬぞ、随分、をりゝゝは本人の我等よりも阿太う大膽に深入して、おのれ一人が手柄顔に業を仕た奴、今更この返答が出來ぬで済むか」

「やれ御無體な、これが番町の本人で、もあれば倍々浮世知らずの我儘生育、まだ十八の角前髪

相應の事と受けまされど、鬼も蛇も踏潰すやうな三十男の唐都を生きた貴方様が、はゝゝゝなれど戀といふ奴、いかにも恐ろしい曲者、こりや連も人間業では退治の出来ぬものかと心得まする」

「む、僕は此奴、無念ながら、やはり戀と見えるな、まだ其の曲者を取て抛捨てた身でもないか」

「まづ戀の外、とも申上げ兼ねまするやうで、なか／＼その曲者、さう容易う、ころ／＼と手毬のやうには、まゐりませぬ奴で、はゝゝゝ」

「や、戀ならば戀に仕て置け、但し藤助、あの柳島での三平は知らず、もはや今日こゝでの三平、ものの見事に抛出す事は出来ぬにせい、やはか見苦しい組敷かれては居らぬ筈ぢや」

「いはれませずとも、その邊は萬々、さうとは存じますが、さて其奴その曲者、いや、あの割下水の本筋、ふしぎと番町よりも何とな案外の貴方様へ、申さば風情ありげの體、こりや番町を迫出された今この藤助の追従口ではなく、實は迫出されぬ前々より藤助の目で確かに見届けました事、わけて片相手の番町は先日、顔と顔とを真正面に差向けながら現在、あれ程手強う跳飛されました折柄、こゝは残る片相手

の貴方様、さう早合點に御遠慮なされずとも、随分また滑出す船の櫓拍子と櫓の取令で、つゝ其處へ港の見えぬとも限らぬ事、いかやうな順風が吹いて來ようも知れぬ空模様、はゝゝゝ一番この藤助も出汐を變へて、また乗出した心地が致しまするぞ、はゝゝゝ」

「や、此奴め、まだ懲りもせいで、そろ／＼今度は三平を浮かしかゝつたな、もし此處を叩き出された曉は汝、どこへ行く、はゝゝゝ」

### 其七

土手三番町の本田内記が玄關の真正面へ、これで三度目の村田三平、のそりと現れて例の古編笠を片手に垢染みたる着流しのまゝ無遠慮の大聲。

「これは今日、始めて何うたものでもない、但し御主人へは連も御面會の出来ぬ段を承知の上で推参いたした、また天下の直參衆として素浪人への扱ひ振、玄關拂ひ門前拂ひといふ御便利なる御勝手もあらうが、それでは却て御當家のため、ちと宜しからぬ義を抱へた男、せめて御用人衆へ御意を待たい」  
折しも主人の内記は登城中、さりとして一子小一郎は部屋住の身、わけて其の後は人にも得逢はぬ半病人の體、加之も門前拂ひ玄關拂ひ

の口上まで自己より添て來るほどの奴、いかにも始めてでない奴、ましてや當家のため宜しからぬ義を抱へて來た男といへば、其のまゝ叩き出されぬ奴と、用人格の半白老爺、しぶしぶ内玄關より自己が一室へ呼入れぬ。

「主人義は只今不在中ながら、始めて來られたでもなく、また用人へとの御言葉に依つて、お逢ひ申す、もし御用あらば萬事お手短かに承る」

三平、玄關での言葉にも似合はず、わざと慇懃に禮を正しぬ。

「は、仰せに従ひ、無用の御挨拶は留置て、今日これへ推参の當用のみ、御當家に、藤助といふ、お召使ひ」

「や、その藤助、あれは多年、奉公いたしました者ながら、先日、不調法の次第で、出介せしまゝ當時いづれに居りまするやら」

「いかやうな不調法で、多年の奉公人お暇になりましたか」

「そりや主人、ぢき／＼の事で」

「實は藤助、只今、拙者方に」

「む、貴方に」

「それに就て伺ひました次第、不調法は不調法に致せ、出介は出介に致せ、拙者あらため

て召使ひまする以上、あの者に御當家よりの御差構、あられますまいか、念のため此の義を一應」

「實は、お手討にも相なるべき筈のところを、運よく遁出したほど、次第ながら、士分でもあれば兎も角、また主人の心體、其の後のかやうかは存じませぬと、結局は取るに足らざる下司の身でもあり、且また、はや郎に他家へ奉公済の上は、さしての事も、あるまいかと心得まする」

「や、それで相方お互ひに安堵いたしましたぞ、あの藤助、御當家に罷り在る砌は、わけて御子息の思召に叶ひ居りましたるよし、ついでに御家門の面目上、ちと世間への風聞も御内分になさるべき筈の密事まで、委しう承知いたしましたるの奴、さるを今日その奉公先まで御送お構ひ遊ばされては口善惡ない下司の習慣、自己の苦しきまぎれ、いかやうな大事を申觸らさうも知れねば、御當家のため其の邊の御心添かたがた、ついでに拙者方へ改めて召抱へましたる義を御届け、かく推参いたした、確と御主人へ申し置かれたい、は、御子息その後、あの本所の方角へ、御出向なされませぬか、は、は、は、」

旗本と御家人との相違は大名の家來に十分と足輕ほどの相違、その旗本も天下の直参として上乗に位せる本内記が、御家人中の出頭でもない本原庄左衛門のため、一度ならず二度までも跳返されたる體、加之も二度日は戀のめとせし十八の女の口より祕藏の一子を腹前に嚙て吐出す如く仕てやられたる父心、いかで其まに打過すべき、たゞ一應の申込を謝絶られてさへ身分に似合はぬ卑怯の返報せしほどの奴、この上また如何なる暗闇に猜忌怨恨の念を晴らさうも知れぬ奴ぞと、餘所ながら、本所の空を氣遣うて心を痛めし折柄、おもはぬ藤助を手に入らし村田三平。

や、これ幸ひ敵の急所と、その玄關へ不意に押掛けて、わざと用人に物凄き言葉の裏表より今後の手も出せざるやう鐵網を張設て後、冷かに微笑を含みながら、今しも門を立出でんとする鼻頭へ歸り來りしは主人の本内記。

今日は雨若黨に草履取、十分の家來二人、槍持の奴まで従へし下城の體、ズツと門内へへ眼に村田三平と見るや否、それと知れど、知らぬ顔の眉を擡めぬ。

「あれは何者ぢや」  
三平、道も譲らず其のまゝの歩を停めて、會

釋もない大聲。

「こりや主人の殿、物覺えの儲お悪い事ぞ、當お屋敷への初對面は御子息これ御執念の咎と心得て女の生絹單衣を賣物に参つたもの、あの本所の割下水、本原庄左衛門の門前では賣物の一封それ返す取らぬの義に就て猶更ら親しう懇ろに御言葉を下された村田三平、今日また拙参の次第は委しう用人衆へ申置きました、結局は御當家お手討になり損なました藤助といふ奴、あらためて拙者、召抱への御挨拶かたぐ、は、は、は、」

言葉の端々に何とやら一物を含んで擡みかけし面魂、こいつ叩かば蚊蚋の面倒と思ひけん、其のまゝの無言に見返りもせず、玄關より打通りぬ。

三平、振返りて見送りながら、そこに居残りし家來への控言葉。

「流石に御身分柄、なか／＼の御器量者ぢや、今この男の無禮を咎め立いたさば却て御身のため、宜しかるまいとの思召で、あのやうに無言のまゝ奥へ遁込まれた、は、は、は、御子息は淺草山門の雜沓中て面目を踏潰されても總の子のやうに手足を縮められ、其のまた父御様は素浪人の無遠慮に一言もなう啞となられた、こりや

争はれぬ父子ぢや、はゝゝゝ

善惡ともに天性の一本調子、元來の胸裡に前後左右のない男、かうと思へば思ふだけの事を吐て、例の古編笠を面深に戴きながら、悠々と立去りぬ。

迎も叶はぬ戀と我みづから我を騙みて諦めながら、さて悟れども悟られぬ凡夫、もし叶はば一夜の契りに生涯の半を縮めても嬉しかるべき男、いづれ遂げざる情の道とは周りの覺悟ながら、さて追へども去らぬ煩惱、もし遂ぐれば其事がため百人の敵に圍まれても嬉しかるべき男。

加之も世にいふ諺、辛からば只これ一筋に辛からで、そも如何にせよとか、なまなかの優しき芳志。

あの華姿風流に全盛を盡せし若衆振さへ、何の色香もなう空嘯くほどの心に、この虎毒を喰反せし三十男が椎の木より迂り落ちたる白癡さを見苦しとも笑はず、たゞ片頬の微笑さへ漏せば綾も錦も積重ねて贈らるゝ筈の方角へ見向きもやらず、この尾羽うち枯した素浪人が心の迷ひに染出せし生絹單衣一枚を、さても女一代の浮沈の晴着に纏ひしとは、村田三平、そもそも前世いかなる報いに斯くまで償まざるゝか苦

しめらるゝか。

せめて近よらぬが身のため、一歩たりとも目に遠退くが心の安かるべき基ぞ、うかく彷徨て此の上また凡夫煩惱の恩情を増さば、叶はぬ戀と遂げぬ情に蒸し殺さるゝ男、やれやれ怖ろしやと二度三度その場を遁出したが、人しれぬ朝夕、寢覺勝の枕頭、夢か、うつゝか、幻か、をりゝの面影、サツと音もなう騰げに立現れて、さのみ嫌はぬ風情の優しげに見下さるゝ辛き切なさ。

忘れんとすれば猶更ら忘れず、今日この頃の三平、加之も返り忠の藤助より番町の父子が無恨の深さを聞けば聞くほど、あるにもあられず、餘所ながら影身に添うて後難の盾ともなり防矢ともなりたき心地、わざと本田家の玄關へ押掛けて、戀なればこそ、他の弱身に附近む男ならねど、幸ひの念所に釘言葉を打ての歸途、丸の内を通りぬけて神田橋より斜に眞一文字の淺草川の此方の山の宿、その追分の裏屋住居へ歸るべき筈の身が、いつしか狐狸に誘はるるが如く川を彼方へ兩國橋を渡りて、や、こゝは本所と俄に心附けば、南無三寶、狼狽と割下水へ近づけぬ。

さても我れながら見下げ果たり、人こそ知ら

ね、恥かしや面目なし、もはや此奴この方角へ用なき筈と、物に迫はるゝ如く足を早めて歩みながら、無念や後髪を引戻さるゝ心地。あの辻を横ぎりてあの屋根越の彼方、あの椎の木の下には其の後の體いかにぞと、また思はず振返れば、その辻より此方へ走來る男、正しく藤助なり。

三平、はツと遁出せば、藤助、其のまゝの一散に追來りぬ。

### 其八

心に憎からねど身には戀でないぞ、もはや捨てた、忘れた、諦めた、わざと引止められし袖を門前に拂うて立去りしまゝの今日まで、一切の方角へは足も向けぬ男ぢやと、現在の昨夜、藤助に對うて語りし三平、やうく一夜をあけし現在の今、その本所の割下水を彷徨て案外その藤助に見附けられ、鬼にも背後を見せぬ男ながら、はツと思はず遁出せば、藤助、また一般に驅出して追附きぬ。

「や、今日は本郷邊の道場まはりと仰せられましてに、こりや案外、あまりの方角遠ひで」「汝また今日は、ちと氣分が悪うて一日引籠ると吐したに、のそくと不意に何處へ出掛け

「はゝゝ、第一この藤助を見るや否、お逃げなされましたが不思議で」

「はゝゝ、かりにも主の姿を見て、追掛けるといふ奴があるか」

「追掛けませいでか、前夜の御言葉、もはや本所は禁物と承りましたに、今あの辻を御通行の體、ちらと、はゝゝ、なれど本所と本郷、はて一字だけ藤助の開違ひでがな」

「此奴め、兎も角も主の事は倍置で、まづ不審は家來の分より詮議ぢや、いづれへ何の用で参つた」

「この本所で、この割下水で、この藤助が内々出向きますところ、差當り椎の木の小陰より外には」

「そりやこそ下司根性、おのれの腹加減で他の疾病を藥三昧、入らざる無用の匙を振廻したな、折角こゝまで出来した三平、丸潰れぢや、事と次第に依ては汝、また叩き出されるぞッ」

「叩き出されるのは思かな事、これで藤助お手討になれば本望、入らざる差加減か、みごと面白う仕て来た愛い奴か、委細は萬事お聞取の上でこそ、はゝゝ、何は俯置まづ本尊いよゝ美はしう、いやはや、わけて今日の風情、ようぞ簪の脚で眼球を扶れず済だと仰せられま

した先日の藤助とは違ひ、格別の今日この藤助へ俄かに打て變られた優しさ、情らしき、眞實お見せ申さぬが殘念千萬さてもゝ案外ぢや、ふしぎぢや、貴方様へ、あれほどまでとは、はゝゝ、なれど、こゝは途中の事、ゆるゝ歸りまして、ならぬ中よりの御酒でも頂戴いたした後の事、はゝゝ、

藤助、自分が鼻柱を捻上げて、四邊を見廻しつゝ、そつと古編笠の中を差覗けば、三平、片手に虎髯を撫廻しながら、片手の握り拳を大刀の柄頭に載せての苦笑。

「藤助、此まゝ歸つても炊置の冷飯より外にあるまい、さりとて腰巾着は生憎、いや、はゝゝ、いつもながら秋風で、ものの哀れぢや、かゝる時の折柄、幸ひ上野か浅草あたり、足ついで

の道場へ立寄て、酒料の一活動して行かうか」  
「ならば他流の手剛い奴でも來合して、その道場の立つか立たぬの堺目へ貴方様の一太刀、はゝゝ、」

「やれ、どこまで厚顔しい奴」  
いたるところ胸に鬼えの業を切賣の浮世、ゆく先々の町道場を廻り歩いて、其の日くを代稽古に渡り先生の村田三平、藤助を引連れて本所より追分への歸途、浅草田原町の道場へ立

寄りぬ。

折しも木太刀の激しき音響に窓を漏る汗臭き匂ひ、三平、まづ微笑を浮べながら、ぬつと入れば、藤助、古編笠を大切に誦取りて尻切草履まで堅韌に取揃へつゝ、どれほどの酒料になるかと、領越に其の場の人数を見渡しぬ。

三平、さても武道にかけては敵なき男、息も次がず十八九人を相手に引受けながら、さらに勞れし顔色もなく悠々たる體、いざとて歸りかけの高笑。

「いつもながら、わけて今日は三平、腹の蟲めが酒々と吐すやうで、はや何とも堪難い心地、御無心なれど時の災難と思はれて、これに在られる御一人前より二合つつの振舞を願ひたい、はゝゝ、また猶更の身勝手申すやうなれど、近ごろは山の宿の追分へ時を構へましての事、それへ持歸つて家來と差向ひの晩酌に致したい、はゝゝ、」

いと却て自然の愛嬌、外修もなく虎髯の大口あいて笑へば、折しも道場の十七八人また思はず高笑しながら、忽ち酒組と肴組とに頭割の鳥目、合して紙に包まんとするを、三平、いやゝ、柳のまゝで頂戴いたさう、それ藤助と呼べば、さらぬも蛇の如く鎌首を立て、待兼

ねし藤助、はつと答へて飛込むや否、押戴いて  
主の背後より中腰に立出でぬ。

「どうぢや藤助、身に過分の我慾さへ求めねば、  
さて世の中いづこの里にも不自由のない男、  
はゝゝゝ」

「や、實は身の差替と申せど、使へば盡きる筈  
の差替より藝こそ盡きぬ身の寶、今更ら感じ入  
りまする」

「まづ酒は三升分、それに相應の肴料もあり  
げぢや、思ふまゝ夜と共に打寛いで飲まうぞ  
藤助」

「いたゞきませいでか、萬事小面倒に禮儀張た  
四千石の歴々奉公よりは、かう氣樂に面白う打  
解けて主従共稼ぎの酒こそ身が肥えまする、  
はゝゝゝ」

「面白う氣樂に打解けるは宜い、なれど主従共  
稼ぎとは此奴、ちと辱端が過ぎるぞ、おのれ身  
に何の藝がある」

「は」

「は、で済むか」

「なれど、今日ばかりは藤助、その御酒を無遠  
慮に頂戴するだけの藝、たしかに仕て退けまし  
た筈、はゝゝゝあの割下水で、加之も本尊へ、  
ぢきゝ」

「ぢきゝ」が猶更ら危険ぢや、いかな藝を出  
したやら、見届けいでは覺束ない奴なれど、今  
夜この酒を無いものに仕て兎も角、聞て取らさ  
う

追分の裏屋住居に貧乏徳利の酒三升、細から  
げの鹽鯖を焼て、飯炊、それに叩き菜の味噌汁、主  
の村田三平は晝ける山賊に等しい手胸を現はし  
ながら大胡坐、家來の藤助は片肌ぬぎに立働  
いたまゝの差對ひ、これで人しれぬ浮世の戀沙  
汰とは。

「藤助、さのみ酔はぬうち、この酒に對しての  
義理がある筈ぢや」

「はゝゝゝ義理も人情も、まづ七八杯戴きまし  
た上の事、や、久しぶりでか、扶らるゝやうに  
五臟六腑へ染渡る心地、じたい酒といふもの、  
こいつ戀と同じ血で、いかな男も竟には正  
體を失うて、ころり、はゝゝゝさて今日の割下  
水、あの椎の木の小蔭へは、番町の本人もろと  
も生面の皮を剥かれました以來の藤助、申さば  
足跡もならぬ筈ながら、こゝに出汐を變て漕出  
した櫓拍子、實は只今、かやうくと打明て前  
非後悔いたすや否、そりや不思議な縁ぢやとて  
案外の順風に迎へられ、主人殿と暫時、世間  
談話の障子越に委細を聞て居られたやら、あれ

嫁な人と思つたに倍も罪のない事、これへ來ら  
れませとの優しい聲音、そもゝゝいづこの誰と  
思召しまする」

「はゝゝゝあの木原家に、庄左衛門といふ主人  
の外、まさか飯炊の半婆々が障子越に物もいふ  
まい」

「加之も霞を隔てた花の匂ひ、聲ばかりでなく、  
その障子そりりと開けられて、にこりと思はず  
笑まれたが借あの容顏、貴方様でなうて僥倖、  
藤助なればこそ、五體ふるゝと震うただけで  
氣絶もせず無事に済みました事」

「や、何と吐す此奴、忘れたか、假初にも主従  
ぢやぞ」

「はゝゝゝなれど、かうなれば、否、これほど  
の事を申上げるに、いづれ少しの座興は、た  
とひ聊かの御耳觸りあらうとも、御許容を蒙  
らいでは、や、そろゝ酒ばかりで差引勘定の  
合はぬ段となりました」

「はゝゝゝまた其のうち差替の一枚も、稼ぎ出  
してやらうぞ」

「さて本尊、これへとの言葉に藤助、それへ出  
ましたところ、あの番町氣は一切皆無、たゞ不  
思議に貴方様の事ばかり、いろゝお尋ね、追  
分といふところは何處、いかな世帯を持たれた

ぞ、わけて汝が朝夕の冊きといへば、嘸や氣輕に呵し事でがな、ほゝと聲を含んで笑はれた時の美麗さ、氣高き、もし従前のやうに自由の身なれば一度その御宿へ、訪うて見たやと、さも情らしう、ゆかしげに申された風情、こりや正しく、たゞの雲行でない證據、たしかに藤助見届けました、さて何として貴方様が、古今無類あれほどの女に、こゝまで、や、人間界の珍事この上もない大間違、はゝゝゝゝゝゝ

三平、ぐいゝと茶碗酒の続け飲み、泉の如き眞丸の大目玉を半眼に細めながら、力を極めて自己の太股きりと捻りぬ。

「藤助、酌せい、浮世は斯うぢや、汝も飲め、寝られぬぞ、夜明しゝゝ」

## 其九

垣根の牽牛花、まだ葉は散切らねど、朝な夕な花の色、いつしか色も褪め行きて、晝は梢に蝸の聲さへ細く、夜に入れば庭の隅々に蟲の音、軒端を誘ふ風は日に見えねど、何とやら身に沁む肌心地、はや夏は過ぎて秋ぞ來にけり。

わけて世に時めく全盛の人よりは、浮世を忍び顔に物おもふ身に早き秋の空、加之も主人の庄左衛門は一年の謹慎、露女は三年の門外へも出られぬ身、それには然までの悲歎もなけれど、

これが大畜生の死骸たゞ一箇の葉、あの番町の方角より吹出せし嵐の末かと思へば、さても無念さ口惜しさ腹立しき。

「今更ら申さうでもないが、さて世の中といふもの、これほど不運に、まゝならぬとは思ひもよらぬ事、や、心外千萬、なれど、これも萬事この庄左衛門が髪に霜置く年甲斐のない愚鈍さ、花ならば今が春の眞盛、可惜お身を日蔭に埋めましたぞ」

「あれ、また、辛や、この身こそ、女子のあられもない、入らぬ蓮葉な業して、それがため、濟まぬ事、申譯もない事、もし局に御座らう父上の御耳へ、聞えたらば、いかに何と仰せらるるやら」

「いやゝゝ、もし局へ聞えましては、お身を預る庄左衛門こそ」

「局といへば、その局で今更ら、思ひ出したでもない事なれど、あの父上に、附て、この身と取替た」

「や、子息、報負の事でがな、されば、お身より一歳の上、ことし十九になります符、あの時、十歳で別れたまゝの今日、いかに育ちしや、世に離れた八重の汐路の外とは申せ、殿様お側に朝夕の身姿こそ汐風に吹かれて、さて見る影もなう、なれど、まさか父育の島奴にはなるまいかとの父心いや、子息の事は諸置で、たとひ再び弓矢神の武運に叶はせられずとも、せめて氏神の守護、めでたう流罪御免の曉を、願はくは庄左衛門が世にあるうちに」

「この身も、そればかり朝夕……」

「庄左衛門、もし十年、若くば、こゝまでの憂節は見せませぬもの」

「いや、この身とて、もし男ならば、たとひ渡る海原で、底の藻屑にならうともいかな怖ろしい鯨鯨の餌食にならうとも、おめゝゝ父に離れては居ぬものを」

また秋は深からねど、はや夜は更渡りて草葉の露零、いかに濃くぞ宿れる、こゝにも八しれぬ涙の露、庄左衛門が老の目の雫、さても浮世なり、折から哀れを添て啼渡る初雁の一聲、さりとて何の音信もなく、通ふ文の便りもなし。

いづこも同じ浮世、こゝばかりの秋ならねど、もの思ふ身は猶更ら淋しき宿に露けき袖袂、更行く夜半に燈火の影も打沈んで、ぼつと力なげに薄閑し。

主人の庄左衛門、老の目を瞬涙きながら、俄に膝を組直して容を改めぬ。

「や、昔は昔、今は今、いかに敷けばとて、どれほど口惜めばとて、かくなるべき運命に斯くなりし上は、何とせん、たゞ自然の時節を待たう外に力も業も及ばぬ事、主従父子、互ひに八重の汐路を隔てながらも、諺にいふ物種の生命あれば世の中、また霜枯の梢にさへ春は巡り来る凡例、わけて春も春、老木の枝とは違うて、いざこれよりが初春に初咲の御身ぢやもの、さるを何事ぞ、うかと思ひが年甲斐もない愚癡の涙に引入れて、はゝゝ不吉、不吉」

露女も閉ぢし絲目、やう／＼開けて、凜とせし平生の男優りに似もやらず、残る平を袖に拭ひながら、わざと作りし笑顔、いと／＼胸開けて哀れ深し。

「何の、それが身の不吉でがな、老木の蔭に宿ればこそ、消もせいで今日までの露、ほゝゝゝよしや此のまゝ消えてからが、武運に盡き果てた流人の娘、さら／＼惜しうもない身、惜しめばとて、叶はねば是非もない事」

「いや、是非ないとて、武門に名を得られた父上さへ、一死の易きを忍んで局に在す以上、其のまゝ輕々しう捨てらるゝお身か、また不肖ながら庄左衛門、こゝに朽果ても致さざる以上、この上いかに不運の憂目に逢ふとも、萬一の事

あらせて、なるべきか、たとひ世に出られずとも生涯大切のお身ぢや、女性なりとも萩田家の一粒種、うき世の愛が嫌さに我れから我が身を粗末にせられては大の不幸ぞ、縁あらば天晴れ男を見立てゝ、お身一代に氏素性は興されずとも、嫡々の血筋を傳へて二代、三代の後には」

「えゝ遺憾ぞ、いはるゝほど猶更の事、女子に生れし口惜しさ、もし男ならば、たとひ見苦しい不具にもせよ、せめて男の端ならば」

「はゝゝゝ、また詮もない事を、女性なればこそ、あの砌、萩田主馬が一子といふ流罪を免れて今日まで無事のお身ぢや、この行末とても、いづれ愛身の折柄には愁か物に角立つ男より滑かに過せば過ぎるゝ女こそ、世に連れて萬事の心易さ、まづ／＼今を今として、まのあたり今夜は今夜、さて更けたぞ、恙も無う寝ませい、寝られませい」

胸裡の柵に堀止兼ねし憂涙、目に溢れながら、いざ寝ませいとの言葉に首肯て、そつと其のまゝ靜かに座を起ちつゝ、奥の一室の臥房へ入りし後は深く色香を包みし夜の花、いづこの誰に見られねど、枕頭の燈火を細めて雪の額に夜具うち被ぎ、はや更渡れど寝られぬまゝて

猶更ら秋の夜長の物思ひ、庭の木葉を誘ふ風の音、壁を隔て、庄左衛門が思はず漏す息息まで、いよ／＼耳に浮えて、さても苦しや終夜。

### 其十

八疊の一室を中間に隔てゝ、奥には露女の臥房、納戸の此方には主人の庄左衛門、まだ互ひに師らねど枕に就て、はや夜半の鐘の音も過ぎぬ。

黄色の狭斜には一刻千金の諺さへあるを惜しや一夜たりとも、これほどの名花が人しれぬ閑の獨寝に、いと／＼猶更ら哀れぞ深く、しみ／＼と身に沁む秋の夜長の憂愁、ぼつと薄闇き燈火の影に、古今の筆にも書にも及ばぬ色香を包んで、寝られぬまゝの夜香の袖、伽羅の匂ひの漏れて浮世に通ふ行方もなし。

まして庭の梢の枯葉を吹行く夜風の音、かきならす遠音の爪琴に思ひ紛らせど、いつしか生憎の雨とやなりけん、枕頭に近く愁人の小鼓を打つが如く、軒端を傳ふ點滴に誘はるゝ心の淋しさ、いよ／＼目は沸えながら夢に等しき過越方、連も詮なき事とは諦めながら一入さらに今の身の恨めしさ、わけて斯まで不運の行末いかになるぞと、思へば思ふほど流石に女としての春も過ぎけり十八の秋、ちつと其のまゝ

あるにもあらぬ耳衆へ、何とやら聞えし音響は庄左衛門が臥房、や、加之も俄に曲者と叫びし聲。

露女、はツと枕を欲て、身を起すや否、さらぬも平生の氣性、まして生來は越路の雪に唄はれし北國名物の氏素性、父が記念の守護七首を手にて取て嵐に狂ふ花の面影、襷衣のまゝに闇の襖を開放ちし折しも、またもや續いて尋常ならぬ悲鳴。

もはや男女の差別も火水の境もなし、たとひ鬼神が襲ひ入るとも生涯こゝに一念の業するりと放放ちし七首もろとも、今更ながら十八の女には倍あるまじき不敵さ、無言のまゝ、中間の一室より風に散行く葉の如く、庄左衛門の臥房へ舞込めば、南無三寶、はや既に納戸口の雨戸を蹴放して、曲者の影は見えぬと遁出す庭の足音、現在まだ耳に残りて響く無念さ、おのれやれと思はず我を忘れて、追従らんとせし背後の血汐に、あはれ蟲の息を絞り出せし老の苦味。

「無用、無用ツ」  
總髪の根元を大力に掴んで引戻さるゝが如く、アツと反身に振返れば、跳退けし夜具の上に横はりながら、むざんや朱に染みし最後の首

のみ、やうく擦けし庄左衛門を燈火の影に一目ちらと見るや其のまゝ、露女今更ら心弱き泣音を立て、倒るゝばかりに抱き付きぬ。  
「敵手は何者ぞ、いかなる奴、せめて其の、それ一言、この路にツ」

「無念、確と顔見届ける間も、なけれどいづれ、番町でがな、但し無用、大切のお身ぢや、この老爺のため、また女性に入らざる、無用な事、せられますなツ」

露女、總身の力に抱起して泡占めながら、庄左衛門の耳に口、腸を抉らるゝ悲痛、胸に沸返る涙、おろく聲。

「この露は、嫁、あの島にある人の妻ぞ、生涯逢はずとも妻ぢや、其方の子を良人に、持ちますぞや、や、や」

### 其十一

追分といふ土地の名よりも身の運命の眼前うき世に落ちて追込まれし裏長屋の佗住居ながら、かりにも主従といへば殿様の村田三平に家来の藤助、貧乏徳利の酒三升に繩からげの鹽鱈を焼いて、ゆうべの終夜を人に聞かれねばこそ、品位にもない戀沙汰に明せし今朝、まだ起出でぬ二日酔の體。

わけて肌寒き秋空の雨さへ降出せし曉方にや

うやう一枚の垢染みし夜具を引合うて、君臣とこに相抱きながら雷の如き鼾の聲、酒は底を叩いて一竿も餘さねど、流石の商節に喰傷せし鹽鱈の骨散を、其のまゝ、枕頭に嚙る隣屋の猫まで悠々として逃げもせぬ氣樂さ。

横に置銀べし石佛二體、かくても動き出す時刻あるかと思ひの外、三平、まづ晝近き頃に目を覺して、見れば偕、いかに夜具一枚の致方もない境涯とはいへ、せめて満足に目鼻を備へし奴でもある事か、化損ねし狸に等しき面體、あまりの面白からぬ添寝に、無言のまゝ、藤助の首筋を掴めば、きやつと呼びながら跳起きんとせし寝枕面を、あはれや遁後れし猫の爪に搔撓られて猶更の驚愕、狼狽たる五體いよく廣くもあらぬ一室を蝗の如く飛廻りぬ。

「畜生、畜生」  
三平、おもはず枕を外せし高笑ひに、藤助も今更ら我れに返りし體、手持銀沙汰に猫の遁出せし戸口を引開けながら、また破扉より濁來る飛沫に面を叩かれて、そつと首を縮めし獨言。

「や、降るぞく、前夜あれほどの星が今朝この雨とは」

「藤助、もはや今更といふ世間普通に目の覺めた時刻であるまい、うかとすれば夕暮に近いぞ、

は、いゝ、いゝ、但し時に取ての腹加減、どうぢや」  
「寝起の沙合を取違へました上、諸その腹加減も二日酔で、いつ何時やら」

「空腹の知れぬが酒の餘徳、却て今日の僥倖ぢや、雨も降るぞ、出るに雨具は無し、わざく起きて喰直す珍味は無し、まゝよ藤助、また此のまゝ枕を並べて寝ようか、はゝゝゝ主従の差別と晝夜の差別は世にある奴の事ぢや」

「身に餘る御言葉ながら、勞れて前後不覺に睡りまする時か、また酔うて夢うつゝの時なればこそ、はゝゝゝ斯う寝飽たま日中、御免を蒙つて申せば針を植込だやうな虎髯の貴方様とは流石の藤助も、さて聊か、はゝゝゝゝ」

「や、此奴、そりや此の方の言ふ事ぢや、今も今ふと目を覺せば何の因果か今更ながら、汝のやうな奴に鼻と鼻とを突合しての寝心地は、はゝゝゝ、わけて前夜あの戀沙汰にちと味な氣の持越した折柄、たゞ首筋を掴み出されたばかりで、素頭を叩き割られぬが生命拾ひぢやぞ」

いち／＼言葉に荒々しき角は立てど、互ひの心は丸く打解けし境涯、四邊かまはぬ大口あいて高笑しながら、雨の日の一入さらに暮れ易く、いつしか夜に入りし後は、いよ／＼車軸を流すが如き大雨に、さらぬも荒れたる板屋簷の

天井より隙間を漏れる雨点滴、加之も生憎今夜の油は盡きて、點火のない眞黒闇に主従ただ二人。

「藤助、どこに居る」

「は、これに居りまする、この隅の壁際に身を縮めて雨宿り致し居りまする」

「はゝゝゝ家の内の雨宿りこれは妙ぢや、面白いで、はゝゝゝゝ」

折しも入口の軒下へ俄に雨を弾く音、さては浮世、こゝにも傘持つ人の訪来し不思議さ。

いかな貧乏神も、これは案外、あまりと呆れて立寄らぬ筈の軒下へ、加之も車軸を流す大雨の日は暮果てし後、家内に居てさへ点滴の漏れる境涯を、何事ぞ満足に傘持つ人の訪来しとは、たのみませう一わけて俛しき女の聲に、

燈火もない眞黒闇より寝ながらの鎌首を擦げし三平、一藤助、藤助は壁際の片隅に身を縮めて、古襦袢を頭上に打被りし藤助、こそ／＼と這出でながら、戸口へ立寄りて中腰に透し窺ふ鼻頭

へ、顔は見えねど、ぶんと匂ふ伽羅の香、「こりや村田、三平と申すものの浪宅、お門違ひでがな」その三平様、御在宿でか「や、いづ方より」本所あの割下水「一入さらに聲を滑めて、露々といはるゝや否、あツと其まゝ後居に倒れ

し藤助あとは絞殺さるゝが如く唸り出して、俄かの不意に方角まで取矢ひしか、まツ黒闇に螢の如く這廻りながらやう／＼探り當てし三平の枕頭へ身を乗掛けて耳に口、かくと私語けば、三平また跳返ツて、がばと起直る勢ひに主従もろとも額と額の鉢合せ、互ひの目より火は出るとも、あはれ家内は元のまゝの眞黒闇「藤助「はツ」燈火を点けい」「は、燈火、は」「や此奴、うろ／＼何を狼狽る燈火ぢや、行燈の火ぢや一いかに氣合よく受けては、はツと掌中より物の飛出すやうに答へながらも、反古張の紙さへ破れて骨ばかりなる古行燈に今夜一滴の油もない境涯。

三平、たまらず軒下に飛出して、この大雨に瞬時なりとも花の姿の勿體なやと、口に得いはれど胸に溶るゝ千萬無量、年ごろ祈りし神の眼前に現れ玉ひし心地、そツと忍るゝ手を取れば、取られしまゝに探り入りし風情、此方には藤助、かち／＼と頻に慌てゝ、燈石を打つ音、はツ／＼と稻妻の如く闇を破る火奴の火影、やがて土火鉢の中より俄に燃出す焚火を見れば、手當り次第の木屑紙屑自己が頭上に被りし古襦袢まで引裂て、筒細工に等しく面を膨らしながら、總身の太息に吹立つる苦しさ、家來に劣

らぬ三平その間に半窓の破障子一枚取外して、  
 大力の早業に竿を曲折るが如く、五六寸づつ  
 に打碎いて傍より投込む火勢いよく熾盛に  
 炎々と燃上りぬ、「はゝゝゝ、面白いで時に取て  
 の篝火ぢや、あらためて藤助、これ御案内せ  
 い「見苦しい茅屋は固り御存じの筈ながら、を  
 り悪しう此、この大雨で油賣奴も来ぬとは倍、  
 生憎な事」障子を曲折て俄の焚火、これが何  
 の面白い篝火ぞ、よし十人の油賣が門口に競  
 合へばとて、行燈一臺の火皿に半分の鳥目さへ  
 覺束ないほどの身代ながら、主従おもはず言葉  
 を番へて振返れば、やうく軒下より引入られ  
 しまゝ流石まだ戸口に立てる露女、倍も不思議  
 や、男合羽を身に纏うて柄袋かけたる大小  
 黒の頭巾面深に猶更ら汚えて雪を散く眞白の目  
 鼻のみ、畫ける如くに際立ちぬ、大散しの染ぬ  
 き模様を重ねて、かるた結びの前帯に小棲きり  
 りと引絞つゝ、緋紋の下着に纏ふ雪の素足を  
 惜氣もなう現しながら、かご島田の大前髪は何  
 とやら傾き勝に、剛髭の鬚の毛さへ聞れし  
 みか、降注りし雨の飛沫と思ひしは、あはれ堪  
 兼ぬ日元の涙、三平、やうく膝を進めて、  
 今更の體に容を改めぬ、「不審も不審、案外も  
 案外、いかな仔細あらうとも、まさかと存ずる

我が浪宅へ、せめて庄左衛門殿でも来らるゝ事  
 か、さるを今夜この大雨に「平生の氣風も今夜  
 の姿も男ながら、かくの今となりては流石に女  
 なりけり伏日勝に流るゝ涙を袖に拭ひつゝ、ゆ  
 うべ夜更けて庄左衛門が曲者に殺されし事、あ  
 けゆく空を待兼ねて兩隣家の手より組頭へ届  
 け出でし事、やうく検死も済んで、いづれ曲  
 者の詮議あるべしとは聞けど、例の沙汰にて一  
 年禁足中の本人が其の身の油斷に不覺の死にと  
 して扱はれ、加之も相續の男子なき上は御家人  
 の名跡を取潰さるゝとの事まで、いちゝ涙  
 片手に物語りし後、一入さらに無念の泣音を絞  
 り出しぬ。

## 其十二

「本國の越後さへ、今は無い身、まして假の浮  
 世住居に求めた御家人人情の家も名も取潰され  
 てからが何の、さらゝ惜しうは無けれど、こ  
 れが自然の成行でもあらう事か、現在その曲者  
 まで、口惜しやあの番町、かと思へば思ふほど  
 猶更の事、甲斐なき女子でこそあれ、賤しい下  
 司の種にも生れぬ身、わけて事の原因は此の身  
 ゆゑ、もとは主従ながら九歳の春より育てられ  
 て、うみの親とも仕へて来た人を老の苦勞の果  
 に殺したたまゝ、おめゝとは、なれど今が今、

また此の江戸中に、草の葉の山縁も蔭もない露、  
 今夜こゝへの途中さへ、この大雨を幸ひの目  
 ないとは知りながら、もしやと男姿に忍び来  
 ましたほどの露、たのみまするは貴方様ぞ、お  
 馴染は薄うとも只お心の厚さに、お縋り申した  
 い山々、せめて一念の肩くまで、あはれ妹の  
 やうにも思召して「確とも知れぬ餘所の風聞を  
 小耳に挿んでさへ、もはや他國へ立退し管の身  
 を隠して霧地に朝ぼらけの門を叩きし男、さ  
 るを現在の今、その本人に眼前の泣音を立てら  
 れて、この江戸中に頼むは只一人といはれし村  
 田三平、あまりの嬉しさと有難さに大玉より  
 豆粒のやうなる涙を弾き出しながら、加之も聞  
 けば聞くほどの無念と心外に、兩の拳を握み齒  
 を磨きしつゝ虎髯を逆立てし體、描ねたる鐘  
 撞の如し「や、おのれ、武士冥利の白刃にかけ  
 ては飽足らぬ奴おのれ、おのれつゝ  
 此方の土火針に障子の骨を砕いて燈火に代  
 へし焚火の藤助、おもはず這出せし鼻頭へ無念  
 の遺場もない蜘蛛の如き拳、ぬツと振廻されて  
 飛退きぬ。

\* \* \* \* \*  
 天下の重き禁制に觸れしもの、猶更ら油斷な  
 く身を謹むべき筈の木原庄左衛門が、何一品

これといふ證據の取止もない曲者の爲不覺の横死せしのみか相續の男子なき上は其まゝ、家名取潰して住宅は七日間に明渡すべしとの事、兩隣家の同じ御家人へ申渡されぬ、また庄左衛門が養女の露は、兼てより三年間市中往來差止の女ながら、義理親を失ひ住宅を召上げらるる折柄の事、その七日間に身元の引取人なくば、あらためて江戸追放との厳しき沙汰、かく申渡さるゝや否、その引取人として奉行所へ罷り出でしは、いかに花の色香を圍ふ優美の緣者かと思ひの外、山の宿の追分に裏屋住居の虎髯を喚反した村田三平、藤助もろとも七日の間は本所廊下水の木原家へ乗込で、まづ第一に葬式の事、追善供養の佛事、さては此の後いづこへ運ぶやら家財道具の取片付まで、六尺の大兵を素丁稚の如く立働きの、周りに生涯こゝに氏素性を定めし身ではなく、たゞ浮世を忍ぶ假の宿、家も名も捨て、惜しからねど、幾星霜の朝夕に住馴れしかと思へば、流石に何とやら、時も秋なり餘波の露雪、そつと軒端に散來る木葉一枚にさへ行方を慕はるゝ心地、まして親とも頼みし人を非業の白刃に失うて、その初七日も消まぬうち去らで叶はぬ袖袂、やがて暫時の情もなく追出さるゝかと思へば、いと猶更の無念

さ口惜しさ、家の事は三平と藤助に打任せしまま、たゞ奥の一室へ閉籠りて名花の日蔭に濡れし風情、夜更けて寝もやらぬ涙もろとも取念に漏れ來る念佛の聲、一入の哀れ深し、さらぬも生命、もし現在こゝに捨て、用に立たば、床下に積りし塵芥よりも容易う抛出すべき三平、夜更けし後の幽かに漏れ來る唱名同向さては絶間なき線香の匂ひに無常を誘はれながら、枕を越へし藤助に對うての私語低聲「偈かうなれば藤助、もはや夜明しの酒うち喰うておもしろ阿しう自己が身勝手な懸沙汰では済まぬぞ、腸の底から洗ひ直した眞實、神もつて潔白清淨の男業ぢや、いよく七日の日限も今日が四日、あとの三日で此家を明渡す以上、あの番町へは三平また別に一存のある事、但し藤助、あれほどの目に立つ花の姿を泥鼠も住兼ねる追分の裏長屋へは、加之も流石に古河の水絶えぬ萬事を頼むといはれた時、この三平へ内々そつと渡された用意の金子もあり、また十年來の家具調度も外觀の外にある以上、いづれ改めて分相應の一家を請へずばなるまい、偈その家ぢや、偈その後ぢや、家は今日明日のうち捜し出すにせい、我等兩人、かゝる折柄の力になればなるほど猶更の事うかゝ其の餘徳を喚

缺いてはならぬぞ」「いかにも御言葉よの藤助も最初は貴方様を、飼はれた主のためより實は身のために利慾の敵とした奴、それが今、かうなりましたのみか、また現在の眼前、これほどの悲哀に出逢うて、もし叶はねば叩き散さうとまで規うた色香の花守になるとは、偈よく御縁でがな、戀か情か、そりや一切、この後の藤助は知らぬ事、たゞ何處までも貴方様といふ天晴れ男づくに使はれる男の端くれとなりまして、一事には時に取ての幸ひ、褒美と思ひの外の人軀抱丁で追出された番町への而當に」「や、よく言うた、その蟲の居どころを取遁すな、男は氣で持つ世の中、知行取が嫌きに氣樂三昧の素浪人こそすれ、わづか四千石の飾り人形に出来た奴が何じ、おのれツ」人しれぬ内々そつと蹣跚いて、こゝと定めし借宅へ前日のうちに家具調度一切を運び込みし上、いよく「今日が七日日といふ其の朝、兩隣家へ殷懃の挨拶も済ませ、辻の町役ながら一挺の乗物を門内へ備ひ入れし體に、奉行所より見届けの同心三人おもはず制して、お咎め中の轉居に彈りもない借上の沙汰といへば、村田三平、例の大目玉に虎髯を喚反しつゝ、これは兼てより三年間江戸市中の往來を差止られしも

の、わけて年若き女の足弱、いかゞ致して運びますや、人間なれば荷車にも積まれず、陸路なれば舟にも乗せられず、空飛ぶ鳥でなし地を渡る蟲でなし、お指圖に預りたいと、はや痛癢の青筋を現して、どいつ此奴の容赦もない面魂、さらば詮方なし、せめて駕の垂を下して途中の人目を塞げといへば風に散るまいものでもなし、釘付けに致さうかと捻返す不敵さ、うかうかすれば當時不似合なる大刀の丸柄を叩いて、生命不知の狼藉も仕兼ねまじき勢ひに、夢の如き太平の世の滾れ汁に湧出でし小役人、ただ互ひに顔を見合して苦笑しながら、見届けたため半町ばかりの後より従ひ行きぬ、わざと駕の垂を咄々しう開けさせて、あはれ心は涙の喪中なれど、善惡ともに身は女として今日を及ぶかぎり盛粧、さらぬも萬人に勝れて水際の立ちし天生、加之も生れながらの氏素性、自然と備はりし武家生育の色香に伽羅の匂ひを含んで、靜かに脇目も觸らず豊かな横顔の猶更ら氣高き美はしさ、名筆の畫に生あるが如き風情の艶麗さ、いかなる高貴の姫君かと見れば、辻傭ひの町傭に思はず眉を顰めて往來の歩を停めし鼻頭へ、そこ退けと破鐘の大聲に吐鳴散らすは村田三平、流石に平生の古絹笠も打被らで、庄

左衛門が遺物の借着に見苦しからぬ體、藤助まで時候に外れぬ衣服を纏うて肩脇を張りぬ、兩國橋を渡りし時は、今まで脇目も觸らぬ露女、かくなりし怨みの種あの大の死骸、こゝにありしぞと思はず駕より外を差覗けば、三平もなんとやら今更の心地、清しも藤助、その袖そつと引いて私語きぬ、今あひ橋の袂の霞餐茶屋に、ちらと見えたるは番町の若黨、さては這處に待受けて、後より來よう奴でがな」それとも知らず行過ぎし三平、暫時と駕を停めて橋の袂へ驕戻するや否、ぬつと茶店に押入りながら、確乎に此奴と思ふ若黨風の面前に仁王立の大聲、「や、臭いぞ臭いぞ、番町臭いぞ、この臭味の根を持つ奴へ」幸ひの傳言ぢや、本所割下水の木原庄左衛門は何者の手でやら無念の最後を遂げて、あとに残された露女の後見には幸ひ兼ねてより馴染甲斐の村田三平といふ男、今日あらためて轉居の先は神田の逢初川、委しういへば鍛冶町より紺屋町へ流るゝ大海の落合口ぢや、はゝゝゝいづれまた用ある筈、忘るゝな、わざ／＼後を付けて來るに及ばず、此のまゝ走歸つて確と言置けッ」

花吹亂れて、軒深き土廂の草屋に味噌醬油の通路まで風流の柴折戸、庭に捨石の苔さへ古びて算盤珠の弾くに不似合なれば町人の住居ともならず、馬鞍の置處に伏ければ武士の屋敷ともならず、さりとて垣一重の外には絶えず往來の足音も繁ければうき世を捨てし白髮老翁の隠家ともならで年久しく其のまゝの空屋に打過ぎしを、わざ／＼好んで俄かの世常道具を運び込みしは例の本所割下水より。

人しれぬ心の迷ひに染出せし生絹單衣を夢うつゝの枕頭に泡占めて、宵闇に忍びし椎の木よりたり落ちたるほどの村田三平、せめて半日なりとも打解けて優し言葉の端に聞けば、いかに嬉しからんとまで思ひ落ちしに、思ひきや不思議の縁の今は同じ家の内に住込で、加之も朝夕このまゝの行末を頼まゝのみか、何事も打任されて人日は兄とも良人とも見らるゝ體に、しみ／＼と身に心む男冥利、もはや此の虎髯が分に過ぎたる名花の露を吸はんとしたくでなし情でなし。

わけて下司ながら藤助といふ奴、四千石の太身に蛆蟲の如く召使はれしよりは、追分の裏長屋に枕を並べて主従並寝の境涯、さては一箇の物を二箇に割て喰されし男づくに眞實の心體、

かくなりし今は猶更ら餘所の利益に瞞目も觸らず、奥の始末、庭の掃除、廚一切の隅々まで身に引受けて自己が世帯と立働きの。

また露女は露女、思へば世の中、かくなるべき筈の運命に弄ばれて、かくなり果てし身の行末は兎も角も眼前人は外貌によらぬ心の鬼とこそ聞きしに、これは見る目の外の優しい人人に冊かれつゝ、朝夕の憂を勞はり感さめらるる嬉しき頼もしき、あの口惜しい仇敵への力まて俄に立添ふ心地して、いつしか互に馴々しう何の隔意もなく貴方様と呼し三平を三様と呼替へ、藤助殿といひしを紫の花ゆかりの人と笑うて呼ぬ。熊の背皮を着て谷間の焼火に荒稼の網を張る山賊が、やうく心を改めて人里に出でしが如き村田三平も、名花一輪浮世萬人にあるまじき色香の露を含んで、情らしく三様と呼ばるゝ呵しき、下手な大津繪の奴に似たる藤助までも紫の花、ゆかりの人と色めいて呼ばれる恥かしさに、主従そつと思はず顔と顔とを見合せながら、秋の寒きに額の汗を拭ひぬ。

「藤助どこが汝むらさきの花めいたゆかりの人ぢや、どす黒い蔭色の奴風に似て居るぞ」  
「あれ、三様のあられもない仰せ」  
「や、此奴め、はゝゝゝゝ」

江戸繁昌の市中に逢初川といふ、名さへ何とやら優しき浮世の假住居、折しも咲出でし秋の草花、その露の身の置どころに三様と呼ぶ男、ゆかりの人と呼ぶ聲を聞けば垣根越ゝかに心憎き態と情の忍び宿かと思はれぬ、されど見れば案外、六尺の大兵を猪毛に包まれし虎毒の三様、緑目の切れし蔭色の奴風が南瓜畑へ落ちたる如き由縁の人、たゞ花の露それだけが萬人に勝れて珠玉かと疑はるゝ風情、猶更ら四邊近所の眉を顰む種とぞなりぬ。白晝さへ淋しき本所割下水に御家人の軒を並べて、加之も奥深く人しれぬ一室に伽羅の匂ひを罩めし頃とは違うて、逢初川といふ名こそ風流めけど實は神田の鍛冶町と紺屋町との堺日、夜さへ絶間なき往來の足音に繋ければ、いつしか世間の風聞こゝかと嫉妬の取沙汰、わざ／＼朝夕の垣根越を差覗く奴もあり、うる／＼用なき門邊を彷徨く奴もあり、腹立まぎれの石礫を背中に抛て通出す奴もあり、果は自己の戀でも盗まれたるかのやうに無遠慮の大聲を張上て、神武以來の珍事出来これほど不似合の夫婦あるものか、と喚き散して行く奴もあり、いづれ涙の種、ありや連も尋常の夫婦でないぞ幼少のころ掠うて来て今あの芳紀になるを待受けた花の色香の紋

殺し、無理往生の驚嘆みでがなと、あはれ氣に私語しながら過行く奴さへあり、いち／＼其奴の面を見れば大喝一聲の下に細首を吊るしあげて逢初川へ投込む筈の男なれど、をり／＼何となき餘所ながらの小耳へちらと插むのみの三平、それさへ思はず満面を皺めて座にも得堪へぬ冷汗、いと猶更ら奥の露女に憚りつゝ、そつと廚の藤助を差招きぬ、一や、小うるさい人の口、小面倒な浮世ぢや、空に寒呼鳥の啼く本所の果とは違うて、路傍の犬の糞にさへ見物の山を築く繁華の市中へ、元來あれほどの名華一輪、其まゝ見遇さるゝ筈はなし、いづれ風聞に立つべき筈ながら、さて現在から立ち過ぎては藤助、ちと面白うないぞ、聊か身に取つての迷惑、第一は本尊の手前、この虎毒が可憎ら色香を採取するやうで氣の毒ぢや一はゝゝゝ面白うないとして、實は身も切らるゝほどに嫌な御迷惑でもない筈、また氣の毒ぢやとて今更ら其のお顔が、俄か細工であの花に鈎合ふだけの美男ともならぬ、これや世間の奴等が正直、見る目に無理のないところ、朝夕この藤助さへ、や、ふしぎの縁もあればあるもの、よく／＼狼狽た月下米神が結びかけての思案最中かと心得ます、はゝゝゝ」「白痴奴、よし其の、結び目に近

うても、今は思ひ切て祈らぬ三平ぢや」「いや、わざ／＼切て退けられいでも、此まゝの三様、どうなりますやら、自然の結び目に御遠慮のない事」「はゝゝゝまた此奴、そろ／＼夜明しの酒でも飲みたいか」「果は互に打笑ふ聲、横越の露女、そつと差覗いて、「あれ、何事やら、只お二人とも思へぬ賑しさほゝゝゝ」

## 其十三

人は太平の夢、世は元祿の華奢風流、然も前日に編ませし青蘭のまゝの色褪めぬを常とし、草履さへ伊達奴に穿替の幾足を持たせて「一町毎に脱捨てしといふ、その全盛の大江戸に天晴れ男が二夏を持越せし古編笠を戴きつゝ、この秋空まで垢染みたる素給一枚に冷飯草履ぼそぼそと歩みながら、さて藝は身を救ふ幸か不幸か、其の目／＼を市中の町道場に渡り先生の村田三平、今日は綿服なれど新しき羽織袴を纏うて、これまで聊染の道場いぢ／＼挨拶に立廻りぬ、加之も行く先々に同じ挨拶「や、その後いつ方へも暫時、本意ならぬ御無沙汰に打過ぎたが、今日あらためて一禮かた／＼の義は、我等これまで山の宿の追分に塙を構へて、其の日其の日の御相手に罷り出ましたれど、ちと仔細あつて今回、神田、逢初川の邊へ轉居いたし

た、ついては身勝手ながら今後いぢ／＼渡り歩いて御意も得られぬ境涯さりとて知らるゝ通り元來の浮世沙汰に不案内わけて當世事には至極の無器用もの、これといふ外に餘のない男、やはり木太刀の音でもさせずば喰へぬ奴、太平の殺潰しぢや、はゝゝゝ、折柄の幸ひ逢初川に近い御冷町の裏道、角の酒屋の空納屋を借受て我等の持道場と致した、但し從來お馴染甲斐の方々は却て一切、いかな事あらうとも入門の義お謝絶申し置くぞたゞ新参の新弟子ばかりを受けまする筈の心體、詮ずる所無言のまゝ、新に同じ業を開いては相濟まざる義と心得、わざと念の爲前々御禮を兼ねて斯く御挨拶に立廻る村田三平これにて御暇いたさう、や、御免なりませ」二日の間、江戸市中の下町筋、いづこの道場へも以上の外に何の世辭なき同じ口上ながら、これまでの業が確乎に物いふ身の一徳、いたるところに惜まれて、加之も祝ひの酒を強られつゝ、いよ／＼今日こゝを挨拶の仕終焉と神田橋の見附外、三河町の道場より立出で、はや夕暮近き鎌倉河岸を逢初川への歸途、折しも時ならぬ秋空の一雨、ばら／＼と降來れど、ほろ酔の面に却て小氣味よき體、其のまゝ悠々と歩みながら、ふと何氣なく傍の軒下を見れば、

これほどの小雨を槍でも降るかのやうに恐れての雨宿、雨若黨に草履取もるとも空を打仰ぐ若衆姿は例の本田家の一子一郎、遠波の小島づくして縫分けたる重給に萌黄柄の金鍔、きらと光らせて、日に見えぬ肌着の匂ひ得もいはれぬ風情、流れに添へる藪影の白梅に似たり、さらぬも三平、おもはず行過ぎし歩を停めて、のそ／＼と同じ軒下へ立寄りつゝ、加之も不意の無遠慮に主従の間へ割込で肩肘を張出しぬ、「この雨、このまゝでは何とやら、急に晴れまい雲行ぢや」小一郎主従氣色ばみ、や、おのれ無禮ものといへば、から／＼と大聲の高笑ひ、「はゝゝゝこの軒下を貸す宿の主人が言葉でもある事か、一進託生に驅込んで同じ雨宿りに少しの肩肘が觸つて何の無禮ぢや、生白き面自慢どこへ賣歩いての歸路やら、みれば女の生れ損ひ、紫帽子の歌舞伎野郎に似たる色若衆を主と押戴く分際で、他の無禮咎め推參な奴め、そこ退け、うてば纏く男ぢや、うか／＼」囁らば胴骨を踏碎くぞツ、村田三平、折しも例の一禮かた／＼市中の道場を立廻りて振舞酒に酔うたり、さらぬも元來その身に取て面白からぬ本田家の小倅まして庄左衛門が横死以來の今こゝに出逢うたが幸ひの面魂、泉の如き

大目玉を割出して虎髯いよ／＼喰反せば、はつと始めて心付きし主従、おもはず顔色を失ひつゝ立去らんとするを、三平手早く小一郎の袖ぐいと掴みぬ、「や、他の無禮を咎めたまふあとに一言の挨拶も残さず何處へ行かるゝ、降る雨まだ止まぬぞ、鎌倉河岸の片町ぢや前に雨宿りの軒下はないぞ、さりとて無益の暗喙を仕かける男でない、するだけの辭義を置いて行つしやい」大象の首綱をも引戻さんばかりの猿轡を伸して、片手は懷中のまゝの仁王立に小一郎が袖を掴みし勢ひ、横に振れば横に木葉の如く散るべし、前に引けば前に磁石の如く吸取らるべきし、もし突放せば其まゝ飛で堀中へ落込むべき體に、兩若黨おもはず三平が腕節へ確と抱付きぬ、「只今の無禮は我等、うかと致した口、主の存ぜぬ事、こゝ放されたい」「いかやうとも御謝罪いたす、御覽の通り若輩の主人萬事は我等兩人へ、ひらに、ひらに」

三平、やう／＼鷲掴みの手を放すや否、ぐるりと體をめぐらせば、かゝる事に得たる業、小一郎もろとも兩若黨を自然と軒下へ追込みし形勢、「はゝゝゝ紙子細工でない五體、これほどの小雨を厭うて、わざ／＼雨宿りせずとももの身ながら、實は今こゝを通行に何氣なう、ふと

見掛けた若衆振が蟲の居處に觸つての業ぢや、この男また其方で其人と知らるゝ苦、わけて近來、本所の割下水より逢初川の邊へ花の露、そつと滾きぬやうに持て移した男といへば猶更ら合點せらるゝ管、はゝゝゝさて互ひに名は語らねど、こゝまで打明けた以上、幸ひ遠くもない宿ぢや立寄られぬか、せめて新世帯の温茶一杯を遣ぜたい、番町より尾を振出した鶴鶴標といへば折も折から秋は此のころ一入の露の身に、いかばかりか嘸や嬉しき本望、また面白う談話相手になるべき下郎も居る事、初對面の顔のみではないぞよ、はゝゝゝ荒れたる猛牛の如く眞正面より角立つかと思ひの外、俄に打て變りし三様、色男の強ねたる如く倭しう味に溺んで面に不似合の苦笑を含みぬ。

其日々々を渡り歩いて可憐な業の切實なならずとも、それほどの武藝一流、別に一箇の町道場を構へて居ながらの大先生で濟む咎とは、藤助の言葉、親とも頼む人を失うては猶更の心細さ、わけて口惜しき番町の空を束の間も忘れぬ身、うかとすれば此の上また胡はるゝ身、あまり遠くへ行かれずに居て欲しやとは、露女の言葉、右左より勸められし此のころの三平に何の否があるべき、鐵筒に似たる太き首肯を忽

ち其の場に柔から首肯きぬ、加之も追分の裏長屋で米櫃に蜘蛛の巢の張りし頃とは違ひ、世間體は御家人風情ながら内證には人しれぬ用意金のありし古河の末流、その雪を時の方便に幸ひの事、逢初川より一町あまりの角に酒屋の空納屋を借受けつゝ、俄普請の町道場に仕立てて、門邊の表札に墨くろ／＼と人目に立つべき筆太の太文字、上泉本流指南所村田三平の十一字を掲げ出しぬ、隣り江戸市中いたるところの道場に渡り先生の名を得たる三平、猶更ら念のため改めて一體の挨拶に立廻りしかば、これまで馴染の方々へは一切師弟の義お謝絶いたすといへど、現在の業を惜まれ腕を慕うて朝夕それとはなしに出入するもの多く、言傳へ聞傳へて語り語はれつゝ新たに入門するもの絶えず、日は浅けれど思ひの外の大繁昌、半月あまりの後は木太刀の音に四邊を鳴響かして、上泉の本流といふよりも村田流の名に高し、その村田一流の鬼をも挫ぐ大先生、人の生肝でも三盃酸にして打喰ふほどの怖ろしき面魂を備へながら、近き逢初川の宿に歸れば聞くさへ優しき三平と呼ばれて、古今の名士も及ばぬ笑渦の露に迎へらるゝ冥加男、いよ／＼世間の風聞に立つのみか、現在かくと見る目の門弟中には、これ

ばかりを氣にかけ過ぎて武道の稽古も進まず、あまりの羨ましさに我身の無常を感じて浮世が嫌になる奴さへあり、例の藤助は家事一切を引受けて宿にのみ居れど、をり／＼道場へ来るを待構へし門弟ども、そつと小影に招いて内々の様子を聞けば、此奴、また元來の惡戯もの、四邊を憚りながら聲を潜めて語り出しぬ、「や、縁は異なもの、あれが先生より男一代、捨物の生命にかけた戀ならば偕て、まだしも不思議の中に情の念力、さうかと思ふ人もあれど、實は案外、あの花のやうな色香十七の春に、浮世萬人美男も富貴も選取次第の縁談を嫌ぢやとて、そも／＼あの眞黒な面に虎髯を喰反した六尺の大兵へ眞一文字の戀の山々、のぼりつめて一時は戀病の枕に瘦衰へたほどの思情、やう／＼神佛に届いての夫婦と見えまするか、見えぬところが猶更の深さで、加之も夜な／＼得もいはれぬ伽羅の匂ひに包んで、あの玉の腕の枕で引廻した屏風のうち、火にさへ焼けぬ荒男を袖夜着の隙間漏る風にも當てじと、百代に一夜の逢瀬を待策めたやうな陰言、それを木でも石でもない男一疋が横越の獨身に聞く辛さ苦しき、世間普通の給金では逆も無事に勤まりませぬぞ、は／＼第一あの髯面を刺らぬといふ

も、本人の刺らぬではなうて刺させぬからの事、あれほど迷うた目には何と見えるやら、土細工の達磨へ針を植込だやうな虎髯の尖頭が、ちくちくあの玉の顔へ刺す心地まで、いやや堪らんほどの嬉しげに／＼きくや否、ぼつとして氣の遠くなる奴もあり、きやツと俄に叫んで的もなく飛出す奴もあり。

#### 其十四

元來の氏素性、うまれついでに氣風、どれほど案外の男優りに出来たりとも、今は生涯を八重の汐路に流人の娘、やう／＼今年まだ二十歳に足らぬ女の身一個、まして奉行所より三年の外出を差止められし籠の鳥その餌を飼ひ羽色を守る奴さへなくば、飛ぶに飛ばず居るに居られず、焼くも煮るも我が手の自由自在と思ひしに、思ひの外素浪人あの虎髯奴が引取人となつて加之も神田の逢初川へ轉居以來これ見よがしの體と聞かや否、番町の屋敷に奥深く腕を組みし本田内記、いよ／＼人しれぬ眉を逆立てぬ、たゞさへ兼てより愛子のための片敵手、かくならずとも捨置けぬ奴が、わさ／＼兩國橋の葎簀屋にて若黨への面憎き傳言いひ、鎌倉河岸の雨宿りに傍若無人の振舞といひ、重ね重ねの我を賄付にせし奴、おのれ其のまゝには

と思へど、いかな縁でか追出せし藤助を引摺込で加之も念のため届けに來たほどの奴、うかとも手を出せぬ折柄、その逢初川の近傍へ同道場を構へて、ます／＼我を喧嘩腰に招くが如き面魂、わけて世間の噂に聞けば此のごろの取沙汰、たとひ同じ家に住むとも偕こればかりは案外あまりの不似合、よもやと思ひし彼女を其のまゝ宿の妻にせしげの體、もはや本田父子の面目いづこの瀬にも立難しと、猶更ら憤怒の拳を握りぬ、わけて本人の小一郎、あるにもあられぬ無念さ、やるに道場のない心外さ、今は叶はぬ戀よりも情よりも、夜な／＼人しれぬ心の怨恨と嫉妬に胸を擾亂されて、よし／＼×××の娘にもせよ彼れに増す花の色香を妻に持ちたき心、ならば彼れ等男女を世の中に生けて置きたくない氣、果は堪兼ねて斯くと父に迫れば、さらぬも父の内記、一粒種の子を思ふ胸の開路に迷うて、いと／＼猶更ら修羅を燃しぬ、「いや待て、あの藤助さへ敵手の懷中に巢を作らずば今が今、枯草を刈取るよりも容易い業ながら、藪を叩いて蛇を出すすやらの諺で、あの下郎め聊か竿頭が面倒ぢや、まづ當分は何事も知らぬ顔わざと寛めて置て、いよ／＼こゝぞと親ひ澄した的を外さず突落さいでは、まして三平とい

ふ素浪人め、老老の庄左衛門とは違つて、もはや再應あの手では行かぬらしい奴、なれど後日のため、兎も角も例の男を時に取つての間者、幸ひ彼奴の道場へ内々そつと、入門として置かうぞ、はゝゝゝ今に見よ、第一は身のほども知らいで汝に辛かりし女め、大らざる腕立の虎髯も後足に砂を蹴あげし藤助も以上三人、あつといふ間に一時の綱ぢや、はゝゝゝ」

\* \* \*

宵より奥の一室にありし露女、物の本にも讀飽て、まだ寝るには早し徒然のまゝ、そつと納戸の方へ立出づれば、折しも夕餐を差伸べて空腹の茶碗酒に代へし三平と藤助思はず振返ながら内證を見付られし體、からりと高く笑ひぬ、はゝゝゝあまりの静けさ、もう臥房かと思つたに、まだ寝られませずか、こりや一段と男振を下けたところを見られましたぞ、兎角この藤助め、何に付けても酒々と吐しをツて、はゝゝゝ「や、何が藤助でがな、わぎゝ、膝部を備へて夕餐めしますかといへば、此奴め氣の利かぬ奴ぢやとて其の、それ其の、酒の器どこで名を付けられましたやら、徳利と申すものに二分分の息目を添へて鼻頭へ突出されし上は家來の身、主命是非もなき次第にて、はゝゝゝ」

露女、おもはず袖に聲を包んで打笑ひながら、隔意もない此のごころの馴々しき、「ほゝゝゝ三様が善いやら、ゆかりの人が悪いやら、そのやうな事は置いて殿御の常、をりゝゝの酒氣なうては叶はぬものとやら、憂を拂ふ玉帯とさへ聞きまするに何の、わけて一日の道場で嘔や、お疲勞なされうはずの身、もし露の口にさへ合ひますれば、お酌も致さいで済まぬところぞ、ほゝゝゝ」ほろりとせし目には猶更ら冴えて美はしき花の姿、得もいはいれぬ匂ひ其のまゝ其處への風情に、溢るゝ茶碗酒を兩手に持添ながら儼に膝を組直す藤助、我れしらず徳利を抱へて座を譲りし三平、いよく互に改まるほどに心の酔を増しぬ、「藤助、早く飲め、すかぬ女性の方に酒の香も服はるゝものぢや、わけて下司の下唇を打鳴す體、男の目にさへ見苦しげ、わづか一杯に今更ら何を此奴が思案顔、ぐつと飲乾して仕舞へッ」「は、この一杯ぐつと情氣も無う均あけまして、あとの分は倍で、いかになりませうぞ」「もはや盃の遣取は面倒ぢや、幸ひ相方に持合つたが時の運次第で、まづ今夜このまゝの物別れぢや」「や、物別れとは相引に致して互ひに損のない事、さるを藤助が茶碗に一杯で、貴方様は徳利を抱へたまゝ、これ

が運次第の物別れとは」「はゝゝゝそりや五角の人と人となちや、君臣こゝに自然の禮あり、主従が平等になるか」「外の事は倍置いて、こればかりは」「見られましたか、酒となれば此奴こゝまで主従の差別もない奴はゝゝゝ」「御覽せられましたか、酒となれば現在、こゝまで家來に無慈悲な殿様、はゝゝゝ」露女いよく座にも得地へず打笑うて其のまゝ奥へ遁入らしなから、振返りての小聲「三様、お酒が済めば、あとで、そと御相談のいたしたい事、今夜に限られど、あの奥へ」

### 其十五

三平おもはず後影を見送りし油斷に藤助、そつと徳利を流んで口うつしの薄飲「や、此奴」「何が此奴で、はゝゝゝ」笑うて済むか、床興にもせよ、おのれが分の茶碗酒を乾して、主の分にまで手をかけるとは」「笑うて済まねば、あらためて藤助、ちと御不足を申したいところ、何は倍置目に見えたは現在の今あの優しい情らしい、わけて今夜は格別、一入の花の姿が風もないに飄然と振返つて、そもゝゝいかな色音が出ましたぞ、三様お酒が済めば内々そつと御談話したい事、あの奥へとは、どの奥への事」「こりや藤助、静肅にせい、聞えるぞ、聲が大き

いぞ」「かやうな時に酒が飲足らいでは、ふしぎや此奴、腹の蟲が騒いで次第に聲が張出しまする」「白癡奴こゝへ轉居以來の心體、兼々いふ通りぢや、今更この男が何の、あの女また猶更の事、たゞ聊か憚る内談でがな、汝に聞かせたうないばかりに奥へとの言葉ぢや、みぢん濁りも曇もない、互ひの清淨潔白なればこそ、氣も心も許し合つて斯く打解けた合住居なるをおのれ俄に跳返つて、この上まだ酒が飲足らぬとは」「はゝゝゝさりとて藤助、これで満足の御馳走に飲飽た御禮も申させぬ心地、汝に聞かせたうないばかりとは、その奥へ行かれまする貴方様へ案外いかやうな打解けた御内談あるかは存せず、あはれや此のまゝ後へ取残された奴めの心細さ、淋しさ辛さ、この秋の夜寒に冷たい空徳利を抱いて何となりまする、はゝゝゝせめて新に一升の酒それに取添うた下物が無うてはとこまでも主従、わけて今夜は御身邊を離れませぬ覺悟、はゝゝゝ」「やれ着蝨い奴、油斷のならぬ奴、うかくすれば主の寢首を揺て酒屋へ賣飛さうも知れぬ奴ぢや、はゝゝゝたとひ何事ありとも今後一切、これが例にならぬぞ藤助、そりや腰巾着のまゝ呉れてやる」追分の裏長屋に燈火もない眞黒闇を螢の如く這廻りし

時とは違ひ、此のころは道場の窓外まで村田一流と鳴響く境涯、づしりと重き腰巾着を笑ひながら抛出せば、藤助、片手に掴んで片手に主の袖、そつと引動かしぬ、「いよく今夜こそ、狼狽へて月下米神が舞込みましたぞ、白晝ならば兎も角、いつにない事、わざ／＼納戸口まで來られて加之も貴方様がほろ酔の體を幸ひ、あの奥へとは、やア事ぢや、嗟ながら酒を力に藤助め、お生命の無事を祈りまする、はゝゝゝ」「くどいぞ此奴、まだ吐すか」「吐しませいでか、これ吐さうでは藤助、いや唾でも無言では居りませぬ咎」「しッ」「はッ」三平、やをら座を起せば、藤助その背後より入らぬ事、わざ／＼襟首の亂れ毛を搔上げてぐわんと横面へ不意の拳を喰ひぬ、「痛、いッ」

武道にかけては鬼にも恐れぬ不敵の男なれど、さて何とやら今更の胸は蘇さぬ、朝夕に住馴れたる家の内なれど、今夜にかぎりで何とやら足の運も定めなき心地、藤助を相手に酔ひし茶碗酒も醒めて、漸／＼納戸の方より一室を隔てし奥の小座敷、燈火の漏るゝ影を窺へば、閉籠めし夜は伽羅の匂ひ一入さらに高し、「やれ、まだ寝られませぬか」待兼ねし風情の露女、その聲に機、そろりと開けて、片手に讀みかけし

物の本を打伏せながら、片手に燈火、音もなう彼方へ押遣りぬ、「お酒は済みましてか、身勝手ながらこれへ三様」三平、おのが五體を持餘すが如く座に入りて、見るとはなしに見れば見るほど偕も世にあるまじき天生、その名の露も滴るばかりの美はしき、くろ／＼と搔上げし大前髪に雪を敷く額口、いき／＼と張切る目元に慈とならぬ情を含んで鬨鬨の鬚つらに水際の立し襟首、ぼつと火影をうけて猶更ら白く涙渡りつゝ、小屏風の片隅なる伏籠に打かけし細衣の端、いかに今夜の玉の肌を包まんや、折しも秋の夜は更けたり外に人はなし、これで男が殺されずば木石の類、「いかな御談話でがなこの三平へ」露女、おもはず燈火の影に顔を反けて、流石それとも言兼ねしが、やがて花の丹唇、やう／＼開きぬ、「今夜に限らねど、お酒氣のあるが却つて幸ひの折柄、嗚や蓮葉な女と思はれますも存じの上ながら、三様、いつまで御獨身」きくや否、三平、六尺の大兵に骨の髄まで熱湯を注込まれし心地、くわつと上氣せて目も見えずなりぬ。

いつまで御獨身で居られますやらとの一言に、くわつと上氣せて目も見えずなりし三平、其のまゝ暫時の無言に差俯しが、やう／＼胴

骨を落付けて、わざと手帳の小聲に打笑ひぬ、  
「何を、はゝゝゝ何を、いかな御談話かと思つたに、はゝゝゝこりや山の事を海で聞くやうな門違ひ、はゝゝゝ」「あれ、お氣に觸れば、お謝罪もしまするに、只お門違ひとは」「はゝゝゝ假令この男それぞと待ち受けても、来る女の門違ひ」「来る女の、門違ひといはれまするは、來よう女のなにか」「まづ無い筈」「もし、あれば三様何となされまするぞ、さりとて生涯お獨身か」「あれば儲、もし萬一その好奇心な女であれば、世間の手前へ御免なりませ此の面で、や、迎へまする段か、木でなし石でなし、わけて脆い奴、眞實、神もつて友白髮の末の末まで」「女子でさへ美貌よりも心とやらそれに何の、世を氣で持つ筈の男として顔、容姿が、はゝゝゝ呵しや三様とも思はれぬ事、さてゝゝお氣の弱い仰せ」「や、氣も弱うなりませいでか、お身の前では猶更の事、重ねゝ思へば思ふほど、面皮のない男ぢや」「えゝ三様、それ言はぬ事、それ、お聞き申しては、こゝに居られぬ露、消も入りたうなりまするぞこの身とて、否、これが既に一方ならぬ深い御縁、これほどの御縁あればこそ、かうも打解けて、こゝまでの思召に縋り、お力に預かる身、なれど、辛や、なれど

三様、この身には、たゞ一事、いふにいはれぬ神佛へ誓ひ立の心願で、この露こそ其の一事が叶はねば生涯の獨身、女子一代を無にして、此のまゝ浮世に反きまする覺悟の露が何事ぞ、餘所の獨身を苦にせいでもの事ながら、この身ほど辛い理由のあらう筈もない三様、さるを可憐ら男の不吉な仰せ、一時も早う、お迎へなされて、露がための姉御とも、妹とも見て暮したく、さすれば此の上また猶更の同意なう、お願ひ申したい事も山々、いつまで同じ家の内に獨身の露と獨身の三様では、いかに互ひの心と心が清うても、男づくといふ事を得知らぬ輕薄な人の口、また女子は女子だけに見るゝ世間の日、いちゝ言譯もせられねば」「今が今にも戀と情に溢れし露雪、觸らば其のまゝ手に落つるかと思ひの外、きけば言葉の端々を磨澄せしが如き凜々しさに一時は上氣せて目の見えざりし三平、はツと夜の明けし心地、我れに恥ぢての兩眼を見開きぬ。

\* \* \*

その後に自己ばかり悄然と取殘されし藤助の顔、主従なればこそ、もし見ず知らずの他人ならば、腰巾着の一筒を抛出されて濟さぬ筈の今宵、わづか酒一升を友として無事には居ら

れぬ筈の納戸口に、我も木でなし石でなし生て血の氣の通ふ男一疋、實は聊か嬉しからぬ大胡坐を搔て、死なば此のまゝの總鎧を煮立てながら、茶碗酒の續け飲に的なき四邊を朦朧たる醉眼に睨み廻しつゝ、そろゝ白棄腹より鼻唄を唸りかけし折しも、三平、のそりと出來りぬ、藤助かくと見るや否、俄に首を縮めて、顔越の忍び笑ひ、きゅつくと臆の啼音に似たり、「やれ、まだ夜が明かせませぬに、わけて秋の夜の長さに、つい一踏きの通路を誰に御遠慮なされたやら、こりや案外お早い事、はゝゝゝ、殘酒なれど、お氣付の一杯、めしませぬか、斯やうな時こそ却つて百藥の長」「三平、じろりと見遣りしみの體、無言のまゝ、夜具を引摺出して五體を横に包めば、藤助、いよく堪らず、酒には酔うたり倍はと首肯しながら、甲繩を押へられし龜の如く首を捻つて差伸しぬ、「いかにもさう無うて叶はぬところ、かうあるべき筈は答ながら、さて只今まで氣も狂はず神妙に罷り在りました藤助め、こゝで何となりまする、ことし三十男、睡りもせいで御覽の通り、これに居りまするぞ」

いかに差伸しても首では足らず、どれほど囁き出しても言葉で肩か藤助、そツと這寄て

夜着の裾邊に手をかけんとする一刹那、大力の寝脚に顔を蹴飛ばされて、ぎやツと叫びながら起きも得やらず、伏轉びしまゝに半泣の苦しき聲、「や御無禮ぢや、この忠義者を先刻は不意の横面、今また無言の頃とは倍」やうく身を起して見れば、我よりも主の三平まつ夜具の上に起直ッて、ざろりと兩眼を光らしぬ、「藤助、それへ出い、おのれ今夜この三平を何と心得た、あの奥での仔細、おのれが汚い心に引當て、事も事に依りけりぢや無禮者め、重ねて酒を呉れたは我が過誤ながら、そこまで喚ひ酔うて、や、主の寢床に手をかけるとは此奴、ヅツと出い、こりや藤助、この三平は儲置いて、あの奥の女に濟まぬぞ、やうく今年まだ二十歳に足らぬ身なれど、あれを世間たゞの女性と思ふか、この六尺の髯男が、眞實、あるにもあらぬ心に恥ぢて面も得あけず、磐石に頭を壓さるゝ心地、すごく引退ッて來たぞ」

## 第十六

逢初川の宿と鍛冶町の道場と僅か一町あまりの間に、同じ家並び三軒を買潰して此のごろ候かの大普請に玄關構の嚴めしと、門前の駒寄、門内の供待、さては出入に乗物の用意、下男下女の夥しき體、いかなる有徳の武家が

好奇心の町住居かと思へば、恭しく掲げ出せし厚板塗の大名札に天下御免御大醫者小川平庵の十二字、あり／＼と現はれぬ、かくなりし身の露女、さらぬも犬には人しれぬ怨恨の數々、わけて朝夕その門前を往來の村田三平、いとど痛癢に觸つて面白からぬ心地、おもはず面を鐵め虎髯を喰反しながら、道場の稽古休息に門人を相手の茶飲談話、「や、世の中、變れば變るものぢや、近來は人間の名譽、どこにあるやら、親兄弟の九死一生に捜し歩いても、さて知れかぬるが、犬に御の字を戴かして家業に天下銘を打つた者婆扁鵲が此の近處へ鼻を突くやうな大玄關を張出したぞ、四足の療治に名を得た醫者殿といへば同じ四本の脚を持った横垣壁の小細工もせらるゝでがな、はゝゝゝ」聊か酒氣を帯びて四邊かまはぬ大聲、木太刀の音に等しく窓を漏るゝばかりに高く笑へば、放火夜盜の罪よりも大沙汰の怖ろしき此のごろの世上門人いづれもおもはず眉を擡めて憚る中に一人、かの小川平庵が身の來歴を知る男かと饒舌出しぬ、「埋れ木に花咲く人の運命と金庫を覗ぶ家虎切とは、いつ何時、いかな不意に向うて來るやら、現在あの全盛に乗物を飛す冥加醫者は元來、京洛より流れ込で神田の多町邊に袖

乞と壁一重の境涯、朝は町内の辻掃除で晝は追舞されて町小使で夜は火の用心の拍子木を打鳴して、やう／＼露命を繋いで來た男が、その多町に飼犬の發病した時、どうした紛れの中に何の煮汁やら、煎じ出した藥の效能が風聞の基で、偕また犬の病氣一切は不思議と其の煎藥に限るが猶更の不思議、や、その後の繁昌も繁昌、佐渡の土氣が舞込むやうな俄の犬身代、平助々々と酒屋の小僧にまで呼ばれた奴が忽ち小川平庵老と立てられて夢のやうな一足飛の大出世、近ごろ聞けば當時天下出頭たる御大老あの柳澤家へも親しう召されて出入するほどの身分、また生類憐愍の御政道中にも別して戌年の御出生と聞及ぶ將軍家の御意に叶うて、いづれ近々のうち直參格にせらるゝとの事、なるほど人は世に連れての運次第一三平いよ／＼腹の蟲の跳返る心地して一入さらに大聲の高笑ひ、「いかにも、それぢや、人らしい道では連も出世が聲でないぞ、なるべく人間に縁の遠い畜生か化物の御助力を蒙るが專一ぢや、はゝゝゝ文武兩道を汗水に勵むよりは、せめて猫か鼠の糞でも丸藥にして吞むが近道ぢや、はゝゝゝあの犬醫者も多町で満足に朝夕三度の飯を喰へば今日の全盛はない筈を、幸ひと喰外れた空

腹へ夜なく人知れず犬の糞を舐めて喰ひ込んだ冥加でがなはゝゝゝ

みすく飢死する奴を其のまゝの見殺にもしならず、第一は無宿の行倒人、この町内の面倒なりとて、幸ひの辻小屋に住はせつゝ軒竝びの朝掃除と火の用心の夜番に拾ひあげられ、やうやう多町一體の残飯冷汁に養はれし平助が、ふしぎの運に向ひ案外の世の中に出逢うて天下御免御大醫者小川平庵といふ俄か出世の大身代、新に嚴めしき玄關屋敷を構へて六尺の肩を揃へし乗物を飛すほどの威勢、當世の冥加男これ一八と言囃されぬ、世間の目よりは兒戯にも外れし白癡の骨頂なれど、本人の身に取ては實に御大様の小川平庵、其のころ京都に名高き人形師を遙々と呼下して、北壯の一對を生けるが如き巧妙の木彫に作らしめ、金銀珠玉の首輪を飾り綾錦の幕を打廻し招續親子の尊を重ねて上段の間に安置し、朝夕の燈明を奉つり三度の供物を備へ身を清めて隨喜湯仰の涙に禮拜するとの事、いつしか公儀に聞えて白銀五十枚の御褒美を賜はりしのみか、家業ながらも心掛の殊勝さ神妙の至極なりとて隔日に破格の登城を許され、將軍家御手飼の御大脈を伺ひしかば、時を得猿の平庵いよく自己一人の犬狗狹

を會釋もなく仰し切て、諸侯方と雖も禮物の薄きところへは容易く招きに應ぜず、平大名が旗本衆の犬は一切呼寄せて療治するほどの體、さりとして此奴また有徳の町人よりといへば食事の箸と茶碗を抛出して利慾に飛で行く五十七の禿頭、わづか四五五年のうちに二棟の道具庫と金庫を築きあげつゝ人知れぬ内證また十三箇所の地主とまでなり終ぬ。

### 其十七

わけて小川平庵、其のころ百五十俵の小普請組より當時天下の大老職となりて加之も將軍家を掌中に握りしといふ柳澤美濃守が古今無類の權威を神明佛陀の如くに打仰ぐ折柄、一日これまた大の療治に呼ばれしを幸ひ、こゝばかりは流石の利慾坊主も倒まに追従輕薄の音物を近侍の徒輩に運び込でいつしか出入を許されつゝ果は酒宴の末席にも召寄せらるゝを浮世の金城鐵壁と心得て、うかくすれば日本國中ありとあらゆる人間の醫者より運上金も取立かねぬほどの勢ひに、恐れて呆れて世間いづれも目を欲て舌を巻ぬ。

さるを此の小川平庵が住居より僅か半町あまりの裏道に構へし町道場の窓を漏れて往來に聞ゆる高笑ひの罵詈雑言、折しも窓下へ通りか

かりし平庵の下男、かくと聞くや否、走歸つて猶更尾に鯨を添へしかば、くわつと思はず憤怒の兩眼を音するばかりに光らしぬ、「や、おのれ、いかに物事を辨へぬ奴とはいへ、勿體なくも將軍家御秘藏の御大脈を伺ひ御大老の御最屋にさへ預かる當時この小川平庵を何と心得た生命不知ぢや、檜炬燵の療治もする筈とは吐しも吐したぞ、こりや平庵一人に對しての奴でない、正しく天下の御政道を批判する奴ぢや、この近處に其のまゝ捨て置いては上への恐れあり、おのれ今に見よッ」

せめて五町十町の間を隔てし他所でもある事か、つい裏道の半町あまり、同じ町内に我れを罵る奴ありと聞いて、烈火の如くに憤りしのみか、天下の謀叛人でも見付出したる如くに騒ぎぬ、されど近來この鍛冶町へ新に家屋敷を構へて引移りし折柄、まだ町内に住むものの委細を知らねば、まづ内々そつと問合せしに、あの道場主は六尺大兵の、見るさへ物凄き髯男にて、加之も武藝一流に敵なしとの風聞、また逢初川の宿には妹ににしても案外の不似合、妻には猶更ら凡そ江戸中にあるまじき十八九の色香を包んで、古今の名畫も及ばぬ美人ありと聞て、この平庵坊主、ことし五十九の禿頭を倒

けつ、俄に一思案の腕を組始めぬ。

まだ寝るには早き納戸の一室に、脇枕の折しも、珍らしや訪来る人の足音、静に案内を乞ふ聲、藤助、まづ出でての挨拶、いづ方よりぞと問へば、四十ばかりの見知らぬ男ながら、浮世馴れたる口振に慇懃の體、「こりや御近處へ此のごろ引移り越しましたものの召使、わけて初対面の事に猶更の身勝手ながら、實は内々、そと伺ひ申したい義で、かやうに夜中の推參、あしからず御取次を願ひまする」納戸の一室より障子越しに三平の聲、「何の御用かは知らず、藤助、そこで其まゝ承れ」藤助、振り返りながらの笑ひ聲、「はゝゝゝ聞かれます通り手前主人は只今、生憎と聊か酒後の折柄で、「いや可憐にお心持よう御酒まゐられたとあればさて今夜に限らぬ事、また改めて委細は明朝、なれど、もはや相方お互ひに御近處同士、お馴染甲斐を下された事と致して、御心易う伺ひたいは、町内の風聞花も毒も及ばぬとやら、いやはや、とりゝの取沙汰その十八九の美はしい女性に御當家の妹、御であられますか、但し御内實でな、これは小川平庵と申して近來、銀治町へ新居敷を構へましたものの家來で」

きくや否、藤助よりも納戸の一室に脇枕せし三平むくりと起直りし體、障子越しに猛牛の唸るが如し、「むゝ小川平庵といへば近來、あの嚴めしい玄關を構へられた犬醫者殿や、その犬醫者殿が縁も由緒もない我等方へ初めての使者口上、毛色の變つた四足の論議にでも御座ツたかに思ふに、や、正しく人間の種に生れた女を指して、ありや、妹か女房かとは家業の外に異な問合せぢや、藤助、門口の戸締りして其の人これへ通せぢきゝの挨拶してくれ」

たゞ腹の蟲の不承知だけならば使者に來た奴の素首を捻伏せて門口へ拋出すべき筈なれど、癩癩も癩癩、あまりの癩癩玉に觸り過ぎて呆れ果てし三平、まづ其奴を無事に納戸の一室へ引入れつゝ、大朝生のまゝ睨み返す挨拶振、藤助は此方に握拳を固めて待受けながら、いざといはゞ飛込で横面を打喰はすべき勢ひ、さても奥よりの露女はいかになり行く事ぞと横越に小耳を翫て、猶更ら我身の上と思へば口惜しげの風情、それと知るや知らずや四十あまりの浮世馴れたる口達者な奴、わざと輕薄の微笑を浮べて、此奴また案外に大膽なり、「お氣に觸りますれば、いかやうとも本人の平庵、御不足を受けまする覺悟、私儀は平庵に召使はるゝ

身として致方も無う今夜これへ伺ひましたる次第、この邊を篤と御合點下されましての上、さて只今の一件、はゝゝゝ貴方様お内儀とあれば一も二もない筈、萬事お謝罪いたして此のまゝ追歸さるゝが當然の事ながら、もしや、あの女性お妹御か、但し他より御預かりの方でもあれば、内々そつと打解けた御相談を申上げた義で、つまるところ、あまり御容貌が勝れて世間の風聞に立たれましたが却て、御迷惑のやうなれど、また浮世これが御運の開く基となり、思ひの外の御徳俤、いかな御出世なさりやうも知れぬ事は、はゝゝゝ三平きろりと光る大目玉、掌に骨するばかり虎髯を逆撫でぬ、「固り身が妻でない、同胞の妹でもない、いはゞ或方より大切の預かり女、それに就て内々の相談とは、まづ兎も角も聞かうぞ」や、御内實でない以上、これ何よりの事、實は平庵、御承知の通り當今の世上に二人と無う用ひられまして、隔日に破格の登城まで許されますほどの身分、わけて天下御政道の柄を握られます執權職、あの御大老の柳澤家へは殆ど譜代同様の出入人で、をりゝ御内安にも召されますれば、自然また種々の御内意も承る中に近來、こりや世間内分の義ながら、柳澤様ちきゝ

の思召として平庵への御言葉さのみ氏素性の詮鑿は入らねど芳紀、凡そ二十歳前後にて萬人に勝れた美女あらば知らせよ、第一は其の女冥加に餘る出世となる事、第二には其の女の親兄弟、運よくば遠縁に連なる親戚の端まで、一時に浮び出すほどの事、もし即座の金銀所望とあらば千金も惜しうないぞ、女の容色と氣心次第で萬金も遣はすべしとの仰せ、平庵、その以來こゝに三月あまりも油斷なく諸方診議いたしますれど、さて廣い江戸中に名花一輪、これならばといふ美女も見當りませず、みすゝの運の神を取遁すかのやう、頻と残念に心得ます折柄、幸ひ町内の風聞にて御當家に、御容貌と申し芳紀と申し、それが御内實でもない上は猶更ら以ての事、もし柳澤様お生育分として恐れ多くも將軍家の御伽へ差上げらるゝ義にもならうかと、平庵の意をうけまして私儀、わざわざ御相談のため「村田三平、きくや否、大胡坐のまゝ雙腕を組で其の男の面體、ちつと覗みためぬ、いかに身が妻でなく妹でもなく、さる方よりの預かり女、いづれ生涯あのみ、獨身に白髪未まで居らうとは、誰が目にも見えぬ筈ながら、さて小川平庵といふ大醫者殿の見出に逢うて假令、どれほどの出世、どれほ

どの運に叶ふか知らず、賤しい金銀に代て可憎ら清淨無垢の身を賣物同然の妾奉公に出せとは、家外の沙汰も通り越して言語に絶た慮外な奴、口は自己の口なれどようも吐したぞ、野末の小屋に連添ふとも縁あらば夫婦、妻は玉の輿でも妾ぢや、じたい平庵といふ畜生醫者、この男を何と見違つた、あの女を何と思つての使者ぢや、いふまでもなく人間に遠い奴、つまりは犬畜生と同じ腹加減に出来たればこそ、四足の療治に効を得た醫者でもあらうが、はゝあまり狼狽した外れの鑑定ぢや、本人の坊主奴こゝへ來ぬが僥倖、おのれも素頭の缺散らぬうちに土下座して這歸れ、や、ふしぎに相手かまはず大膽な事いふ奴、あればあるものぢや、はゝゝゝ平庵が使者の四十男、あつと驚いて遁出すかと思ひの外いよく、案外根強い奴、こゝぞといはねばかりの額越に三平を見上げながら、にやりと笑ひぬ。

「お言葉、いちくゝ承りましたが、あらためて今更ら主人へ申傳へずとも、實は一昨日の晝過、あの裏道の道場にて窓を漏れたる大聲を、其のまゝ聞取ました下男より、謝々承知の上の平庵、かりそめにも當時の身分として聞捨には致さぬ筈ながら、それさへ一言の不足も申入れい

で、かやうに別段の義を御相談いたしまするは、僭、よくゝの事、また妾奉公とは申せ、これが平庵その身の妾にでも義ならば兎も角、天下の御大老たる柳澤様ぢきゝの御内意として恐れ多くも將軍家お伽に差上らるゝやら知れぬほどな冥加至極の事、玉の輿も興たゞの興とは違つて一足飛に飛放れた御出世の水上、わざわざこの運の神を取遁されますか、さりとては浮世、あまり勿體ない、いや、勿體ないばかりで済めば、まだしもなれども、平庵その身の心外を僭置いて折角こゝまでの骨折を潰されました以上はよもや一昨日の惡口、今夜また先刻よりの雜言其のまゝには差置きますまい筈、天下御免の銘を戴いて上様御手御の御犬脈を、伺ひ御大老の御目かけらるゝ身分で御座りまするぞ、さるを口汚う畜生醫者の、四足と同じ腹加減に出来た奴の、人間に遠い奴のと、こりや平庵の一身土ばかりでなく、いはゞ御政道に觸れた事、何と思はれまする、女としては日本一の出世女を出さるゝか但し舌一枚の業で生涯破滅の禍を取らるゝかの境目ぢや、かく申す我等も世に連て今こそ醫者の番役いたすが、元は武家浪人の果、たゞ素丁稚の口上使者と見られては聊か不本意の迷惑、否か、應か、確と

した御返答を承りたし、次第に本音を吹いて手強く曲り出したる體に、もはや堪らぬ村田三平、無言のまゝ猿轡を差叩すや否、胸倉ぐいと引摺みぬ、「や、うぬッ」聲もろとも待兼ねし、藤助、握拳を振廻して飛込ぬ、「畜生めッ」

村田三平が大力の早業に取て抛げられ、藤助が握拳に激飛されて、口ほどにもない奴、不具にならぬを身の儘倅に遁出しながら、かくと平庵に告ぐれば、この犬醫者、いよく坊主頭を振立て、猶更ら胸に一物ありげの體、その翌日夜に入りて後、人知れず内々そツと柳澤美濃守が居敷へ馳込みぬ、いづれ此のまゝには濟むべき筈なし、いかに出直して来るやらと、待受けし覺悟の前の三平、今朝か、今夜かと思ひの外、ふしぎや何の音もなければ、聊か張合の抜けし心地、されど此の後もし藥臭い奴の來次第に飛で來いと藤助に言合めて、其のまゝ平生の如く裏道の道場へ通ひぬ、平庵の使者を叩き歸してより四日目の晝頃、門口へ若黨と草履取を差置で、見馴れぬ武士一人、ぬツと不意に入來りぬ、「たのむ、誰か居らぬか、たのむぞ一折しも裏口に湯殿の水を汲入れし藤助、聲に出來りしが、流石に久しく武家奉公せし男、日早く身分の程

を見て取て、さらに慇懃の腰を打屈めぬ、「は、いづれ様より、何の御用で」別段これといふ、公邊がましい用でもないが、柳澤家より來たものぢや、當家に露といはるゝ女性ある筈、それに逢ひたい取次せい」藤助、きくや否、はツと思ひしが、わざと落着たる體、「いかにも仰せの露と申すもの、居りまするが、まだ今年、やうやう二十歳に足りませぬ初心女の事、わけて平生より往來の際見えへ致しませぬ身、猶更ら初対面の御方には、もし露に就ての御用とあらば、萬事、後見いたし居りまする男、只今は迎へまするで」は、い、いや其の男、わざわざ呼戻すに及ばぬぞ、よし呼びに參つたところゝが急には歸れまい、我等同役の二人あの道場へ向うて應對最中の筈ぢや、次第に依れば其のまゝ居敷へ連行かうも知れぬ折柄ぢや、但し安堵いたせ、これと別段、むづかしう角立つた義ではないぞ、第一それに拘らず今日こゝへの用は本人の露女にある事、是非に逢はうぞ」藤助、いよゝ苦しげの體、兎も角も三平の顔を見るまではと、ますゝ小腰を屈めて一時の方便口、「は、は、なれど、さう承りますれば、致方なく、そと私奴より申上げませいでばならぬ次第、無事に罷り居りまするものの實は露の

身、さる仔細のため、お奉行所より兼て御各め中の女で門口一歩もなりませぬほどの事、まして叨りに勝手がましう人様へは「いやゝゝ、その細りにも及ばぬ、元は本所割下水の御家人木原庄左衛門の養女分、さる仔細とは兩國橋の上にて御禁物を川中へ云々の事で三年市中往來差止の女と委細承知の上ぢや、考へても見いたゞ一應の取調もなく當時格別に重き御役柄の家來が、わざゝ女一人を尋ねに來るゝか、其の方は召使はれの分際、入らざる口敷を置いて取次せい」一つの程にか足音もなき露女、そツと障子を開けて、畫ける如き風情、いと靜かに頭を垂れぬ、「仰せられまする露、これに御出迎ひ、手狭ながら、お通り遊ばされませ」

### 其十八

いつしか霜夜の鐘の音に更渡りて、いと猶更靜けき奥の一室に燈火を挿みながらさても浮世の辛さ、あはれ戀にはあらぬ三平と露女、また聊か事の面倒になればとて、この三平が一身で濟むべき筈と思ひの外、こりや案外、うかと手廻い難題の相手に出逢うた、柳澤は當時の出頭第一、わづか百五十俵の小普請組より

天下の大老とまで這出して加之も前後無類の權勢、飛鳥も落すとやらの風聞、や、今更ながら實に口は禍の基で、さらぬも憂が上に一人の憂目を見せまする。「何の、皆この身の斯うなる不運の果でがな、おのれやれと、思へば思ふほど口惜しけれど、もはや大醫者の事は置いて、今日この柳澤家の人に差當る否應の返辭、是非に迫られた時」「その時、いかに返答された、この三平も道場で二人の奴に縣詰の難題をかけられて、なれど、こりや先づ以て我れへの難題ばかりと心得まさか本人の根城へ同じ時刻に攻込んだ奴あらうとは、夢さならぬ事、わざと手間取らせて日の暮るゝを待受け、其のまゝ満路の料理茶屋へ誘ひ出して、酒に酔はして歸して上の今夜、ゆるゝ談合いたさうと思つたは南無三寶、却て敵の術に乗せられた三平の白癡さ、つまり其の場に邪魔な我れこそ退拂はれた油斷大敵、但し其の場の返答、いかにせられたぞ」「力に思ふ貴方様の影はなし、あの藤殿も出られず擧かれて餘所ながら氣を焦るばかりの事、この身たゞ一人が、さりとて現在、我が身の上、述も通れぬ深水の瀬戸と諦めて」「やれ、嗚やむく儲、いかに何と返答せられた」「根の浅い、女子の智慧なれど、時に取つての事、これ

傳倅に、此方よりも三箇の難題を」「やそれほどの場合で、まじろぎもせず逆擊に三箇の難題を仕かけられたとは、流石に越後家の名物と叫はれた絲魚川の城主、萩田の息女ぢや」「三箇のうち、一箇は、八丈島に流罪の父を召還する事、一箇は、養ひ親の木原庄左衛門が下手人を急に嚴しい御詮議の上、召捕るゝ事、また一箇は此の身三年市中往來差止の義を許さるゝ事、以上三箇を御聞届け下さいいでは、よしや冥加に餘るほどの有難い、思召に従へばとて流人の娘、お咎め中の女、養父恩義の仇も得返さぬ腑甲斐なきものが、勿體ない何として上々様の御身に近う、お伽の御奉公がならうかと」「出来された、この三平づれが生涯の智慧袋を絞ればとて、及ばぬ事、天晴れ出来されたぞ、加之も理詰に動かぬ難題ぢや、但し其の時、柳澤の家人奴、いかな面をせしやら」「ほほゝゝたゞ呆れ顔」「さも無うてか、はゝゝこりや懨々喧嘩腰の外に用のない三平が其の場に居らいて結句の重疊、なれど柳澤が當時の勢ひ、もし萬一、以上の三箇を聞届けた曉は」「はて自害するまでの事」「三平おもはず五體を正して其の顔を打守れば、恐ろしや自然の名花これほどの優しい色香に何として斯る不思

議の大膽さぞ、もの凄きまで美はしく冴渡る面一點の憂もなしやうゝ百五十俵の彌太郎より身を起しながら、徳川の流れも深き五代目の水底を片手業に探りぬいて、忽ち天下の大老となりしほどの柳澤美濃守、そもゝ人間と大寄生の生命いづれが重い輕いを知らざるべきや、されど戊年の將軍家を幸ひ、鹿と馬との古事を眼前の今こゝに現せし勢ひ、自己が腹心の護持院御正を手品の種に使うて物の見事に癡けたる生類憐愍の嚴令を布かしめ、また古今無雙の女色をもて大樹の根本を喰取らせんとすれど、年來の數多く觀めし美女いづれも我意に叶ふほどの魔力もなく、只これのみ求め兼ねし折も折柄、出入坊主の大醫者より注進の逸物、それ見て來よと差向けし家來に聞けば、猶更ら萬人に勝れし名花一輪この上なしとの事に、思はず小膝を打ちぬ、加之も其の女、岡リ氏素性の知れざる下司腹の生來ではなく、かの越後家に唄はれし萩田主馬が娘と聞くのみか、四邊に入なき縣詰の難題にさへ顔色も變ず氣も狼狽す靜かに丹花の唇端を開いて、逆寄の理詰に三箇條の難題を仕返せしと聞かや否、さても希代の才色、兩全、それほどの女を暫し我が手許に仕込で、君側へ差出さば、百萬石の

大名を味方に取るよりも面白しと、宛がら御客の名劔を得たる心地いよく人しれぬ手を伸しぬ、されど三箇條のうち、天下の御一門に聯なりし越後家が斷絶するほどの大騒動に善悪は倍置て其の一方の棟梁となりしもの、わけて平付でもある事か大名分の取扱ひせられて終魚川の城主たりし萩田主馬を、大赦の沙汰もなき今更流罪の配所より召還すは容易ならざる重大の事、たゞ養父横死の下手人を詮議の一條と本人が三年の市中往來差止を許すだけの一條とは、我が手加減に何より易き事なりとて、俄に町奉行へ内密の嚴命を下しぬ。

委細は知らず政道一切を掌中に握る時の大老より、びかりと稻妻の如く頭上へ浴せられし嚴命を蒙るや否、町奉行の驚愕、その日のうちに露女が引取人の村川三平を呼出して、其の後花の神妙なる體に免じ別格の御慈悲を以て三年間江戸市中往來差止の義は今日かきりの事、以後は本人の身勝手たるべしと許せし上、養父木原庄左衛門横死の件に就て萬一それかと思ふ心當りの者あらば憚らず内通せよとの事まで口添せし後、俄に八方へ日夜の手を廻して浪に群千鳥の飛立つが如く、寸隙もない厳しい詮議沙汰とぞなりぬ、かくと聞て聊か手盛の一服を盛損

ねた心地は大醫者の小川平庵、四足の畜生と同じ腹工合なりや格炬燵の小細工もする筈の奴ぢやと、嚙で吐出す如くに罵られただけの義、また使者に立ちし例の四十男は三年の大力に抛出され藤助の握拳に張飛されしみの業、わけて薄々ながら俄に庄左衛門が横死の詮議厳しくなりしを漏聞て、あまり案外の不意に顔色を失ひしは、かの番町の穴より蛇の如く鎌首を立て、覗ひし本内記、今は却て自己父子の影を覗はるゝ心地して青くなりぬ。

天生自然の容色、敵に覗はれては猶更ら口惜しき身の禍害となり、たま／＼味方に取られても辛や同じ身の禍害となる露女の不運さ、あはれ派の種より咲出でし色香に生れしか、可惜ら花の姿を空しく三年の浮世に埋められて、江戸市中の往來も叶はぬ身を今こゝに許されつゝ、また束の間も得忘れざりし庄左衛門が無念の仇さへ、いづれ厳しき詮議の嚙に召捕らるゝかと思へば氣も勇みて嬉しけれど、年來の神かけ第一の念願、八重の汐路を隔てし鳥陰の父が事、その淋しき父が朝夕の浪枕に附添ふ人、これぞ心の底に誓ひし我が良人の事、その後さらに何の沙汰もなし、さりとて眼前、この念願が叶へば其のまゝ此の身を本意なき業に汚さず済

まぬ筈、懐かしき父のため戀しき人のため、いかな浮世の憂目に逢ふとも、怨まれど厭はねど、さしも北國に唄はれし名物の一人娘が何の淺ましきぞ、外に工夫のない事か、たとひ玉の輿にもせよ身の全盛にせよ時の繁華にせよ、それと見て喜ばるゝ父でなし、かくと聞て譽むべき良人でもあるまじ、所詮は生命一箇の拾物さ／＼惜からねど、同じ捨つる身ならば、一時も早う絶て久しき父の御顔を見だし、夢うつゝに等しき縁ながら、せめて平日なりとも露の名を其の人の妻と呼ばれたし、いかに平生の氣心は男優りに猛くとも、かくなれば流石に女なりけり、いつしか揺亂るゝ胸の裡、父は偕置もし其の人に逢うての我が身、今こそ戀ならねど、これほどまでに慕はれし三様への辛き切なさ、いと猶更ら苦しう、あるにもあらぬ管だれほどの苦痛ぞと、はや身を寸斷に切刻まるゝ心地して打沈みぬ、されど生れつゝの露女、顔色の端にも出さず、善いにせよ惡いにせよ今日こそ籠の鳥の雲井に放たるゝ氣だとて、さらぬだに艶々しき鵝鴨の黒髪を五味麴に搔上げつゝ、げにや錦上に花の香を添ふる紅粉の粧ひ、わざとならねど武家風と町風とを取合せし一際伊達小袖、幸ひ近き神田明神へ厄

免れの御禮参詣といへば、三平、おもはず微笑を浮べて見返りぬ、「や、それ何より以ての事、但し此のごろの御身ぢや、けふ初めての外出に一人歩行は、ちと氣がかりの折柄あの藤助を召連れて「ほゝゝゝそれに及びませいで、折角の御言葉」「藤助、藤助、これへ来い、さて明神へ参詣せらるゝぞ、随分と油斷なく途中の萬事に氣を取外すなわけて人混雜の中だけ猶更ら自然と目立つ等ぢや、うかゞするな」「は、確と預かりますで」「おのれ自慢顔に、わざと入らざる無用の道路を立廻らうも知れぬ奴、まかりならぬぞ」「こりや迷惑な御鑑定、この藤助さやうな奴に見えますか」「見える段か餘所ながら夫婦面も仕兼ねぬ奴ぢや、はゝゝゝ一條所ながらも、それに似合ますれば藤助、男冥利、ついでに其のまゝ明神へ無理願望を祈りませうか、はゝゝゝ」

### 其十九

淋しき霜林の冬空には、いとゞ猶更ら目立つ名花一輪、逢初川の宿より鍛冶町を筋違御門に出でつゝ神田明神への途上、いかな白髪のお爺にも思はず目鏡越の歩を停めさせ、年若き男には見送り見返る魂膽、うつとりとさせて、低き藤助の鼻まで高根の心地に蠢きぬ、清淨無

垢、かくてぞ神も納受ましますかと思はるゝ露女の風情、まづ社務所に供物料を備へて後、本社に詣でて第一は八重の汐路を隔てし父が上その身の事も無理ならぬ願念を祈り果てしが、流石に半歳あまり今日が始めての珍らしさに、樓門を立出でて鳥居際なる小路角の茶店に腰うちかけながら、藤助もろとも暫し憩へば、春ならねど明神境内の絶えぬ往來、また日立ちて頻りに差覗かるゝ若鮎さ、「藤助、歸りませうぞ」「外に花のない冬空、せめて今暫時、時に取ての功德ぢや、世間の奴等に見せてやられませ、はゝゝゝ」「あれ、また埒もないこと、三様に告口しますで、ほゝゝゝ」「なれど、たまゝ折角の外出に此のまゝとは諸あまり本意なし、歩ついでに上野か浅草へ」「浅草は禁物」「や、いかにも浅草といへば兎角に事のありげな方角、この藤助も聊か面白うない筈、はゝゝゝ」「おもはず高く笑ひし肩口を、不意の背後より突飛されし藤助、どつと床几を迂り落ちながら、驚いて見返れば番助の本田家が用人の弟、身持放埒のため兄の勘當うけて屋敷の出入も差止められしが互ひに見知合、三十前後の骨太に着流しの大一小、ぬツと立ちて、はや喧嘩、一藤助、珍らしで、うすゝ聞けば其の後、おのれ屋敷を出

奔して行方も知れぬとやら、今どこに居る、幸ひ兼てより何をがなと思つた三と兄への土産ぢや、同道せい、否と吐きば引摺り行くぞ」「幸ひの土産ぢや引摺り行く、はゝゝゝ今この藤助、あの本田家に幸ひの土産となるかならぬか、面白、みごと引摺られて行かう」「うぬ文句は入らぬ、いざ来い」「や、行かいでか」「うたてや、また退くに退かれぬ場合ぞと、おもはず中間を隔てし露女、すツと水際立ちて滴るが如し、「よし連行かう人ありとて、今此身の供を外してどこへ、控へて居や、貴方また何處の御人やら知らねど、理不盡に途中より、元は存せぬ事、只今は追られませぬぞ、もし達でとの仰せなれば、それも藤助に行かで叶はぬ仔細あれば、この身、宿許まで歸りましたの上、あらためて進ませさう、番町の本田家とは、内記録といはれまする四石取の旗本衆でがな、ほゝゝゝ事の大策によりましては、御所望なうても、手前より連れて参りたいほどの折柄一境内の人足を一時に吸取りし見物、はや茶店の軒下を埋めて、黒山の如き中より悠々と割て出でし二人の武士、いづれも編笠越ながら敵手の男に立寄ると見れば、其のまゝ左右より拵みて、加之も此方に對うては慇懃の體、こゝ、櫛はず出られませ、露女

訝かりながら其のまゝ足早に惣門の外へ立出づればこゝにも一人の武士、また同じ笠越に待受けて、我等三人は内々柳澤家より近來大切の御身を護るもの、あとに念なう歸られよとの言葉を聞くや否、露女はツと兩眼を閉ぢぬ、さても恐ろしや、これほど深き執心とも思はざりしを、はや既に斯くまで見込まれし我が身かと、まだなる情の鐘鎖に縛られたる心地、加之も三日、町奉行より村田三平を呼出しての沙汰に、兼て厳しき詮議のところ、木原庄左衛門が下手人は今回召捕て近日御仕置に相成るぞ、元來その曲者は御直參本田内記の家来ながら當時勘當の者なれば、主人に何の御咎なし、但し別段また身分柄不取締の廉にて當主内記は閉門謹慎を仰付られたりと申渡され、格別の思召を以て斯く落着の上は餘事の追訴一切あるべからずとの口達まで添られぬ、さては案に違はず、庄左衛門の仇は正しく本田父子の業、手を下せし曲者は神田明神の境内に出遇ひし奴かと今更の無念さ、みすく眼前に理不盡の喧嘩を仕かけられながら、おめく加之も其のまゝの無事に見通せしを悔めど、もはや町奉行の手に召捕れて、當の内記また閉門になりしのみか餘事の追訴一切ならぬとの念は、流石に打込むす

隙もない柳澤美濃守の指圖振、前後あまり際どく行届いたる體に、その後の露女、いよく薄氣味悪し。  
時に取ての方便なれど、みごとの逆寄に跳返したる三箇の難題、一箇の我が身に就て三年の市中往來差止は既に許されたり、その一箇の養父に就て半歳の朝夕を無念の涙に忍びし曲者は既に召捕られたり、もはや残る一箇は八丈島の父が上、もしや萬一これさへ叶ひし曉は、榮華の外に情を知らぬ浮世の日よりは女生涯全盛の頂上ながら、神も佛も恨めしや人しれぬ我が心の苦しきは落花狼藉。  
村田三平、また口にくそ得いはねまして今は宵闇の椎の木より迂り落ちし戀にもあらぬ男づく、よしや戀にせよ、あたらし名花の意を嵐に誘うて我が物と願はぬほどの身ながら、さりとては斯まで不思議の縁に聯なりし今更ら、玉の輿にもあれ、黄金の臺にもあれ、此のまゝ餘所に取らるゝが何の面白かるべき。  
ならば固り不似合の我が手にも折らず、また他人にも折らせず、まことや女一代を取潰すに等しき我が罪は深けれど、こればかりは皆も前世の因果か、あはれ生涯あまの清淨無垢に過させたく、四時不斷の名花一輪、いつまで

も此のまゝに守りたし。  
\* \* \* \* \*  
行末いかな運命にやら、逢初川の宿、はや夕暮の門口に一挺の女乗物を掲て、その駕脇に添へる武士一人、をりく待兼顔に家の内を差覗きぬ。  
例の藤助は身も心も落着かて、出つ入りつ顔に氣を揉み體、奥の一室には露女と三平、もしこれが連添ふ良人ならば、たとひ身を寸斷にせらるゝとも行くまじき管の風情、もしこれが連添ふ妻ならばたとひ一時に生涯の血を流しても遣るまじき管の顔色、そつと互ひに涙を溜めて私語きぬ、「三様、もはや斯うなれば斯うなりし上の事、今更ら悔めばとて詮も甲斐も届かぬ身、第一あの乗物を空のまゝ荷うて歸さるる相手でなし、なれど父の安否、それ聞くまでは、この露いづこの誰に恐れて、おめく何の」「や、いかにも其處ぢや、その心さへ確となれば天晴れ男も同じ事、但し父御の安否、きかれた上は」「たゞ安否を聞くだけには取られませぬ身、現在この赦免狀を送るぞと言はれても、正しう父の顔、眼前に見るまでは」「なれど、みなみの餘人とは違ひ、當時の天下政道に只一人の權威と聞及ぶ柳澤美濃守、容易く叶はぬ

答の事を猶更の案外、何の苦も無う叫へて、加之も今夜の不意にもしや萬々一人貨にせられた父御その座にあらば其の座の即答、何とせらるゝ「あれ三様の今更事々しい、もしや萬々一その場となれば、過日もいふ通りの露が身の果ほゝこの生命一箇で済む事ぞ」「やれ痛はしの無残、さりとはは運命、いよくそれと覺悟せられてか」「入らぬ生命一箇に代て暫時なりとも、慰しい、ゆかしい、懐かしい十年振の父にさへ逢へば現世の本望、また一旦、叶還された上は、便船の積荷でもない萩田主馬、いかな事あればとて、再び元の鳥へ其のまゝ追流さるゝ父では無からう答、わけて榮華全盛、どれほどの出世になればとて、娘の色香を幸ひの賣物にして時の權威に妬妬ひ其の身の流罪を許さるゝが、姉しからう答のない父、逢へば其の場で只一言、死ねとの聲を名残に聞きます覺悟ぞ、いづれにしても露の消際、草の葉末を轉がるよりも果敢ない身、なれど今夜は三様、それまでの事も無うて済む答、この露を一日、見ようとの迎ひでがな、さては當時の世の中に一人の人といはるゝほどの眼力、何と見られるやら、ほゝゝゝ思はず聲を含んで笑ひながら養の毛一筋も亂さず、かくなりし今更の未練氣も

無う、すつと座を起ちし雄々しきに、流石の三平また言葉もなき體、一室を出でし後姿を見送れば、同じ家内に住んでさへ最といふ見る度毎に愈勝る名花自然の風情、ましてや女色をもて天下に業を行はんとするものの日には古今無雙の逸物、何として無事に見通さるべき。

\* \* \* \* \*

戰國の太閤以來、あれが今當世の柳澤と叫はれて、平大名の味噌憎用人にも足らぬ一握りの瘦身代より武家の關白に等しき天下の大老となりしのみか、將軍家の血を分けし連枝ならでは叶はぬ密の甲府の城を預けられ、正しく葵の一門ならでは及ばぬ金紋の袂箱と虎の皮の鞍、覆まで許されし美濃守の勢威、やがては甲斐と信濃の兩國にて一足飛の百萬石に封ぜらるべき風聞さへ傳はりし折柄の事。

その柳澤美濃守が面前へ引出されし露女、もはや身動きもならぬ運命の底、煮るといはゞ煮られ、焼くといはゞ焼かるゝ身ながら、さては萬人に勝れし天生の容色を人しれぬ内々の乗物に迎へ取るゝだけの仔細ありて呼寄せられしもの、わざと居敷の奥深き庭傳ひに導かれつつ、小姓の外は人なき案外の閑室加之も、心易げに打解けたる體、猶更薄氣味悪し。

## 其二十

まことや聞きしに勝る露女が風情を、飢ゑたる鷹の餌を覘ふが如く、じろりと一日、するどき眼力に打守りし美濃守、さりとして面には儼然し微笑を浮べて、言葉の端まで手輕う柔和なり、「ようこそ來た、それほどの容貌を持ちながら、まだ今日まで縁にも付かざりしとは思議ぢや、あまり男選擇が過ぎた爲でがな、はゝはゝ一露女、二人の小姓に插れつゝ、まばゆき銀燭に左右より照されて、伏したる大前髪の雪額、何の恐れ氣もなう、どこに一點の慙とらしき顔色もなう、いはゞ自然の大膽さ、憎らしきほどに凜々しう沙波の花の美顔、靜かに擦げぬ、「賤しい身の女を、かやうに格別の御目見、仰せ付けられまする事、勿體ない身の冥加と心得まする」「いや、元來の下司種ではない答、その氏ある父を八重の汐路の空に置いて、馴れぬ浮世に身一箇の力ない境涯、わけて年齒も行かぬ女の事、咄やと心根、察し入ぞよ」「はい、ありがたう存じまする」「また不運に母も身とやら、定めて朝夕、猶更の懷かしさ、一入父に逢ひたう思ふでがな」「たとひどれほど、逢ひたう存じましても、かりそめの事とは違ひ、御上より遠島流罪の父が身、迎も叶はぬ業と、

たゞ涙の外には「いかにも餘の事とは違ひ、天下の御一門中、わけて御總領筋の重き家柄、その結城秀康公以來の越後家が滅亡するほどの義に就て、加之も平侍ならば兎も角、世にいふ御爲方とは申せ、絲魚川一城の主人たる藩内棟梁の萩田主馬、あらためて越後家御再興の御意でもある後か、また大赦の御沙汰でもない以上は、笑止ながら武運の末、あのみ八丈島に果つべき筈の身ぢや、但し露、この美濃守が一段の取持にて、もし父を無事に呼還す事あらば、汝の生涯、入用次第この柳澤へ、くれるであらうの、や、貰へばとて實は案外これまた夢のやうな僥倖ぞ、結局は美濃守が養女として將軍家お伽に差上げた心體ぢや、一時は世に連れて本所御下水の御家人風情を親にも持つた身が、流罪の父を呼戻す孝女となり、當時大老の娘分となり、さらに女一代またあるまじき無上の榮華全盛、佛神を祈ればとて叶はぬ身の出世、上様の御寵愛を被る事、きくまでもない筈ながら、ちと其の間に仔細あつて、わざわざ念を押すぞ、よもや否とは申すまいの」流石は百五十俵の小身より天下の權力を握りし骨柄、油の如く滑かなるうちに針の如き恐ろしきものありて、また一日、じろりと決き眼に

露女を見遣ぬ。露女はツと頭を垂れ、「あまりの冥加、あまりの勿體なきに、何と御請申上げまして宜しいやら、數ならぬ身、たゞ恐れ多うて一美濃守は、と笑うて首肯きぬ、「さもあらう筈ぢや、花も月も無用の戰國ならば知らず、今この太平の世は、なまなかの男子よりも女子でこそ、父子もろとも一時に出来した僥倖ぞ、但し假にも時の大老が娘分となる以上、倍そのまゝで済むまいせめて二月か三月の間、屋敷へ引取て、柳澤美濃守が娘になるだけの家風を仕込で後の事」「何事も不束な身、わけて有難う、存じまする」「もはや一方ならぬ大切の身ぢやぞ、いはゞ我身ながら我まゝにもならぬ身ぢやぞ、珠玉も人物の器とやら、花も境に依て一入の色香を増す、以後、なるべく心に氣位を取て、輕々しい風儀にうつらぬ修行専一ぢや、近日、あらためて迎へるまでの間、もし身に入用の化粧道具、また衣類調度の類、欲しと思ふ品あらば遠慮なく申越せよ」露女、靜かに半まで頭をあげて雪の額に黒日勝の目元、いきいきと張切りぬ、「身に過ぎました化粧道具、衣類調度、下さりませう品々よりも、思召に甘えまして父の御赦免、凡そ、いつ頃、この露女が

御禮を申上げますやら」音なくとも手は觸れずとも、うては響く美濃守、「今いふ通りの次第、餘の事とは違ふぞよ、まだ越後家の御再興もないに、まして天下大赦の御沙汰もないに、この美濃守が一段の取持にて呼戻すほどの義ぢや、いつ、何時とは、なれど汝が身を屋敷へ引取て、二月か三月家風を仕込む中には、安堵せい、是非とも叶へて遣はすぞ」露女次第に頭を擡げて果は伏日勝の氣色もなう、眞正面より美濃守の面體ヂツと打仰ぎぬ、「父の御見まするまでは、流人の娘、上様へは猶更の事、お屋敷へも、憚りあるべき身かと心得まする」美濃守、はツと眼を光らして、うか／＼油斷の急所を突かれたる心地、偕は此女と思ひながら、これほどの間際に迫りて今これほどの念を押返す女、加之も二十歳に足らぬ身としては化粧に劔を包むが如き天生の不敵さ、いよく我が手に仕込甲斐あるべきものと、我れを忘れて小膝を進めぬ、「や、ぬかり無う生れた女ぢや、流石は北國の名物種、容色といひ才氣といひ、その上を、この美濃守が手に仕あげたらばいかにならうぞ、はゝゝまづ兎も角も今夜は其のまま宿へ引取れ、追ての内沙汰を遣はさう」「たゞ其事ばかり、只管父の身の、御沙汰を待まして

の上「む、確實に聞届けた、但し露、その内沙汰を遣はすまで、いかな事ありとも、身勝手はならぬぞ」「はい、謹んで、宿許の一室に、控へ居りまする」

## 其二十一

其の夜は其のまゝの無事、また同じ乗物にて大切氣に送り歸されしのみか、翌日、なみ／＼の町女には過ぎて用なき不相應なる摺箔の衣裳地五卷に化粧料の金子百兩、まづ當座の引出物として贈られし露女、さても何とやら物法し、はや我が身を犠牲に飾らるゝ心地。

されど舊主たる越後家再興の沙汰さへないに、舊臣棟梁の父ばかりが流罪赦免の事、いかに政道隨一の人のたりとも、掌を翻すやうには容易う出来まじき筈、その父の顔を見るまではとの言葉を残せし我が身、今日の眼前に迫りし事でもなく、まだ暫しの月日はありながら、さて案外の無事に其の場を歸されて、かくも慇懃に晋物を贈らるゝ上は、いづれ近れぬ身の運命。なつかしや一時も早く父に逢ひたし、戀しや父の影身に添ふ人も見たし、さりとて逢へば孝になるやら不孝になるやら、見ればとて嬉しう添寄せらるゝ筈でなし。

かなしや一日なりとも此まゝに清淨の我が

身を保ちたし、さりとて身を保てば生涯このまゝに空を隔てし父子、同じ世の中に生きながらの甲斐もなく、また其の人を見もし其の人に見らるゝ時もなし。

それのみか、きのふ今日は裏道の道場へも行くか、あはれや六尺虎髯の鐵も石も踏抜くやうなる大男が、はか／＼しう物さへ得いはず、しをしをと打濁れて何とやら首垂腕の三平を見れば見るほど、猶更の辛さ苦しさ、平生は大聲に笑ひ散して呵しげの藤助までが、俄の陰氣に閉籠められし體、さても我が身ながら罪深しと、人しれぬ夜半の枕紙を濡らしぬ。

もし氏なき下司下郎の種に生れたらば、時の大老より天下の將軍家が籠に逃ぜらるゝ事、まこと女一代こゝに榮華無上の全盛ながら、なまなか越路の雪もろとも清く吼はれし名物の家に生れしのみか、おめ／＼主家の亡滅を餘所に見て我が身一箇の流罪を娘の縁に脱れまじき父の子、加之も片目片脚の不具に生れたらば、こゝまでの的に取らるゝ花の色香もなく、また戀する人への義理も薄く戀せらるゝ人への柵もなくて、かくまで苦き心の淵潮には沈むまじきを、罪深くも女らしげの目鼻を備へて浮世の淫奔女にも生育ざりし我が生涯今が十九の霜

月、あけなば二十歳の春に消ゆべき露とは、よく前世の因果に名付けられしかと、夜明けし燈火の影に其の身を飾る摺箔の小袖地、見るさへ淺ましく根根の種、わけて誰がための化粧料ぞ、百兩の小判きら／＼と光輝く憎き腹立し。

\* \* \*

涙上一切の沙汰を預かる御船手の家柄、父祖傳來こゝに同じ名を四代目の向井將監、その屋敷の奥深き一室に、客分の如く扱はれながら、舊また座敷半の如く閉籠められしは、萩田主馬、當年五十八歳、高橋親貞、當年二十一歳、何事かは知らず磯馴松に風の音信もなき便船に呼ばれて、主従もろとも夢の心地。

越後家全盛の昔、高田一藩の棟梁と立てられ越路の名物と唄はれて、別に鯉魚川の城まで持ちし大名分の身ながら、主家斷絶の曉、小うたに唄ふ八重の沙路の浪枕、鳥も通はぬ八丈島へ流されてより十年の春秋浮世を隔てし樂憂に一人の霜を置きつゝ、さらぬも打寄する朝夕の年浪に堪へてや、いとゞ肉は落ち身は瘦せて骨のみ高く、ありし面影の其人かとも見えぬ哀さ、憂に積りし半白の髭髯を撫でて自然の沙風に鐵枯れたる聲、「報負汝まだ小兒の頃で確と

は知るまいが、この向井家は我等流罪の時に送られし船手の頭領ぢや、さるを十年振の今かく俄の不意に呼ばれて、大赦御免の沙汰ならば一應まづ公儀へ召出さるべき身が、また同じ向井將監の手に渡りしまゝ今日で三日目、加之も常家の主人にさへ逢はれぬとは猶更の不審、いかにも仔細あり氣ぢや、なれど何事も運次第の成行、平生の教訓こそぞ、たい神妙に謹んで、諸事萬端に見苦しからぬやう、かりにも流人に仕へし島生育と言はるゝな一兒小姓のまゝ水や空なる流罪の配所に従ひ行きて、今日までの朝夕を師父の如くに仕へし靱負、十年の憂身を絶え間なき汐風に吹曝されつゝ、頭髮は赤く縮れて目のみ白く顔色まツ黒々の烏奴となれど、流石に元來の男振、まして名物の手許に只一人を仕込まれし今年二十一の骨柄、世間に利慾出の作法よりも自然の禮儀を身に備へて、靜に餘念なき小膝を進めぬ、「は、今後の御安否、いかやうになりませうとも、お言葉の外は、わけて島とは違ひ、申さば靱負、これが物心を覺えましてより始めての浮世に、うまれ出ましたる三歳兒も同じ事と、心得居りまする」「やれ、哀れなこといふぞよ、この主馬、よしや何となるにせい、せめて汝だけは今この時を幸ひ、十年

の配所に仕へてくれた一禮を演べて、うみの父に涉さうか、あの庄左衛門は御家人の株を求めて本所に世を忍ぶ等ぢや」「靱負め、父に、うみの父に逢ひまするよりも、嗚や御心中、その父が許に、あられまする筈の」「露か、露か、むむあれも、今年は二十歳の春ぢや、いかになりつらうぞ、庄左衛門の介弟、如才なくとも、母には早く別れて、父は流人、まして昔に變る境涯で育ちをつた女ぢや」

## 其二十二

おもはぬ不意の便船にて八丈島より召還されし萩田半馬、其のまゝ御船手の向井家に引取られて、客分の如く座敷牢の如く差置かれし四日目の夜、主人の將監、始めて小書院に呼迎へぬ。

まだ確と赦免にならざる流罪人ながら、世に咀はれし越後家の名物とて、加之も時の大老たる柳澤美濃守が内意をうけし向井將監、慇懃に幕まで差出しての待過振、互ひに八重の汐路を送り送られし十年以前の挨拶も済し後、わざと打解けたる體に語り出しぬ、「あのまゝ、生涯の流人と心得ましたるものを、俄の御召還しに相成るのみか、斯く過分なる御扱ひ振、や、頓と夢のやうな心地で」「それに就て早速お目

にかゝらう筈のところ、我れ等一存でもまゐらず彼是と今日まで、なれど幸ひ、今夜は諺にいふ膝と膝との御談合いたしたい」「談合とは、お言葉、さて痛み入るべき身に、何の御意でがな」「實は内々ながら、御大老よりのこと、貴方、木原庄左衛門といふ、本所割下水の御家人に、いかな所縁でやら、娘御を預けられた筈」「その庄左衛門は、舊この主馬が家來、越後家斷絶以前、既に暇を遣はして浪人せしものなれど、運よく御家人の空株を求めしと聞及んで流罪の砌、お帳面に記されましたる小娘一人、いかにも預け置きまして」「その娘御ぢや、こりや過去りし事、申さういでもの義ながら、去年の夏、當時御禁制の生類を兩國橋の上から蹴落した、いや蹴落さぬ願いたとの申開きて、三年市中往來のお差止のところ、また庄左衛門が不意の横死にて、もし引取人なくば、其のまゝ御追放になるべき筈の折柄、村田三平と申す浪人が後見として願ひ出で、當時は神田逢初川に住居せらるゝとの事」「やれ、さて案外な白癡ものめ、おのれ身にあるまじき運葉ものめが、流罪の父が心も思はず、さやうの事いたしましてか、また庄左衛門いかな義にて横死せしやら、こりや元來、他に怨恨を買ふべき者でも御

座らぬに「いや、もはや御掛念に及ばぬのみか、却て今は禍を轉じた幸福の身となりましたぞ、その幸福に就ての御談合、實は娘御の容色、萬人に勝れて御大老の執心、養女分に仕あげし後、恐れながら上様お伽にも差上げんかとの事、さるところ、流石に名物種、三箇の願望を差出された、一箇は其の身の御咎めを許さるゝ事、一箇は庄左衛門の下手人を召捕らる事、以上二箇は既に聞居けられて、今その一箇が貴方の事、父の流罪御赦免の上とは正しく孝女の一念さうあるべき筈、加之も餘の義とは違ひ、いかに榮華無上の出世にもせよ、本人不得心のまゝを差上げて萬一、見張もならぬ大切の御奉公に油斷あらばと、それがため今同こればかりは容易う叶ひまじき義も倍かく叶へられて俄の御召還しに相なりし次第、つまりは御大老の娘分として上様の御寵愛に進ぜらるゝほどの冥加、わけて生涯の流罪このまゝ、公に御赦免となるべき折柄、固り御異存あるまい筈ながら、娘御に猶この上の念入、篤と言聞けられたい、また向井將監、かく屋敷へ内々お預り申したは、次第に依て再び元の島へ、送り歸せとの嚴命を承はるも知れざる用意、あらためて深うは申さぬが、この邊の義も兼ねての御承

知せられたい」  
萩田主馬、目を閉ぢて無言のまゝ聞き居たりし暇、靜に開きながら、容を正して恭しく問ひぬ、「十年以前、この浮世を隔てしまゝの主馬、さらに當時の重き御役柄業を存じませぬ事、先刻よりの御言葉、不束なる流人の娘に過分の思召を下さるゝ今日の御大老、諸家様のうち、いづれよりの御身分、何と仰せられまする御人體でがな」向井將監、おもはず小膝を打ちぬ、「こりや不念、いかにも、はゝゝゝたゞ我等に口騷れた御大老では、や、御存じないはず、當時は柳澤美濃守様」はて、柳澤様とは、これまでの諸侯方に、まして御大老にならるべき御家柄には絶えて承らぬ御姓名」「其事、それも其の筈、實は百五十俵の小普請組より出られた御人ながら、さりとては前後無類の御器量人、當時は御三家同様の格式にて、また御連枝の外、なるまじき甲府まで賜はるほどのこと、天下御政通た一人の御威勢なればこそ、大赦なき流罪人さへ、かく御一存にて召還さるる次第」「さて、めづらしや、太平の世には凡例もない御出世、わづか百五十俵の小身殿より、今それまでの御身分にならるゝ御器量人がわざゝ何として遠島ものの娘風情を、さほ

どの御執心やら、加之も御威勢のまゝとは申せ、入らざる無用の御手数數までかけられて」萩田主馬、何をか胸裡に人しれぬ思案の體、また目を閉て暫し無言となりぬ。  
やがて何をか思案に閉ぢし眼を見開くや否眉を顰めて向井將監の面體を打守りぬ、「たとひ一度は御取潰しに相成るとも、なみくの諸侯方とは違ひ、御一門中の總領筋たる越後家の事、いづれ御再興の御内意を下さるべき吉兆かと存じて、實は心中に天地を拜せし甲斐もなう、や、娘一人のため、はるゝ八重の汐路を召還されしとは案外、あまりの本意なき、また路め、我が手許には置かれず幼少より世を忍ぶ家來の手廻りにかけて育ちし身ながら、正しく種は萩田主馬が子に生れしもの、もし女一代は替て同じ願念を差上ぐるならば、叶はぬまでも舊恩君家の斷絶を歎くべきに、只おのれが父の一身ばかりを願ひしとは、この父を見損うたる狼狽もの、生涯またない大切の時機を取外せし白癡も、わざゝ違つて先刻よりの思召を念入に申聞けます段か、もはや勘當いたせし女、日にかゝらば其の分に差置かぬ女」  
向井將監、おもはず小膝を前寄せぬ、「さては萩田殿、父として娘の出世も出世、かほど

の冥加を採漬さるゝか、娘として父への孝も孝、これほど出来たものを踏漬さるゝか、但し御大老の厚き御沙汰をたゞ一息に吹消さるゝか、また再び元の島へ歸らるゝ心體か、向井將監と承る「さて、御身分柄にも不似合の仰せ、御大老の養女分として將軍家の寵に進ぜらるゝ事、凡そ世上の女には夢にも得難い幸運の絶頂、勿體なき冥加至極の義ながら、越後家斷絶の嘆に生涯の流罪となりし萩田主馬、さやうの子を持つて、それがため、我が一身の浮世に召還さるゝを、さのみ名譽とは存じ兼ねる次第、再び元の八丈島へ追流さるゝが何の、はゝゝ第一また戦國でもない太平の今日、良馬一頭の秣にも足らぬ、百五十俵の小身殿より天下御政道の執權職にならるゝほどの御器量人が、わざゝ君側に御手入仕込の女色を勧められずとも、外に御忠勤の御工夫は山々あるべき筈、たとひ聊か日暮の置どころ満足なればとて、美女の多き世の中に事の面倒なる流人の娘、そこまでの御執心とは猶更の不思議、もしや萬々一、不束な女なれど、將軍家おきゝの御目に止りて、加之も斷絶せし越後家舊臣の娘と御得心の上、差上げよとの御意ならば、申束の御慰みにならうとも、ありがたく

謹んで慰上いたすべき主馬、憚りながら其の外は一切この義に就ては、いづれ様の御理解にも従ひ兼ねまするぞ、また元の島へ追流さるゝ事を、身の苦痛と思はるゝかは知らねど、この主馬、同じ越後家の斷絶を餘所に見るならば、なまなか平日に近き江戸の空にて歎うよりは、遙の海を隔てし浮世の外こそ、却て氣心の休まる男、以上いぢゝ御大老へ御傳へ下されたい、案外の返答なれど、あくまで動かぬ武門の意地、一々加之も根を掘返せし理の當然に向井將監、何とやら道路を失うて押詰められし心地、「や、善惡ともに御大老より再應の御内沙汰あるまで、この將監、もはや言葉を交しませぬぞ」「いかやうとも、御威勢の下に我等父子の五體は思召のまゝ、但し心體の義は、ちと格別、只今申上げましたる通り事」

\* \* \*

娘の露は父の流罪御赦免の上ならばとの風情、父の主馬は越後家再興の御沙汰あらばとの口振、父子まだ逢はぬに互ひの心と心と相通じて言合したるが如く、負へば抱けとの諺、他の内兜を見送して憎き奴とは思へど、流石に父は父だけの主馬、その種に生れし娘は娘だけの露ぞと、柳澤美濃守人しれず感歎の膝を

打ちながら、いよゝ我が手に仕込で君側に差入たしとの一念、いや増しぬ。

されど越後家の再興は天下の大事、いつしか竟に叶ふ事ありとも、それまで萩田主馬のまににも捨置かれず、娘の露は猶更ら一日も早く屋敷に引取たし、さりとて父の顔を見ずば容易う手に入るまじき女、また娘の顔を見れば如何なる智慧を附けるやら知れぬ父、うかゝ父子を逢はせたらば事の根本を破る基、もはや今までの微笑を浮べて整ひ難しと、美濃守が眼中に平生ならぬ凄味を帯びぬ。

\* \* \*

夜更け人定りて後、向井將監が屋敷の奥深き一室に臥したる萩田主馬、ソツと夜具の上に起直りつゝ、燈火の下に鞆負を呼んで四邊を睥睨しながら私語きぬ、「今いふ通りの次第ぢや、かくなりし上は自然の運命、是非もない事、十年以來の今日まで、互に八重の汐路を隔て、夢にも逢ひたし、見たしと思ひ暮した甲斐もなう、あはれや汝も一人の父を非業に失ひ、我も一人の娘を、捨物にせいで叶はぬぞ」「父が事、今更ら、いかやうに敷きましても、はや既に及ばぬ鞆負とは違ひ、現在まだ無事にあられまするを、痛はしや、捨物に違はすとは一聞ば名

もない小身より當時天下の大老に這出すほどの相手、いづれ世の常の平凡者ではない筈、その柳澤が、何の好奇心で、わざ／＼縁ない流人の娘を我が手に引取らうぞ、こりや正しく露の容色よりも元來の氣性を見込んだの業ぢや、父子とはいへ、九歳の時に手放したまへ、今日、いかに育ちしかと思ひの外、さては女に入らざる父が不敵の端くれを傳へた體ぢやぞ、天下の禁制物を橋上より蹴落して罪をうけしとやら、また柳澤の權威に對うて逆撃めいた三箇の希望を出せしとやら、ます／＼相手に仕込甲斐ある女と見込まれたぞ、つまりは女色を以て君を傾けんとする大如の手業に使はるゝ娘、知らずば儲置、それを知つて荻田主馬、たゞ一身の流罪を免るゝがために得心のならう事か、なれど露め、いかに勝氣の強女とはいへ、今年やうやう二十歳の春を迎へしばかり、父が島より呼還されしといふ嬉しさに、うかと相手の懷中へ捻込まるゝも知れぬが懸念ぢや、ならば逢うて一言、いひ聞かせたい事あれど、この分ではそれも叶ふまい、や、心外ぢや、他手に使はるゝ娘ならば、父が手に使つて、幸ひの折柄と思ふ工夫も分別もあるに、おめ／＼同じ江戸の地にありながら、猶更の無念ぢや」

### 其二十三

靱負、サツと膝を掲寄せて、主の面を仰ぎつゝ一入さらに聲を潜めぬ、「その御用、その御一言、この靱負、お傳へ申しましたい」「前夜、この主人が言葉で、神田、逢初川とは聞及んだが、各分の扱ひながら實は座敷牢に等しい常家の嚴重さ、わけて島に育つた汝、足の踏出す方角も知るまい、詰句、仕損ずるだけの事」「いや、當家いかやうの嚴重なりとて、外よりとは違ひ内より忍び出るに何の、また方角は存じませいで、この靱負、みごと人にも怪しまれず、その神田逢初川とやらへ尋ね行きます、但し、一旦こゝを忍び出ましたる上は、もはや再び歸られませぬ靱負、此のまゝ、お別れにならうか」そののみか、後にて漢一、御身に「靱負、その義は儲、さほどにないぞ、汝は元來、罪あつての流人でなく、たゞ主の身に從ふ兒小姓として島へ行きしもの、加之も世間なみ／＼の流罪とは格別の沙汰で、この荻田主馬に限り一人の召連を許された汝ぢや、無理もなし十年振の島生育、若輩者の血氣に堪兼ねて二日三日の江戸見物に遁出したかと、言退けても濟む筈、はゝゝゝ一や、さやうなれば猶更の事、その御用を是非とも、この靱負に「むゝ仕遂げてく

れるか、首尾よう、露に逢うてくれるか」

短き春の夜ながら、まだ東雲の横雲、ちらとも透かぬ闇の星影に、いづこより忍び出でけん、向井將監が居敷の裏門近き堀外へ例の靱負、いと却て荒浪の岩角を傳ひ馴れたる身ぞ軽く、さツと飛降りぬ。

浮世を隔てし水や空なる島陰に育てど、固り蜃の昔屋に生れし元來の島奴でなく、武門の名物が膝下に多年の朝夕を仕込まれたる靱負、向井將監の屋敷を忍び出でて、踏出す一步の方角は知らずとも、うろ／＼狼狽て仕損ずる男でなし。

まだ闇の星影に忍び出るや否、わざと的なき市井を遠く向井家の屋敷に離れて、朝日の出づる頃を待ちし後、そろ／＼と往來の人に神田の逢初川を問ひ始めぬ。沙風に吹曝されて髪は赤く顔色まツ黒々、着物は裏返して身に纏ひし跣足の體、やれ難船の生命拾ひせし男かといはるゝ呵しさを幸ひ、其のまゝの船頭となり澄して人にも怪しまれず、辻々を尋ね行きぬ。江戸市中、どこかは知らず、夜あけて旭の立昇

る其處より、凡そ二里あまりの道を歩み來りし  
かと思ふ頃、こゝが逢初川と教へられし靱負、  
ふと今更に歩を停めし背後より、肩口を突かれ  
て驚きながら飛退けば、武士の附添ひし乗物一  
挺、其まゝ急いで彼方へ行過ぎぬ。

さりとは浮世、神も佛もなし、いよく  
八丈島より父を召還せしぞ一時も早く來よと  
の言葉に夢うつゝの露女が、今あの乗物に嬉し  
涙の餘る思情を柳澤家へ運ばるゝとも知らぬ靱  
負、また今その乗物の林先に突飛ばされしが我  
が身を訪來し父の密使とも知らず年來こゝに慕  
ひし心の良人とも知らぬ露女、加之も互ひの一  
目せめての赤繩、ちらと餘所ながら見交す隙  
でもありし事か、急ぎ脚に駕の戸は閉ぢたり、  
あはれ生涯また逢ふべき時なく、別れゝの  
此まゝとは。

まして今の乗物が七八軒の先より出でしとも  
知らぬ靱負、其まゝ歩み出して見れば門口に立  
てる男、それさへ今の乗物を見送りで、まだ家内  
にも入らぬ藤助とは知らず盛熱に腰うち屈めつ  
つ馬より聞きし村田三平の名を問ひぬ、一神  
田、逢初川と聞及んで來ましたるもの、もし村  
田、三平様といはるゝ御人、あられまするか」藤  
助、じろく「打守りながら、おもはず肩を擧め

ぬ、「その村田三平、當家なれど、いづれより來  
られた」「や、當方様で、萬事は、お目にかけ  
ましての上」「そりや兎も角、何の用で來られ  
て、何といふ人やら」「初對面ながら、お逢ひ申  
せば、それかと御承知あらるゝ筈のものゝ風體  
と言葉の不似合に、藤助いよく不審の眉もろ  
とも、暫時そこに待たせて家内に入るや否、靱  
負無遠慮に其のまゝ續いて入りぬ。

わづかの一步、もし露女こゝにあらば、流石  
それとは口に言はねど、餘所ならぬ浮世の義理  
と棚、二人の男に插まれて心の辛さ苦し  
さ、いかに身一箇の遺溺もなう、何とするやら、  
三平と靱負、初對面ながら互に語り語られての  
後、おもはず顔を見合せつゝ猶更ら無念の拳を  
握りぬ、「無念も無念、あまりの心外さ、その  
乗物に現在の今あの辻で摺れ違ひながら、加之  
も念入に此の、此肩口まで突飛ばされながら」「な  
れど、行く先の知れた道筋を藤助奴が、お聞き  
申すと其のまゝの一日散、途中で追付きませう  
ぞ」「いや、幸ひ運よく、途中で追付かれてか  
らが、向井家にある主の身を其の屋敷にありと  
欺いて、この早朝に急の乗物を差越すほどのこ  
と、わけて只今も申す通りのをり柄」「む、倍、  
さう聞けばいよく仕てやられたか、但し萩田

殿、それほどの中より、わづくゝ貴方を當家へ  
の密使、お差支なくば内々、そと承りたい、  
この三平また及ばずながら、ふしぎの縁で今日  
まで男づくの世話介抱も致したものの、次第に依  
つては今後の「工夫ないでもない筈」「まだ御  
日にはかゝらねど、浮世に立倚る影もない不束  
な娘を、さほどの御力になり下さるゝ御人、  
箒と御簪を申し上げた後、重ねての御迷惑にな  
らずば猶この上の御談合を願へ」とまで、申聞け  
られましたる拙者、實は主人の内意、たとひ如  
何なる場合ありとも越後家再興の沙汰ないうち  
は父子面會無用との事、つまりは當時天下の權  
威無雙と聞及ぶ敵手に見込まれし女の身一箇、  
いづれ叶ふまい、逆も叶はぬ運命に柳澤が毛  
へ落つれば落ちよ、但し娘を賄賂沙汰の音物  
にして舊主の亡滅を餘所に見ながら一身の流罪  
を脱るゝ父ではないぞとの事、さらに委しう打  
割て申さば越後家の萩田主馬とも心付いで汝  
ばかりの父と思ひし不覺女、せめて大好の言葉  
に使はれず身の汚れぬうち、死との御一言、痛  
はしや、本人こゝに居られませねばこそ、かく  
容易う、泥まず口より出ますれど」「靱負、おも  
はず兩眼に涙を含めば、さらぬも村田三平、虎  
髯の泣面を反けて、苦しげの聲を濕ましぬ、「流

石は音に聞えた名物殿、や、さうあるべき筈め、しい、浮世の下司よりも却て父子の情愛、わけて幼少に手放されたまゝの情愛、嘸や一人の腸を絞つて、偕も勇ましう、氣強う言はれたぞ、なれど氏素性その種ぢや、あの露との、また十九、二十歳の女性にはあるまじい凛々しさ、健氣さ、膽の張出た大の男も何として、わざわざ申聞けられいでも、この事の起りし以來、兼てよりの覺悟、三平、ちちと漏聞た義もあるほどの折柄、されど今日の今朝、それとも知らで平生に無う、進まぬ柳澤家へいそ／＼行かれたが無慙ぢや」「やれ、そこまでとは、さほどの女性になられましてか」「まして天生の美はしさ、氣高き、萬人に勝れて自然の容色、あれほど無うても濟むべき世の中、たいの美女として天晴れ見らるゝものを、それが却つて身の不運でがな、無理にも父御に一日、見せて進ぜたい」「承れば猶更、むざ／＼と名玉を砕く心地、そつと其のまゝ無事の御工夫、あられますまいか、叶はねばこそ死との一言、何として父が子に「いはれいでも、偕、そこぢや、兎も角も今あの乗物を追驅けた奴が歸つての上」

天下の執權職は譜代中の古參として、殆ど

井伊と酒井の兩家に持傳へしが、その下馬將軍といはれし酒井家も亦兎と唄はれし井伊家も、いつしか柳澤美濃守が、出頭第一の權勢に押退けられて、わざと當時は何事も知らぬ顔に打過ぎながら、流石に根強き古老の家柄、をり／＼雲間に漏るゝ稻妻の如く光りぬ、櫻田御門の豪端、その井伊掃部頭が屋敷より立出でし身分ありけの家來を望んで、眞一文字に驅出すや、下座のまゝの靱負、「これは越後家の舊臣にて八丈島の流人萩田主馬の家來、さりとて不相應なる御訴訟を申上ぐるものでなく、恐れながら御家柄を見かけましての義、一應お取調を願ひます。今は斷絶なれど外ならぬ越後家といひ、その名物の萩田主馬といひさては仔細ある奴、此のまゝの閑捨にもならじと引入られつ、あらためて問はれし時、靱負、いよく頭を伏しつゝ申立てぬ。

「萩田主馬にかぎり流罪の節、格別の御取扱ひを以て召連の家僕一人差許され、その御、主人に従ひ今日まで配所に育ちましたるもの、今回、また如何なる御赦免でやら俄の御召還しと相成、お船手向井將監様お屋敷の一室へ其のまま差置かれましたところ、十年振の夢心地、あまりの嬉しさに堪兼ねて若輩者の不量見、

ふと市見物いたしたき前後無差別に脱出ましたる者なれど、さて後悔の上、方角さへ不案内のまゝたゞ御當家様を幼少の頃子ども心に見覺え居りましての事、かく狼狽ながら身の御處分を願ひあげます」

#### 其二十四

越後家いまだ再興の沙汰もなく、また流人太叔の事もないうに、この萩田主馬が島より呼返されて現在お船手の向井家にあるとは案外、容易ならぬ事ぞと其のまゝ屋敷内の番所へ留置かれしが、やがて奥深き庭口より連込まれて、大地に蹲きながら見上ぐれば、それといはねど左右近侍の體に知らるゝ掃部頭、ぢき／＼の言葉を下しぬ、「餘の義を申すに及ばぬぞ、越後家の萩田主馬お船手向井將監が屋敷にあるとは、眞實か」靱負、こゝぞと額を大地に叩き付けぬ、「元來の下司、御作法も辨へず、たい有のまゝ、申上げます。十年以前に島へ連れられ、今日また島より連歸られましたもの、萩田主馬こと現在お船手向井將監様お屋敷に差置かれます義、相違御座りませぬ」「いかやうの體で、向井家に居るぞ」「はッ、六日以前より奥深い一室に主従もろとも、但し朝夕の食事は客分のやう心得ますれど、また何となう見張の體、嚴重

のやうに見受けまする。「主人將監主馬に逢うたか」「三日目の夜、俄に小書院へ迎へられまして、いろ／＼案外の仰せ、萩田主馬が身としては連も御請いたしかねる御難題のありし上、今回の義は柳澤美濃守様より御内意との事」「はて、莫な事ぢや、その難題の委細、其の方聞たか、存じ居るか」「萩田主馬、もし世にあらば、かやうの義、拙者風情の若輩者には夢、申聞けまじき筈ながら、幼少より島へ從ひ行きまして、十年の朝夕、影身に添ひます只一人の拙者、その難題いぢ／＼涙と共に委しう申聞けまして御座りまする」「風體にも似合ず出来た奴ぢや、流石、その者の教訓申妻が見ゆるぞ、許す、具さに憚らず申せ」鞭負、嬉しさに餘る兩眼の涙を漲らせて、恐る／＼大地を小膝に這出しぬ、「はッ、はッ」

南無三寶の乗物を追ひかけし藤助が、息切に帥歸つての言葉、みす／＼柳澤家の門内へ入りし後影を見ながら、さて問へば一切しらぬとの挨拶のみか、不意の足輕四五人に取圍まれて斯くの體と、引摺廻されし手足の擦れに村田三平、いよ／＼無念の血眼を割出しぬ、鞭負は猶更の絶體絶命、もはや強事こゝに休せし上はと、豫て主馬より言聞かされし最後の方便、井伊家に

驅込まんぞといふや否、三平、おもはず横手を拍て流石の名士の用意そこまでの工夫ありしかと、今更に感激の舌鼓を鳴しながら、わざと奴負を其のまゝの風體にて櫻田の門外へ送り行きつゝ、居敷より立出でし身分ありげの家に引入らるゝを見届けし後、自己また其の足にて町奉行へ驅込み、恐れ多くも當時御大老の御名前を僞稱りて後見の拙者不在中、去年お手数をかけし例の露な女を乗物にて何處へか奪ひ去りし曲者あり、附添の武士かやう／＼の年輩人相、御諮議を下さるべしと訴へ出でぬ。

また一方には俄に井伊家より向井將監方へ使者の口上、掃部頭近來閑散の身にて慰みのため諸國の風土を取調べ中ながら、生憎く遙の海上を隔てし八丈島の事はかり不案内の折柄、幸ひ其の島に十年來居住いたせし客人が當家に滞在せらるゝよし、定めて御迷惑なれど是非とも手前屋敷へ借用申したいとぞ言込みぬ、古老古參の家柄として譜代諸侯中の旗頭、たとひ當時出頭第一の手強き後柄ありとも、うかうかすれば踏込で家捜しも仕かねまじき敵手、ぐさど胸元を脊骨まで刺貫かれし心地して、お船手向井將監こればかりは得手に帆をかけた

つ遁出す道もなく、顔色を失ひぬ。

町奉行より驚いての内通と、向井將監が青くならで馳込みし委細に、今當世の太閤といはれたる流石の柳澤美濃守も、満面を皺めて死毒を舐めしが如き顔色ほつと大息を漏ししながら、さりとは天生の不敵さ、身も動かさず、もての妻し眼を輝かしつゝ、暫し思案の手に持てる扇子を軽く抛出しぬ「町奉行への事は其のままの聞捨て宜い、井伊家の返答も何の、たゞ一言に美濃守がするぞ、萩田主馬、彼奴は今夜のうち我が手の者に運び替ふところがあるぞ、や、どれ／＼、あまり射よげの的ばかりで、うかと弓勢を弛め過ぎた、はゝゝゝまた折角こまで取寄せた花なれど、もはや用はない、あのまゝ散して退ける分ぢや、はゝゝゝ」

## 其二十五

逢うて其の場に何といはるゝやら知らねどまた今日の明日は如何に成果する我身やら知らねど、なつかしや、幼少のまゝに別れて十年の春秋、夢も通はぬ八重の汐路を隔てし父の顔、さては朝夕その影身に添ひし人の面影まで、現在この日に見るかと思へば、いと猶更ら乗物の遅き心地して運ばれし甲斐もなう、その日は其

のまゝ奥まりたる一室に入られながら、たい世に過ぎたる山海の珍味に待遇され榮華の綾錦に包まれしばかりの事。

一夜を千夜の堪難さ、まどろみもせず明行く空を待兼ねて、今か／＼と思ひしに、其の日も夜に入りし後、五十あまりの仔細らしき老女、此方へと導きぬ。

借はと今更に飛立つ胸を押へて、引かるゝまに長き廊下傳ひの杉戸口を立出で、また二室ばかりの奥へ入るや否、その老女と立交りし三十前後の大男、びたりと閉ぢし障子の外に差控へながらの聲。

「その床の間の蒔繪函は、主人より今夜の贈り物、お見なされませし」

露女、ふと何気なく見返りて、片輪車の高時給せる手文庫の蓋、靜かに取退けつゝ見れば、白鞘の短刀一口。

流石に男優りの氣も心も張切りし天生ながら、はッと思はず閉ぢし兩眼、暫しの後やうやう開いて、居坐を直しつゝ、障子の外に向ひぬ。

「御前様より、この露へ、この下されものと

は一障子の外。

「貴女の御身、これまで別して主人、大切に存ぜられましたところ、俄かの義に、もはや今夜かぎり御不用との仰せ痛はしけれど、現世に申置かるゝ事あらば、いかな思召なりとも残されませい、これに罷り在る御介錯人、たしかに承はりまするぞ」

露女、其のまゝ羞怖きし兩の目より、無念の涙、怨恨の涙、さても總身を絞る口惜みの涙、はら／＼と膝に落しなが、ざりとて今更ら一言の未練もなく、千萬無量の胸に餘る數々を、ちツと堪へし不思議の女性あはれや今年ここに二十歳の春も春、やう／＼迎へしばかりの花も花、これほどの色香これほどの無慙に音もない散際、まして其の名の露雪に似たる生涯、草の葉末に宿りしよりも果敢なし。

「たとひ、御用になればとて、おめ／＼他手のまゝにはならぬ覺悟の女、それが御不用とあれば、猶更の事、また御主人へは一言二言、いひ残したい筈の身なれど、召使はるゝ人へは詮ない業、たゞ最後の體を失言もなう見られまして、春日山謙信公以来の武門嫡々、越後家に二代以前より頼まれ家來の縁魚川萩田主馬といふものゝ娘が、いかな死様いたせしかを傳へられませ、當世振に和かう御出世なされた御家中へは、

御手本になりませう事ぞ」  
時しも元祿の空に咲出でし名花一輪、惜しや得ならぬ匂ひ其のまゝ花舞も亂さず、そツと落果てぬ。

露女の死せし其の年の暮、その將軍家は俄の他界、さしも全盛を極めし柳澤美濃守は忽ち火の消えたるが如く、加之も井伊掃部頭が處決の下に一切の格式を採置され甲府の城を召上げられ世間の風聞に上りし百萬石の豊附まで取返されて、不首尾の家を我が子に譲りつゝ、別娶の後、やう／＼身を計されぬ。

さても物の哀れは三平と頼負、生涯を無妻のまゝ花も月もなき世ながら、互ひに兄弟の如く暮せしが、その後人しれず井伊家に嫁はれし萩田主馬、竟に越後家再興の宿望を達して作州津山に舊君の遺子を奉じ、加之も結城秀康公と等しく松平三河守を名乗らせし時、娘に代て斯る拾ひ子せりとて三平と頼負の兩人を連行きつつ、越路の雪に唄はれし名物は白髮童顔の唄、また山陽道に中國名物の名を唄はれぬ。

# 年譜

慶應元年

十一月、泉州堺に生る。幼名は龜太郎、後信と改む。

慶應三年

父を失ふ。母一人、子一人となる。

明治六年

堺の錦小路學校に入る。

明治十四年

九月上京。後、或は政治家たらんとし、或は實業家たらんとし、七轉八起具さに人生の困苦を嘗めた。

明治二十三年

十月、報知新聞社に森田思軒を訪ひ、その紹介にて同社に入り、校正掛となる。

明治二十四年

「報知叢書」(「報知新聞」の日曜附録)刊行のこ  
とあり、偶々、思軒居士のすゝめに従ひて、  
同叢書にちねの浦浪六なるペンネームを用ひ  
て處女作「三月月」を發表す。作出づるや、世  
の歡迎甚だしく、一躍紅露と並び稱せらる。

是作家浪六のそもくなり。

明治二十五年

十二月二十三、報知新聞社を退く。

明治二十九年

五月、東京朝日新聞社入社。  
文士生活三十餘年今日に至る。

(附記)

年譜に就て村上氏より、學校の教育なし。文  
士生活は三十餘年なれど其間も單に筆の人と  
して來らず、現在なほ然り、小説家たりしは其  
當時窮餘の一策、方便とせしが心ならずも今  
日に及べり。其三十餘年間文壇人に一人の交  
際なき事實は能く小生を辯解して居ります。  
かういふ事實ですから願くば小生の經歷とか  
年月に割當てた著書とかいふものを載せずに  
していただきたい。實際また書くにしても自  
分に正確な眼而もなし却て前後に間違ひ多  
かるべしと思ひます。たゞ著書の名だけ列挙  
していただきたいとの注意あり。仍て茲に  
は特に氏の許諾を得て上記の略年譜を掲げ  
併せて左に著書名を列記するに止める。尙餘  
點を附しあるものは著者自身が最も好愛せ  
られる書である。

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| ○三<br>井<br>女<br>之<br>助 | ○後<br>の<br>三<br>日<br>月 |
| ○鬼<br>奴                | ○奴<br>の<br>小<br>萬      |
| ○安<br>田<br>作<br>兵<br>衛 | ○破<br>太<br>鼓           |
| ○た<br>そ<br>や<br>行<br>燈 | ○夜<br>太<br>鼓           |
| ○梅<br>の<br>自<br>休      | ○深<br>見<br>鈴<br>重      |
|                        | ○後<br>の<br>梅<br>重      |

裸。牛。四。裏。天。赤。日。武。元。十。品。武。海。魚。古。八。煩。う。毒。金。大。石。う。浪。  
 體。肉。十。と。眼。蜻。本。士。祿。文。定。者。助。左。賀。軒。閑。む。國。惡。田。六。  
 の。一。七。武。士。道。女。字。め。質。賊。門。市。屋。院。記。婦。盤。魔。成。舟。筆。  
 間。斤。士。表。通。鈴。士。道。女。字。め。質。賊。門。市。屋。院。記。婦。盤。魔。成。舟。筆。

我。無。出。元。大。葛。原。や。明。大。花。浮。後。呂。草。鬼。當。浪。三。最。夜。仍。當。う。  
 五。祿。正。の。田。ま。治。阪。世。の。海。朱。助。左。衛。門。枕。あ。ざ。み。  
 十。遠。放。忠。五。細。甲。と。十。年。城。車。紙。賊。門。枕。あ。ざ。み。  
 年。慮。題。録。男。道。斐。心。年。城。車。紙。賊。門。枕。あ。ざ。み。

失。時。男。馬。人。豐。日。放。  
 敗。女。鹿。間。太。言。  
 の。代。の。野。學。閣。蓮。録。  
 英。雄。と。無。名。の。英。雄。  
 妙。人。稻。人。元。親。川。  
 法。田。祿。  
 院。間。の。名。  
 勘。一。物。  
 八。味。作。垢。男。鸞。德。